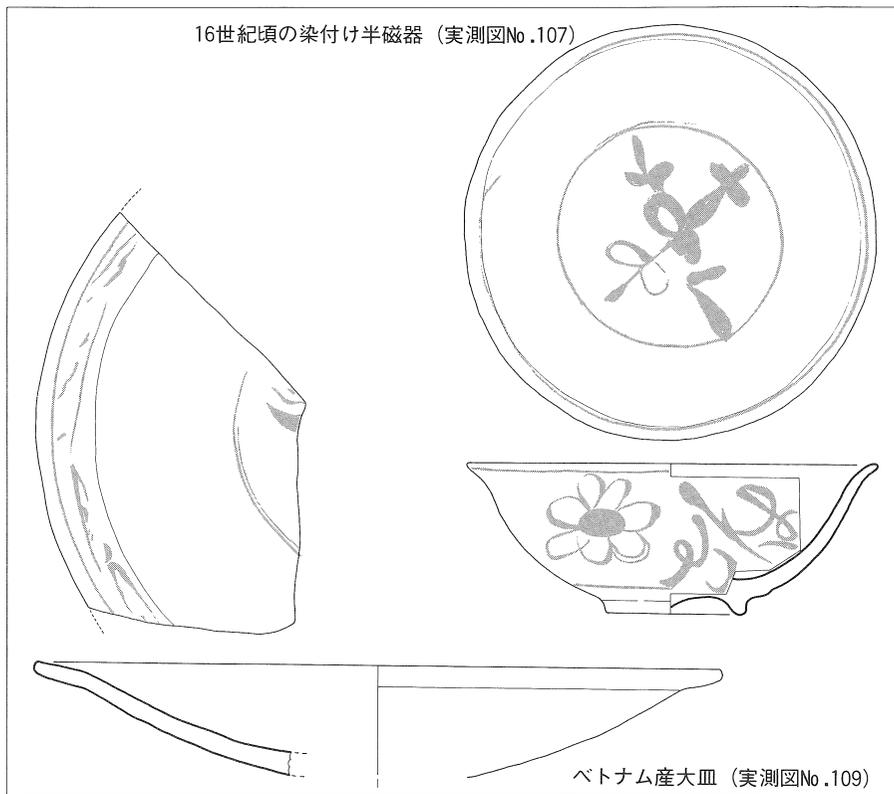


河浦町文化財調査報告第1集

かわ ち うら
河 内 浦 城 跡

熊本県天草郡河浦町大字河浦字湯立免所在の中世城跡



1990年 3月31日

熊本県天草郡河浦町教育委員会

序 文

河浦町教育委員会では、平成元年度に崇圓寺裏山の河内浦城跡比定地を発掘調査いたしました。ここに報告します『河内浦城跡』は、調査結果をまとめたものであります。

調査の結果、調査地は崇圓寺境内を含めた範囲で、文献に言う河内浦城の一部ではないかという結論に達しました。

さらに、堀切の落ち込みから出土しました多量の中世遺物から、城の実年代は15世紀中葉から16世紀後半という事も明らかになりました。

その他、出土遺物の中には中国やベトナム産の磁器類があり、天草氏の幅広い交易関係も、今回の調査でその一部を垣間見る事ができました。

この報告書が埋蔵文化財の保護に対する認識を深め、学術、研究上の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査に際しましては、熊本県教育庁文化課から御指導を賜り、出土遺物の鑑定では佐賀県立九州陶磁文化館の御協力を得ました。ここに心から厚く御礼を申し上げます。

平成 2 年 3 月 31 日

河浦町教育長 竹 口 英 国

例 言

1. 本書は、熊本県天草郡河浦町教育委員会が平成元年度に実施した、発掘調査の調査報告書である。
2. 発掘調査を実施した遺跡は、河浦町河浦に所在する河内浦城跡比定地である。
3. 出土遺物は河浦町教育委員会で保管し、主要遺物については、町立天草コレジヨ館で展示している。
4. 現地調査は、松舟博満氏（熊本県文化課嘱託）がその任に当たり、大田幸博氏（熊本県文化課文化財保護主事）の協力を得た。
5. 遺物の実測は大田氏が担当したが、陶磁器の最終的な鑑定には大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）の協力を得た。
6. 本書の執筆は大田氏を始めとして、松舟・池田裕之・鶴田倉造・隈 昭志の各氏が行った。さらに一部を御寄 求が担当した。執筆者名は文末に記している。
7. 遺構及び遺物の製図は、石工みゆき氏が行った。
8. 発掘調査過程の写真撮影は、河浦町教育委員会が行った。整理後の出土遺物の写真撮影は大田氏が行った。
9. 本書の編集は大田氏と溝口真由美氏が行った。

本文目次

第I章 調査の概要	1
第1節 調査の組織	1
第2節 調査に至る経緯	1
第3節 調査の工程	3
第II章 遺跡の概要	4
第1節 遺跡の位置と地理的及び歴史的（中世）環境	4
〔1〕河浦町	5
〔2〕旧一町田村	5
〔3〕下田城跡	5
〔4〕河内浦城跡	8
〔5〕崇圓寺	8
〔6〕天草学林跡	8
第2節 歴史的（上代）環境	9
第III章 調査の成果	11
第IV章 出土遺物	18
第V章 まとめ	55
第1節 調査結果	55
第2節 総括	60
付論 河内浦と天草氏 鶴田倉造	62

図版目次

第1図 河浦町位置図	4	第9図 土層断面図(2)	16
第2図 河浦地区地形図	6	第10図 土層断面図(3)	17
第3図 河浦地区（旧一町田村）字図	7	第11図 土層断面図(4)	17
第4図 周辺遺跡分布図	10	第12図 出土遺物実測図①	20
第5図 河内浦城跡周辺地形図	11	第13図 出土遺物実測図②	22
第6図 遺構全体図	13	第14図 出土遺物実測図③	25
第7図 調査区1遺構実測図	15	第15図 出土遺物実測図④	27
第8図 土層断面図(1)	16	第16図 出土遺物実測図⑤	31

第17図	出土遺物実測図⑥	・ ・ ・ ・ ・	33	第23図	出土遺物実測図⑫	・ ・ ・ ・ ・	43
第18図	出土遺物実測図⑦	・ ・ ・ ・ ・	34	第24図	出土遺物実測図⑬	・ ・ ・ ・ ・	48
第19図	出土遺物実測図⑧	・ ・ ・ ・ ・	36	第25図	出土遺物実測図⑭	・ ・ ・ ・ ・	50
第20図	出土遺物実測図⑨	・ ・ ・ ・ ・	38	第26図	出土遺物実測図⑮	・ ・ ・ ・ ・	52
第21図	出土遺物実測図⑩	・ ・ ・ ・ ・	40	第27図	出土遺物実測図⑯	・ ・ ・ ・ ・	53
第22図	出土遺物実測図⑪	・ ・ ・ ・ ・	42				

表 目 次

第1表	河浦地区(旧一町田村)字名一覧表	・ 7	第14表	出土遺物観察表⑨	・ ・ ・ ・ ・	37	
第2表	周辺遺跡一覧表	・ ・ ・ ・ ・	10	第15表	出土遺物観察表⑩	・ ・ ・ ・ ・	39
第3表	土塚(SK1~6)計測表	・ ・ ・	15	第16表	出土遺物観察表⑪	・ ・ ・ ・ ・	41
第4表	土層観察表 1	・ ・ ・ ・ ・	16	第17表	出土遺物観察表⑫	・ ・ ・ ・ ・	44
第5表	土層観察表 2	・ ・ ・ ・ ・	17	第18表	出土遺物観察表⑬	・ ・ ・ ・ ・	47
第6表	出土遺物観察表①	・ ・ ・ ・ ・	19	第19表	出土遺物観察表⑭	・ ・ ・ ・ ・	49
第7表	出土遺物観察表②	・ ・ ・ ・ ・	21	第20表	出土遺物観察表⑮	・ ・ ・ ・ ・	51
第8表	出土遺物観察表③	・ ・ ・ ・ ・	23	第21表	出土遺物観察表⑯	・ ・ ・ ・ ・	54
第9表	出土遺物観察表④	・ ・ ・ ・ ・	24	第22表	遺物年代別分類表	・ ・ ・ ・ ・	56
第10表	出土遺物観察表⑤	・ ・ ・ ・ ・	26	第23表	土師器(皿)形態分類表	・ ・ ・	57
第11表	出土遺物観察表⑥	・ ・ ・ ・ ・	28	第24表	土師器(坏)形態分類表	・ ・ ・	58
第12表	出土遺物観察表⑦	・ ・ ・ ・ ・	32	第25表	土師器(皿・坏)法量表	・ ・ ・	59
第13表	出土遺物観察表⑧	・ ・ ・ ・ ・	35				

写 真 図 版

図版 1	一町田川の東岸より崇圓寺を望む(寺の裏側が城跡)		図版10	調査風景
図版 2	城跡尾根筋のI郭(I郭-②からI郭-①を望む)		図版11	出土遺物(1)
図版 3	北西側帯曲輪		図版12	出土遺物(2)
図版 4	堀切①		図版13	出土遺物(3)
図版 5	調査区1		図版14	出土遺物(4)
図版 6	土塚中の墓碑		図版15	出土遺物(5)
図版 7	堀切②(北側より望む)		図版16	出土遺物(6)
図版 8	堀切②と播鉢状の掘り込み			
図版 9	調査区2			

第I章 調査の概要

第1節 調査の組織

調査主体	河浦町教育委員会
調査責任者	竹口英国（河浦町教育長）
調査担当者	松舟博満（熊本県文化課嘱託） 大田幸博（熊本県文化課文化財保護主事）
調査専門員	隈 昭志（文化課教育審議員） 桑原憲彰（文化課文化財調査第2係長） 鶴田倉造 池田裕之
調査機関	河浦町文化財保護委員会
協力者	手柴清人（天草山崇圓寺：責任役員代表） 黒田裕司（三加和町教育委員会）
調査事務局	御寄 求（教育課長） 川崎富人（教育課長補佐）
報告書作成	大田幸博（熊本県文化課文化財保護主事） 松舟博満（熊本県文化課嘱託） 石工みゆき・溝口真由美・宮崎敬子（熊本県文化課臨時）
整理作業員	〔熊本県文化課人吉調査事務所〕 尾方信子・迫田洋子・林 枝三・林 郁子・田中里美・迫田照代・緒方千代
発掘作業員	酒井健一・小山孝志・小山エミ子・坂井スミ子・坂井美笑・小山テルエ 酒井六女

〔 御 寄 〕

第2節 調査に至る経緯

〔 1 〕河浦地区では、馬場集落の西側山地中に、「城山（しろやま）」という字名を残す神社の敷地（標高50m）があり、地元では、これを『古城考』にいう天草氏の本拠地「下田城跡」と考えてきた。この城跡については、熊本県教育委員会発行の『熊本県の中世城跡』（熊本県文化財調査報告第30集 1978年3月）に概要が述べられている。城跡地の特徴として、城山の北西方向を下る迫地に、数十段に及ぶ階段状地形が重なっており、それぞれの段差面に高さ1～2.5 mの石垣が存在する。これらの箇所も城跡の遺構と見なす向きが郷土史家の一部にあり、県内最大級の山城として新聞報道された事もある。しかし、この点に関しては同報告書に迫地を利用した棚田形式の水田跡で、城跡の遺構とは無関係との判断がなされている。

その後、10数年を経て、天草コレジヨ館の開館を2年後に控えた昭和63年に、天草氏関係の出土品の展示を望む声の関係者の間から出された。城山を再調査し、出来れば一部を発掘して下田城跡の解明を行うと共に、展示のための出土品を確保したいというものであった。この計画に対し調査費も計上された。そこで平成元年7月17日、熊本県文化課に河教第 585号で城山調査のための職員の派遣申請を依頼した。これを受けて、9月5～6日に大田幸博氏（熊本県

文化課文化財保護主事)と菖蒲和弘氏(熊本県文化課嘱託)が河浦町を訪れた。町から鶴田倉造氏(熊本史学会員・郷土史家・宇土市文化財保護審議委員)と町教委が同行し、雨の中、詳細な現地調査が行われた。その結果、踏査内容は10数年前の調査と同一で新しい所見は無く、地形観察から中心部の神社敷地のみが、中世城跡(山城)としての様相を呈する事が再確認された。

翌日、町教委で開かれた話し合いでは、早急に神社敷地の一部を試掘したらどうかとの意見もでたが、山稜末端部の低山に築かれた山城とはいえ、かなり奥まった所に所在する城跡ゆえに機械力の導入は無理で、人力のみの困難な調査になる事が予想された。同時に調査準備期間の不足も問題となった。結局、調査体制の問題もあり、慎重を期して調査日ともども城山調査は翌年度に持ち越す事になった。

[2] 平成元年度の春、河浦地区の崇圓寺で裏山を墓地に造成するという計画が持ち上がったが、この寺と裏山については、従来から「河内浦城跡」と言う伝承がある所で、前述の『熊本県の中世城跡』には馬場集落の城山関連城跡地として紹介されている。

そこで町教委では、寺側に対し、墓地造成に際し事前調査の必要なことを伝えた。ほどなく、寺側で裏山の造成予定地に繁茂する雑木を伐採したところ、その地はまさしく中世城跡地の帯曲輪にふさわしい地形である事が判り、同時に「富岡城跡(近世城跡)」(天草郡苓北町)出土の瓦に類似するものが、かなりの量で散布しているのが確認された。

町教委では、この結果に興味を持った鶴田氏と話し合い、早急に崇圓寺側へ発掘届出書を提出するように伝えた。

これを受けて、寺側から平成元年12月15日に発掘届出書が提出されたので、町教委では12月18日に県文化課へ同届出書を進達した。平成2年1月18日、県文化課から大田氏・松舟博満氏(熊本県文化課嘱託)を迎え、町教委と鶴田氏も加わって試掘調査を1月19日まで実施した。

その結果、帯曲輪の南端域から堀切の一部と見られる落ち込みが確認され、埋土からは青磁の破片や糸切りの土師皿・坏が出土した。

同時に調査区の崇圓寺の裏山を精査した所、帯状形の尾根筋は南北に二段の削平地となっており、尾根筋の裾部には南側から西側にかけて帯曲輪状の削平地が巡っている事が確認された。一方、北側の鞍部には不完全ながら堀切状の仕切りもあり、裏山が一応、伝承にいう城跡地としての体裁を有していることが判明した。

同夜、この試掘結果をもとに町教委で行われた話し合いでは、今後、試掘箇所を中心に本調査を行い、もし重要な遺構が検出された場合は、寺側に墓地造成の設計変更を求める事とし、調査費用については、従来、計画していた町教委の城山調査費をこれにあてる事などが決められた。本調査は、試掘調査と同一メンバーで2月10日～2月16日まで行われた。

[御 寄]

第3節 調査の工程

発掘調査は平成2年2月10日～2月16日まで行い、続いて平成2年3月21日～3月22日に地形測量を行った。

〔発掘調査〕

調査に際し、試掘調査で遺構の存在が明らかになっていた南側帯曲輪に、調査区1を設定した。重機で表土を剥いだ後は、人力で堀切を底面まで掘り下げたが、その際に堀切を切り込む落ち込みから、土師器を中心とした中世遺物が出土した。さらに堀切のテラス状地形から土塚を検出した。

次いで、南西側帯曲輪にトレンチ状の調査区2を設定し、人力で地山まで掘り下げた。その結果、南西側帯曲輪は客土による造成地である事が判明したが僅かであり、自然地形を利用したものである事がわかった。

〔地形測量〕

尾根筋に沿って基準杭を通し、これから90度の角度で派生杭を斜面部や裾部の帯曲輪におろした後、城域を200分の1の縮尺で測量し、1mごとのコンタを巡らした。

発掘調査日誌

- 2月10日（土） 北側尾根筋から搬入した重機（バック・フォー）により南側帯曲輪（調査区1）の表土を剥ぐ。防災面から、崖面に接する南縁は1m幅のベルトを残した。
- 2月11日（日） 調査区1の堀切は2段掘りになっている事が判明した。上部の北側テラス状地形から地山を切り込む土塚が検出された。堀切の北壁を切り込む落ち込みから、多量の土師器が出土しはじめる。
- 2月12日（月） 堀切の落ち込みから青磁や白磁が出土した。調査区1の全容が明らかになりつつある。
- 2月13日（火） 調査区1を完掘した。堀切の落ち込みから出土した遺物がコンテナ5個にも及び、調査者を驚かせる。
- 2月14日（水） 南西側帯曲輪にトレンチ状の調査区2を設定し、人力で掘り下げる。
- 2月15日（木） 調査区2は客土による造成地であることが判明した。午後から、北側鞍部の堀切（調査区3）にトレンチを設定して掘削を始める。
- 2月16日（金） 調査区2を主として、遺構の実測を終了する。調査区3の堀切は、調査結果から自然地形を利用したものと判明した。

〔 松舟・大田 〕

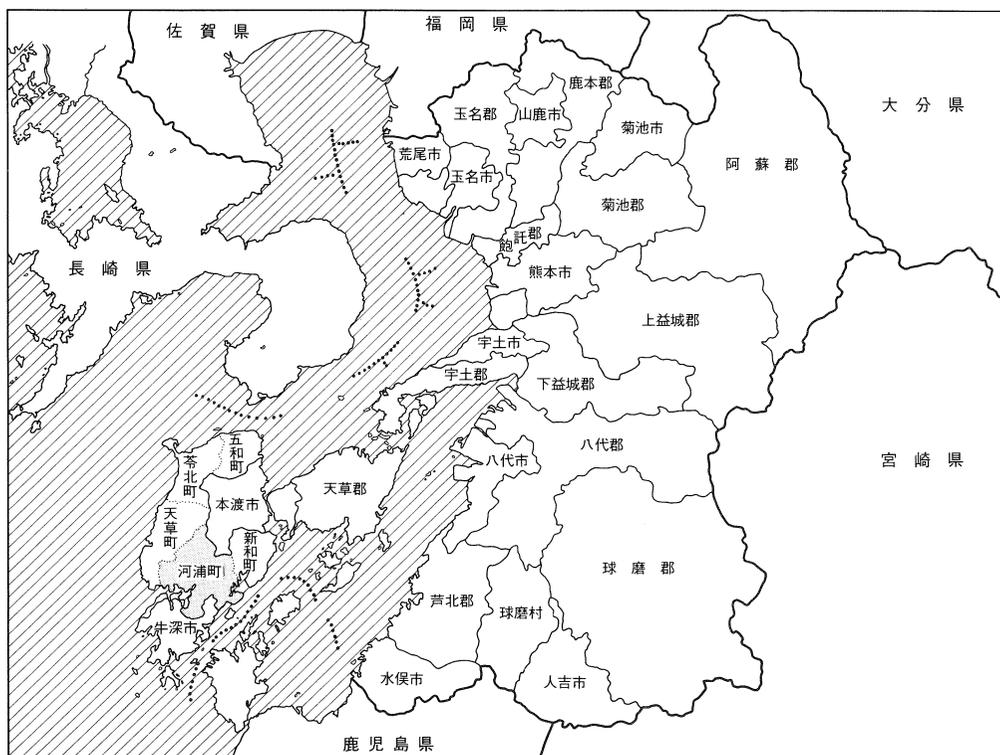
第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と地理的および歴史的（中世）環境

城跡は熊本県河浦町大字河浦字湯立免（ゆだちめん）に位置する。城跡は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図『河浦』に位置を求めれば、図幅北から3.5cm、西から0.4cmの所があり、調査区の最高所は標高40.505mを測る。狭義的には崇圓寺の裏山である。

河浦町は面積119.24K²で、天草郡の下島の中央に位置し、東は八代海、南西は東シナ海に面する。町の中心部の河浦（旧一町田村）は、その昔（中世）河内浦^{かわちのうら}と呼ばれた所で、延元2年(1337)から、河内浦三郎入道が支配し、後に天草伊豆守鎮種が城主となって天草島、長島、獅子島を統治している。今日、河浦の地にはこれらの歴史を物語るように、下田城跡と河内浦城跡の中世城跡が残っている。

わが国にキリスト教が伝来すると、天正19年(1591)に天草の地で天草学林（コレジヨ）が開かれ、宣教師養成教育が行われた。同時に金属活字印刷所が併設され、活版による印刷本（天草本）が出版された。天草学林の所在地については河浦の地とする節が有力である。



第1図 河浦町位置図

〔 1 〕 河浦町

天草・下島の中央部から南部にかけて立地しており、行政区域では北に本渡市、北東に新和町、北西に天草町と接し、南は一部、羊角湾を挟んで牛深市に接する所にある。

面積119.24K㎤で、気候は天草の中では内陸性の特色を持ち、冬期の降雪量も少なくない。

明治22年(1889)の町村制施行で、一町田村(河浦・今田・白木河内の3ヶ村が合併)・新合村(新合村と立原村が合併)・久留村・崎津村・今富村・宮野河内村の6ヶ村となったが、明治29年に崎津村と今富村が合併して富津村に改称した。次いで、大正10年(1921)に久留村が一町田村に編入され、4ヶ村となった。そして、昭和29年(1954)にこの中から一町田村・新合村・富津村の3ヶ村が合併して、現在の河浦町となった。昭和31年に宮野河内村を編入し、翌32年に境界変更により、牛深市二浦町の路木地区を編入した。

〔 2 〕 旧一町田村(現在は河浦町河浦)

天草最長の川として知られる一町田川(流路13,600m)の上流域から羊角湾の河口となる下流域一帯に開けた地である。中世では天草氏の領内本砥島のうちで「河内浦(かわちのうら)」と称された。『志岐文書』の天草種有讓状案〔貞永2年(1232)2月16日付け〕によると、種有が嫡子播磨局に本砥島地頭職を譲り渡した時、「かうちのうら」は一族の駒王に分割されている。

永禄12年(1569)にルイス・デ・アルメイダが天草鎮尚に招かれて、河内浦を訪れた事により、天草におけるキリシタン伝導の中心地となった。慶長国絵図には「河内浦」と記され、正保郷帳に村名が見える。『天草近代年譜』によると正保2年(1645)に下田村を分村している。『国志草稿』に「一町田村」として記され、「高393石1斗余、男女数563」とある。文政(1818～1830)の頃には「高418石4斗余、人数1,246」、慶応4年(1868)の天草郡村々手鑑によると「田38町9反6畝余、畑11町1反6畝余」とある。

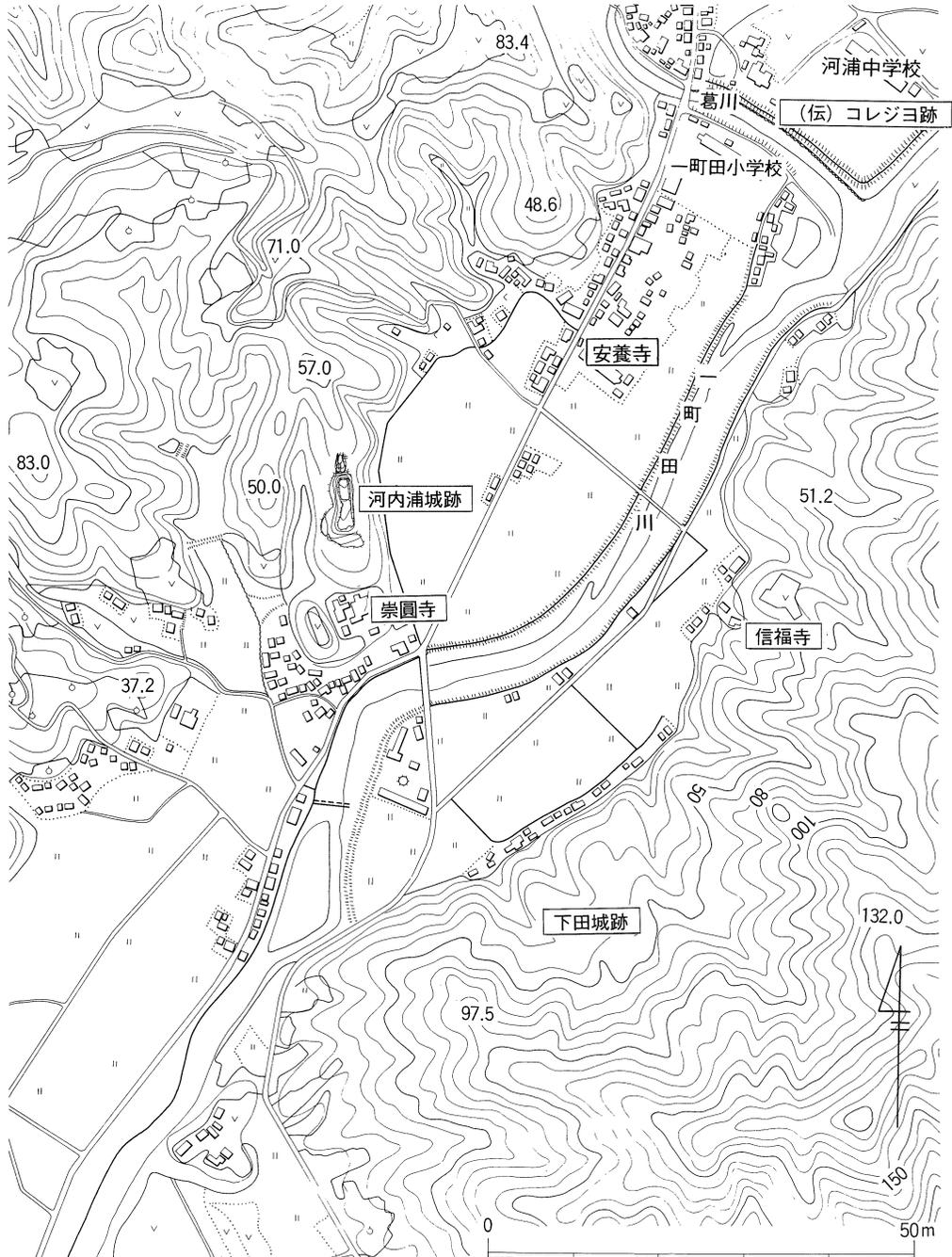
明治9年(1876)に下田村と合併し、河浦村となった。

〔 3 〕 下田城跡(踏査記録)

下田・馬場集落の南東側背後の山が城跡である。標高50mの尾根筋の山で「城山」という字名が残っている。円形状の平坦地を有する山頂部分は、切り開かれて神社の敷地となっている。山頂直下の斜面には「削り落とし」の跡が認められ、急峻である。同斜面に点在するバスケットボール大の割石は、かつてこの斜面部を取り巻いていたという説がある。南東側の鞍部は幅20～30mの窪地となっていて、北東方向より下ってくる尾根筋と接している。現在、窪地は畑地に利用されているが、堀切の埋没が考えられる。北西方向に下る斜面部には、迫地を主として数十段に及ぶ階段状地形の重なりがある。それぞれの段差面には高さ1～2.5mの石塁が残っている所から、昭和51年には「石塁を有する県下最大級の山城」として新聞に報道されたことがあった。しかし、その後の調査で、この階段状地形と石塁は、天草地方に特有な棚田形式の水田跡であることが判明した。

城跡の北西方向0.5km先にも、一町田川を挟んで城跡と伝えられる所がある。現在、この地は「崇圓寺」の敷地となっている。

『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告第30集 熊本県教育委員会 1978年



第2図 河浦地区地形図



第3図 河浦地区（旧一町田村）字図

No.	字 名	No.	字 名	No.	字 名	No.	字 名	No.	字 名	No.	字 名	No.	字 名
1	竹崎	31	長染	61	元下田	91	築地	121	岩山	151	間入道	181	市ノ道
2	平迫	32	城山	62	中山	92	松下	122	石ヶ平	152	屋敷山	182	高野
3	赤崎	33	下馬場	63	上道	93	平野	123	上床口	153	野岸	183	榎ノ尾
4	円寺山	34	清瀧	64	妙見	94	飛永	124	弥佐久保	154	迫日	184	棋木山
5	羽戸	35	上馬場	65	小堀里	95	永野崎	125	仙人塚	155	椿ノ戸	185	小久保
6	弁天峠	36	志戸	66	大丸	96	黒岩	126	同力	156	前迫	186	布田金
7	蛸洗河内	37	土石川	67	城軒	97	善太	127	女郎迫	157	三本松	187	中久保
8	釜	38	向山	68	木下平	98	曲河内	128	屋敷	158	九蔵迫	188	大久保
9	下新田	39	石堂	69	光尾	99	大曲	129	長渡瀬	159	上ノ迫	189	滝金
10	中新田	40	鳳化平	70	牧ノ平	100	俣久保	130	狩保山	160	亀ノ甲	190	尖山
11	上新田	41	田重	71	笠木	101	八久保	131	赤松	161	長尾	191	萩原
12	浜ノ原	42	唐子田	72	是谷	102	八久保	132	深迫	162	牛牧	192	円助
13	水平	43	那木葉山	73	牧ノ内	103	広屋敷	133	奥河内	163	長林	193	松ヶ平
14	獅子仁田	44	文ノ迫	74	上黒岩	104	柳葉山	134	日当	164	徳道	194	猿舞
15	冷ノ河内	45	大石渡	75	城木尾	105	椎木迫	135	大迫	165	徳道山	195	脇ノ河内
16	万寿山	46	湖山	76	黒岩	106	永野	136	石原	166	矢落	196	間道
17	八郎林	47	高尾	77	柳迫	107	永野平	137	日影	167	水ノ久保	197	国ヶ平
18	松ノ平	48	茗荷	78	惣辺石	108	辯の平	138	粟久保	168	銭磯	198	三嶽
19	上仁田	49	石山	79	大平	109	片白	139	大敷	169	孫谷	199	権七木場
20	仁ノ迫	50	大田代	80	礼婚	110	二三迫	140	上行道	170	山岩	200	洞ヶ平
21	石間垣	51	入道	81	小河内	111	鍋割	141	下行道	171	中迫	201	池久保
22	宇津木内	52	折尾	82	大坪	112	古野	142	萬寿迫	172	障子平	202	池ノ平
23	金ノ迫	53	伊勢尾	83	四反田	113	原田	143	割狩	173	山戸	203	尻無
24	鳥居尾	54	倉田	84	宇曾越	114	小松尾	144	京林	174	岩戸	204	萩ノ木場
25	鳶の巢	55	中村	85	繁尾	115	棚目	145	大原	175	大戸	205	僧見嶽
26	吉原	56	妻村	86	平野	116	市口	146	前田	176	大平屋敷		
27	丸山	57	木場口	87	牧ノ平	117	野下	147	葛河内	177	小平		
28	一本松	58	下津原	88	平畑	118	田の迫	148	二柿	178	六平		
29	赤松原	59	湯立免	89	丸塚	119	統畑	149	日向山	179	焼野		
30	高染	60	吉原	90	六反田	120	踊原	150	馬屋平	180	金山		

第1表 河浦地区（旧一町田村）字名一覧表

〔 4 〕河内浦城跡（一般的解釈）

『志岐文書』の「一色道猷書下」〔建武4年(1337)5月3日付け〕に「山鹿兵藤太郎高弘申肥後国天草郡本砥島并亀河地頭職之事、請文披見訖、兩度催促之処、河内浦大夫三郎入道構城郭、尚使者放矢、致自放火」とある。城跡に崇圓寺がある。付近の字「城山」に下田城跡があり、両城を併せて下田城、河内浦城とも総称される。

河内浦城と下田城は同一の城とも言われるが、ルイス・フロイスの『日本史』には「天草氏の領内には35の村落と4つの城があり、かの殿の主な居宅は河内浦という地にあり」と書かれており、天草氏の4つの城は本渡城、久玉城、河内浦城、下田城のことと思われる。当時は、河内浦城と下田城とが区別されていたと思われる。

肥後国大道小道等調帳〔慶安4年(1651)〕に「下田古城 山城曲輪式百七拾間 右之古城より下田村迄式町」とある。『天草国土考』によれば天正16年(1588)に没落廃城になったという。

(注) 上記の文が河内浦城に対するこれまでの、一般的な解釈である。下田城と同一の城と見なす一方で、下田城を「城山」の地とし、崇圓寺一帯を河内浦城とに分けて考える向きもあり、文面からも伺える様に、今一つ不確かである。さらに、崇圓寺を河内浦城に比定してある。

〔 5 〕崇圓寺

天草山と号し、浄土宗の寺である。正保2年(1645)に天草・初代代官の鈴木重成が創建したもので、天草4ヶ本寺の1つである。開基は筑後善導寺から招かれた伝誉で、「鳥鏡」によれば、慶安4年(1648)、平底村のうちに寺領30石を与えられ、下島中南部の教化に中心的役割を果たしている。天草寺社御証文之写に「境内山林壺町下田両村之内、古城長百五拾間支配、但西は下田村之内風呂の谷限、東は壺町田村之内ゲツ原田の岸切、北は堂の尾谷切、南は川はた道切之事」とある。

伊能忠敬の『測量日記』に文化7年(1810)10月3日「止宿浄土宗御証文天草山護国院崇圓寺」とみえる。

〔 6 〕天草学林跡

天正19年(1591)肥前有馬領加津佐より天草に移されたイエズス会のコレジヨ跡である。ルイス・フロイスの『日本史』に「天草の島が学院場所して選ばれた」との記事がある。跡地についてはいくつかの候補があり、定かでないが、その一つに河浦説があげられる。これは当時の天草氏の本拠地が河内浦であることや、ヨーロッパ人が河内浦を「天草」と称していたことを根拠とする。

天正20年(1592)、ヴァリニャーノの『日本諸事要録補遺』に「学院が天草に移された。イエズス会員の50名以上がそこに居り、約40名は修学中の学生である。異教徒は誰も天草に入れないから、司祭や修道士達は自由で、日本の他のいかなる地よりも気儘に振る舞える」と言う旨

の記述がなされている。

同じく、前述の『日本史』によれば、天草久種が提供した家屋を含め、60人近いイエズス会員などを収容する学院が設立されたと言う。

コレジヨはキリシタンの最高学府で布教者養成・一般教育などが行われたが、天草学林には天正遣欧少年使節の一行がヨーロッパより持ち帰った印刷機も移され、天草本とよばれる「伊曾保物語（イソップ物語）」「平家物語」等が印刷された。少年使節の伊東マンショらの入学もあり、一時は総勢百名を越える在校生をかかえたとされる。しかし、大勢のイエズス会員が1ヶ所に集中する事は豊臣秀吉の怒りに触れると危惧され、分教された。後に再統合されたが、慶長2年(1597)に長崎に移転したと伝えられる。

[大 田]

第2節 歴史的(上代)環境

行人岳に源を発する一町田川に今田川と葛川が合流し、羊角湾へ注いでいる。その流域に多くの遺跡が点在し、合流地点に河内浦城をはじめキリシタン伝承の遺跡が残っている。

縄文時代の遺物は数多く確認されているが、旧石器時代の遺物は未だ確認されていない。

縄文時代の遺跡は一町田川上流に、松下遺跡・南尾遺跡・今田川上流に茶園原遺跡など多数の遺跡がある。土器の出土が極端に少なく、全遺跡に石鏃の検出が見られ、狩猟を主体とする生活をしてきたことが予測される。

弥生時代の遺跡と推定されるのは、悪峰遺跡のみで、今後発見されると思うが、もともと天草地方への弥生式文化の伝播は弥生中期以降と考えられ、水田耕作より畑作主体であると報告されている。

古墳時代の遺跡は同じ一町田川上流に小塚古墳があり、その周辺に3～4基が所在するといわれているが調査はされていない。また、羊角湾の湾口に鬼塚古墳があり、昭和57年に調査され6世紀後半から7世紀前半と確認されている。

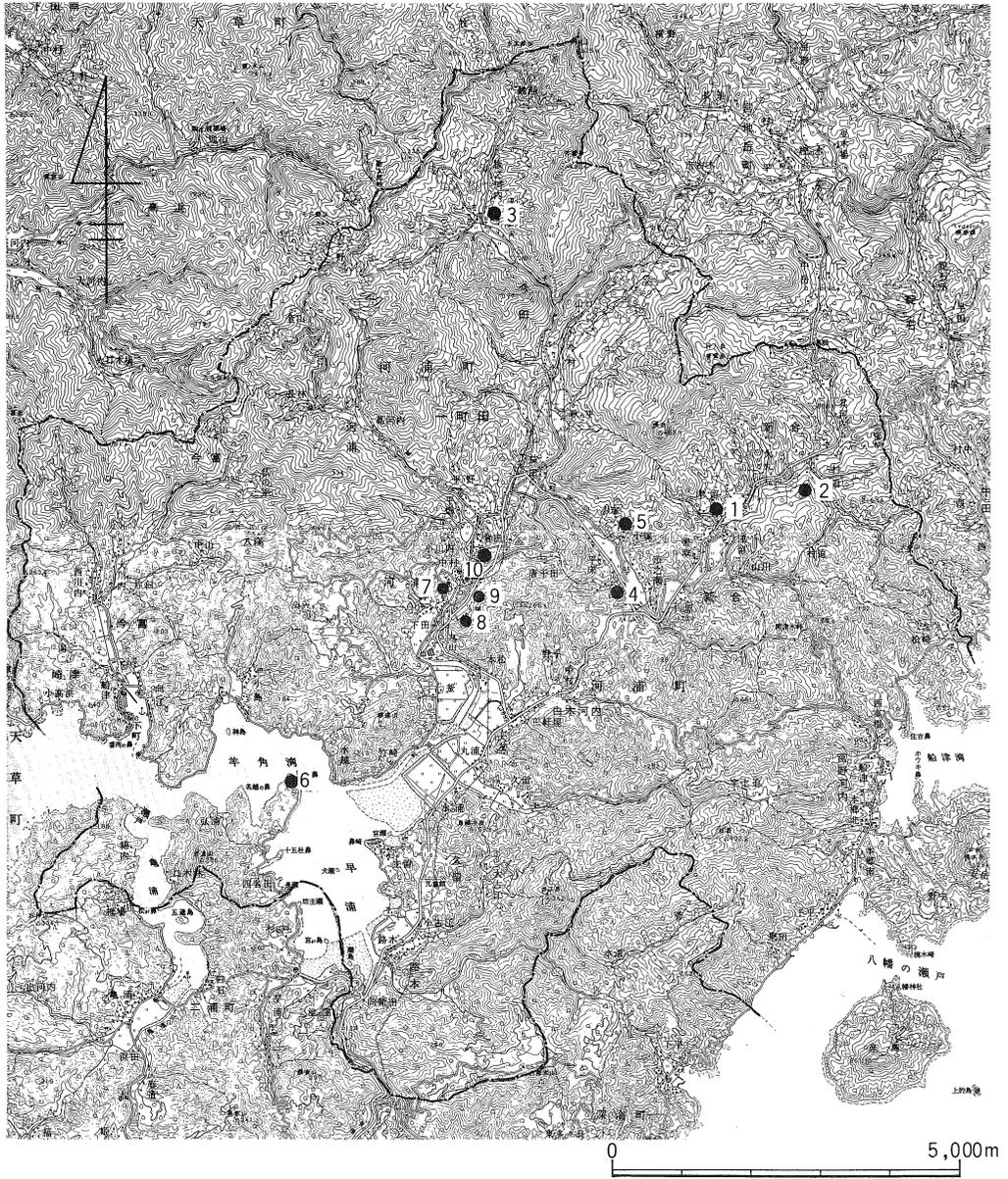
歴史時代になると天草氏の興亡と共に文献にも登場するようになり、居城となった河内浦城の発見により、関連するコレジヨや教会堂跡等の調査研究が期待されている。

[池 田]

参考文献：河浦町郷土史第3輯 河浦町教育委員会 1962年

〃 第4輯 〃 1964年

〃 第5輯 〃 1981年



第4図 周辺遺跡分布図

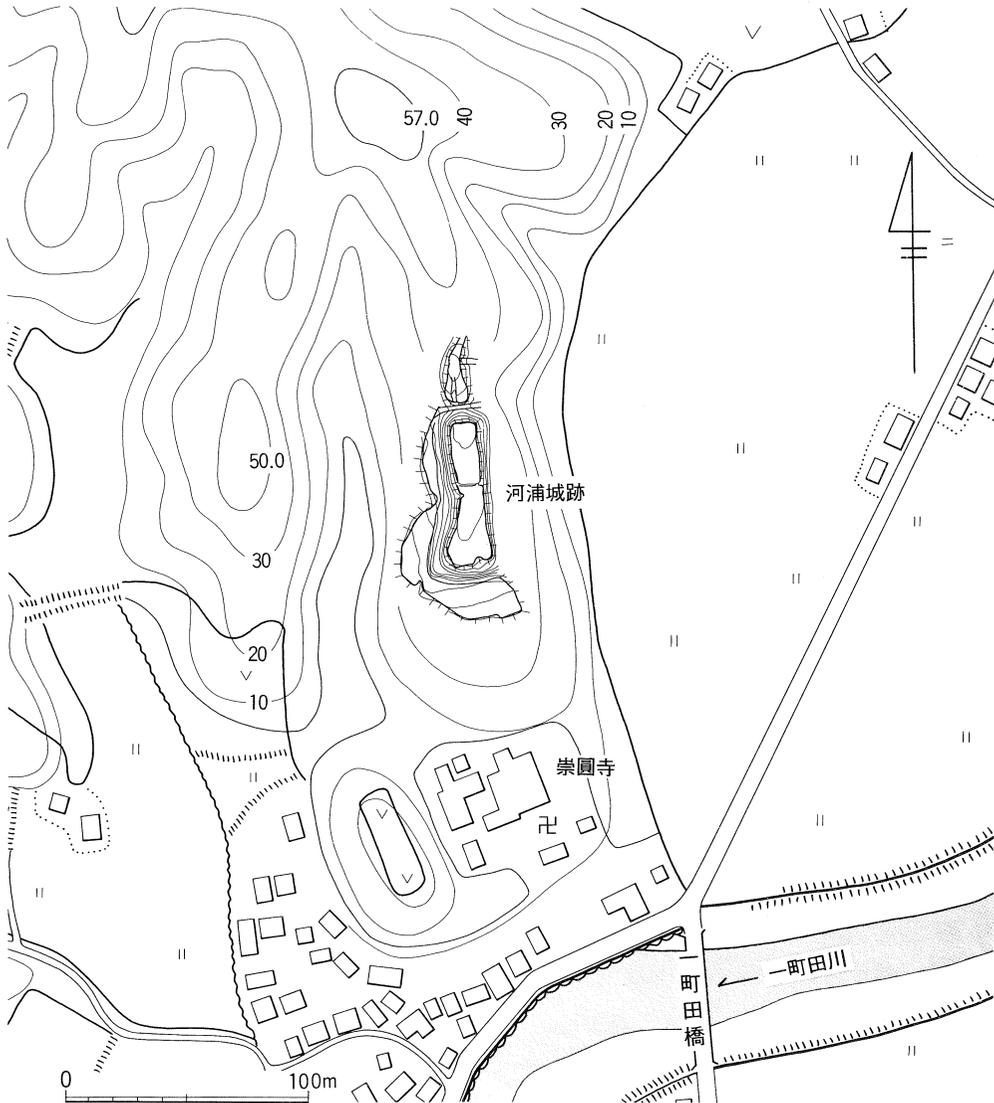
No.	遺跡名	所在地	備考	No.	遺跡名	所在地	備考
1	松下遺跡	河浦町新合松下	縄文遺跡	6	鬼塚古墳	河浦町今富鬼塚	古墳
2	南尾遺跡	〃 立原上南尾	縄文遺跡	7	河内浦城跡	〃 下田	城跡
3	茶園原遺跡	〃 今田茶園原	縄文遺跡	8	下田城跡	〃 下田馬場	城跡
4	悪峰遺跡	〃 新合平床	弥生遺跡	9	信福寺	〃 下田馬場	天草氏菩提寺
5	小塚古墳	〃 新合小塚	古墳	10	コレジヨ跡	〃 倉田	(伝承)

第2表 周辺遺跡一覧表

第Ⅲ章 調査の成果

崇園寺の裏山が城跡地である。河浦町の大部分を占める標高200~300mクラスの高峻地帯が、開析谷を流れる一町田川の河口近くに末端部をのぞかせる所で、狭義的には南北方向に主軸を持ち、二股に分かれた帯状形の東側尾根筋にあたる。

城跡としての範囲は、末端部の南側から尾根筋の北へ約90mの鞍部に残る堀切までである。これより北側へは延々と長さ200m近い尾根となり、最終的に前述の高峻地帯に吸収される事になる。堀切より北側の尾根筋は、人工の手の加わらぬ、全くの自然地形である。



第5図 河内浦城跡周辺地形図

城跡の地形を説明するにあたっては第6図に記入した名称に従う。

〔 I 郭一① 〕

帯状形の尾根筋を削平したもので、長方形の平坦地が形造られている。南北の長さ25m、東西の幅10.5mの規模で、北東隅に城跡地の最高所がある（標高40.505m）。

〔 I 郭一② 〕

I 郭一①の南側にある段落ちの平坦地で、I 郭一①とは1.00～1.30mの比高差がある。長靴状の形状を呈し、南北の長さ33m、東西の幅9.5～18.0mの規模で、郭は北側から南側へ漸次、末広がり状態となる。

〔 主郭周辺の斜面 〕

東側斜面が急峻な崖面を有する自然地形（水平距離4mに対し、4mの比高差）である他は、三方、いずれも斜面部が削り落とされた人工的な地形となっている。削り落としの割合は、堀切に面する北斜面に最も顕著である。

〔 南側帯曲輪 〕

I 郭一②の南側斜面を大きく削平した曲輪で、I 郭一②とは北縁で7mの比高差がある。拳から手首を横から眺めたような形状を呈し、西端の括れ部までの東西の長さは40mを測り、南北幅は東端で16.5m、中央部で最大14.5m、西端で4mとなる。地表面は北から南への緩傾斜地となっており、山付きの北縁と端部の南縁とでは2mの比高差がある。

〔 南西側帯曲輪 〕

I 郭一②の南西側斜面を削平した曲輪で、I 郭一②とは7mの比高差がある。南側で丸味を持ち、北側に括れを有する変形的な長円形の形状を呈し、主軸方位はN20° Eを示す。南北の長さは35mを測り、東西幅は北端で1.5m、中央部で最大11m、南端で8mとなる。地表面は東から西への緩傾斜地で、山付きの東縁と端部の西縁とでは2mの比高差がある。

〔 調査区 2 〕

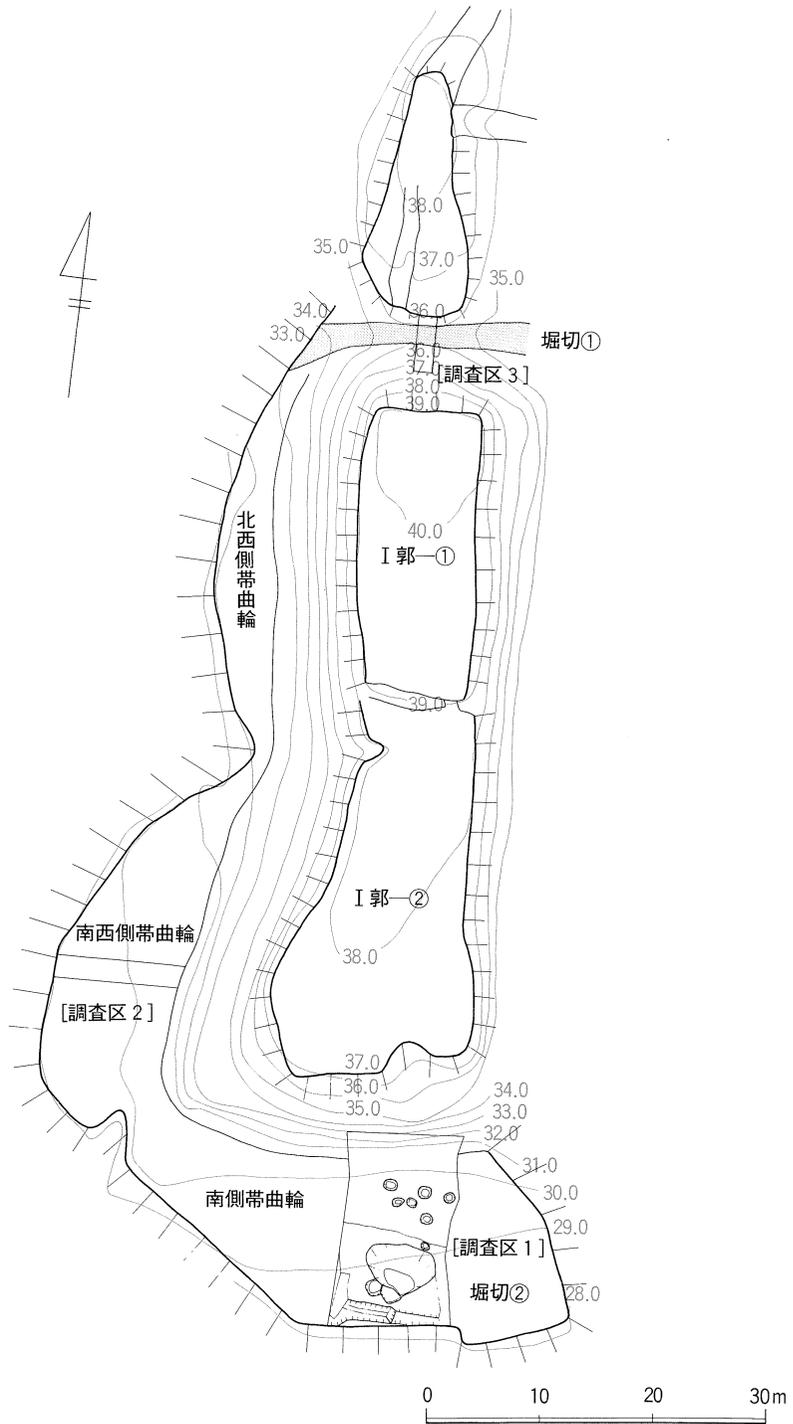
南西側帯曲輪に設定したもので、10.5×2mの調査区である。当初、曲輪の主軸方位に沿う空堀の埋没が考えられたが、調査の結果、礫層の地山は緩傾斜地である事が判明し、遺構は存在しなかった。

〔 北西側帯曲輪 〕

I 郭一①の西側斜面を削平した小規模な曲輪で、間に括れ部を挟んで南西側帯曲輪に連続する。I 郭一①とは東縁で6.5mの比高差があり、主軸方位は尾根筋に沿った南北方向にある。細長い長円形を縦に2分した様な形状を呈し、南北の長さは38mを測り、最終的には城跡北端の堀切と繋がっている。東西幅は北端と南端で1.5m、最大で5.5mとなる。

〔 堀切①（調査区 3） 〕

尾根筋の北側鞍部に残る自然地形を利用した堀切である。堀切は凹地状になった尾根筋の鞍



第6図 遺構全体図

部に手を加える程度に止まっており、やや消極的な造りである。

堀切の走行は東西方向にあり、尾根筋と直交する。堀底の幅は2 m弱で、現認できる水平距離は6 mを測る。堀底は東西両端において豎堀の形状に変化しているが、見た目には造りは甘く、傾斜の度も緩慢である。一方、堀底の最高所は標高36.94mを測り、南岸のI郭-①の北端(標高40.50m)とは3.56mの比高差があるものの、尾根続きの北岸とは1 m弱の比高差にすぎない。

〔堀切①より北側の尾根筋〕

地形が一変し、全くの自然地形となる。人工的な地形は観察できない。

〔調査区1〕

1. 堀切②

(1) 南西側帯曲輪の南側半分から検出されたもので、標高29.5mラインの地山を急峻に掘り窪めたものである。但し、この遺構には壁面から底部にかけて播鉢状の大きな掘り込みが重複しているため、堀切の形状が極めて曖昧なものとなっている。さらに南壁の立ち上がり部分については、調査区の東側半分で帯曲輪の南縁崖面に食い込む状態にあったため、防災の面から完掘せず、西側半分の調査を止めた。そこで、代わりに詳細な南縁崖面の土層観察を行った所、堀切の南壁上面は北壁部分の切り込み面よりかなり低い事が判った。この事により、曲輪の南縁部分が、後世、崩壊している事が明らかである。

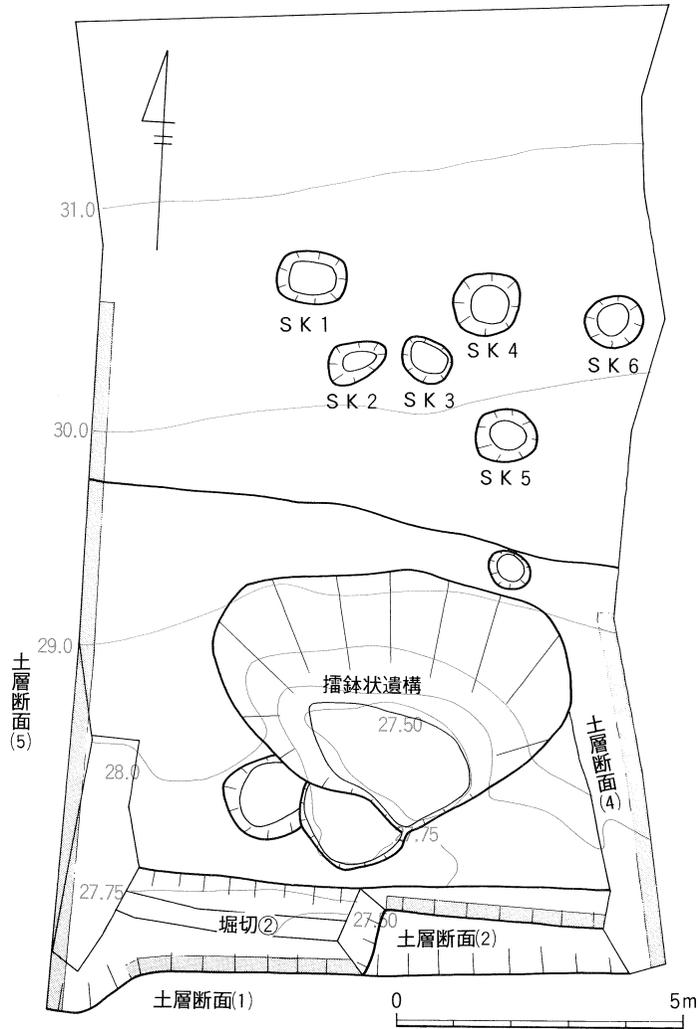
(2) 堀切は試掘の時点で、南西側帯曲輪を曲輪の主軸に沿って東西方向に走行するものと思われたが、調査区外の曲輪西端を縦行する凹道の壁面調査により、その様な形跡はない事が判った。この事からすれば、堀切②は帯曲輪を北東側から南西側へ、やや弧を描いて斜めに突き抜けるものと考えられる。

(3) 堀切は長さ8 m分を検出したが、堀底を完全に露呈できたのは西側3.9m分のみであった。この部分に限り堀底は2.2~2.3m幅で、ほぼ水平状態にカットされており、箱堀の形状を呈していた。

(4) 北壁の斜面部の長さは4.5mで、南壁は0.5m分を検出できた。堀切の南北両岸の比高差は遺構検出箇所約2 mを測る。上場幅は、図面上の直線距離にして7.3mに及び、かなり大規模なものとなる。

2. 播鉢状の掘り込み

堀底に円形状の掘り込み(直径1.4m・深さ30cm)があり、さらに、この遺構の東縁を切り込む形で、疑似楕円形の掘り込み(長径1.9m×短径1.4m・深さ18cm)が重複する。播鉢状の掘り込みは、この2つの皿状の遺構を基点として、堀切の北壁斜面をラップ状に大きく掘り窪めたものである。最大の幅は6.3mで、深さは0.3mを測る。縦位の長さについては、北壁地山切り込み面から下位へ0.7mの所まで延びており、5.3mの測定値を示す。この遺構から土師器



第7図 調査区1遺構実測図

(単位: cm)

S K No.	形 状	長径	短径	最深	最浅	備 考
S K 1	隅 丸 方 形	49	38	48.5	32.0	—————
S K 2	(疑似) 三角形	41	29	30.4	17.7	短径29cmは、西縁。
S K 3	(疑似) 楕円形	35	29	32.9	18.5	北縁で直線状を呈する。
S K 4	円 形	45	—	56.7	38.9	東縁がやや、直線状を呈する。
S K 5	円 形 (ほぼ)	42	—	56.5	34.8	全体的にやや、しゃげた状態。
S K 6	(疑似) 楕円形	42	36	60.2	45.1	—————

第3表 土城 (S K 1 ~ 6) 計測表

を中心として、多量の遺物が出土した。

3. 土 塚

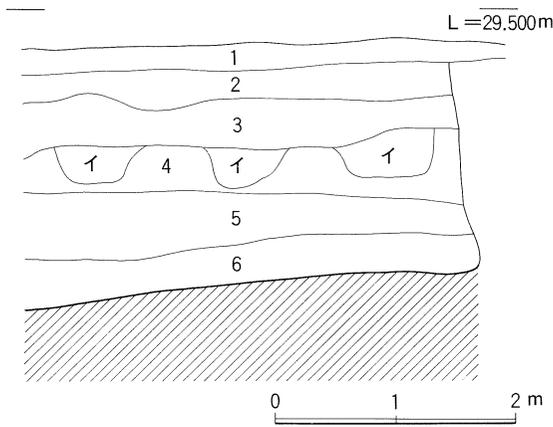
南側帯曲輪に設定した調査区（南北の長さ16.8m、東西10.7m）の北側半分（標高30～31mライン間）から、6基の土塚（SK1～6）が検出された。東西2.6m、南北1.4mの範囲にまとまってあり、いずれも上位部分は後世に削除され、中位以下の地山への切り込み部分が残っていた。

平面形は多少バラついて、隅丸方形・（疑似）三角形・（疑似）楕円形・円形に分かれ、大きさは長径が35～49cm、短径が29～38cm、深さが最深部で30.4～60.2cm、最浅部で17.7～45.1cmを測った。埋土はいずれも軟質の灰褐色土であった。

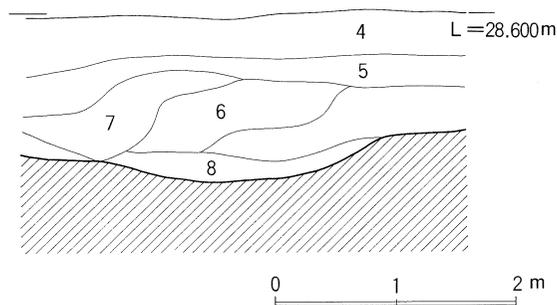
SK4の底面から墓碑の類と思われる凝灰岩の切り石（幅12cm・長さ29cm・厚さ11.4cm）が出土した。さらにSK1からは近世染付の極細片が出土した。

これらの事から6基の土塚については、江戸時代の墓塚と思われる。

〔 松舟・大田 〕



第8図 土層断面図(1)

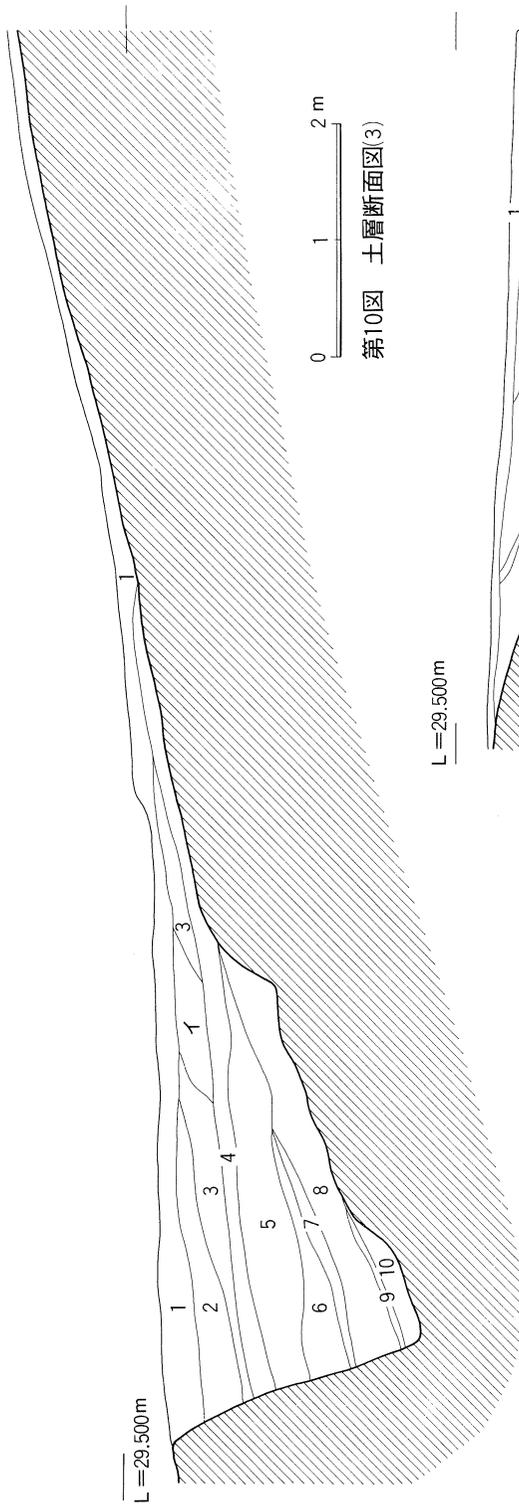


第9図 土層断面図(2)

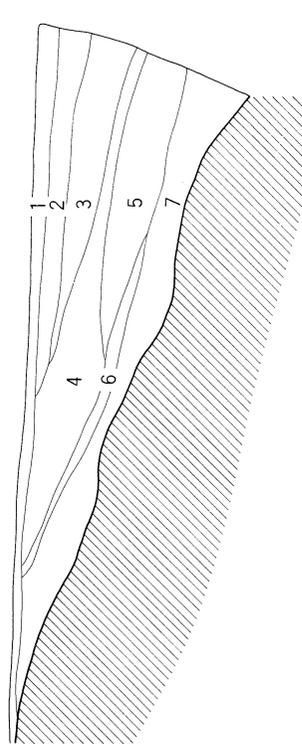
1	暗褐色土（腐食土）
2	灰黄褐色土（締まりが有り、小礫を含む）
3	灰褐色土（汚れた感じで、礫を含む）
4	明灰黄色土（砂混じりでポロポロした土）
5	明灰黄褐色土
6	明黄褐色土（粘質を有する）
7	明黄褐色土（粘質を有し、大小礫を含む）
8	青色粘質土
イ	暗灰褐色土（砂利を含む）

第4表 土層観察表 1

〔 土層断面図(1)・(2)共通 〕



第10図 土層断面図(3)



第11図 土層断面図(4)

1	暗褐色土 (腐食土)	7	灰黄褐色土 (粘質を有し、礫を含む)
2	灰黄褐色土 (縮まりがあり、小礫を含む)	8	明黄褐色土 (粘質を有し、大小礫を含む)
3	純 礫 層 (土を含まない)	9	青色粘質土
4	明灰黄色土 (砂混じりでボロボロした土)	10	明黄褐色土 (強い粘質を有する)
5	礫層 (大小の礫が混じり、間に土を含む)	イ	砂 礫 層
6	砂 利 層 (サラサラした土を含む)		

第5表 土層観察表 2 [土層断面図(3)・(4)共通]

第Ⅳ章 出土遺物

1. 土師器(1~89)

土師器はすべて糸切り離しによるもので、完形品もしくはそれに近いものが多かった。89個を実測したが、その内、1~44は皿で、45~89は坏であった。

〔土師器皿〕 形態からa類~f類に細分される。

a類(1~4)

小型で縦長の坏を全体的に縮小したような形状を呈する。器高は2.0~2.3cmと数値が大きい反面、口径は6.6~7.4cm、底径は4.8~5.8cmに収まり、皿のグループでは最小値であることを特色とする。

体部は1・2が内弯気味に直に立ち上がっており、3は内弯気味に立ち上がるものの口縁部でやや外側に開く。4は外弯し、口縁直口である。1~3は底部と比較して体部が肥厚する。4は逆に底部が肥厚し、外底端が角張る。1・4の外底面は糸切り離した後、ナデ消しが加わっている。1は内底面に指頭痕が目立つ。その他、2の器面にはススがタール状に付着している。

b類(5~7)

大型で横長の坏を全体的に縮小した様な形状を呈する。器高1.9~2.4cm、口径7.8~9.7cm、底径6.4~7.6cmを測り、器高と口径の数値の差が大きい事を特徴とする。

体部は5が外弯し、6・7は55~65度の角度で直線的に伸びている。5の体部は中途より口縁部にかけて薄壁となる。6については体部が下位より上位にかけて漸次、先細りの状態となる。6・7は底部と比較して体部が肥厚する。5・7は口縁直口である。5の外底端は角張る。5の外底面は荒い糸切り離した後、雑なナデ消しが加わっている。6の内底面に指頭痕が目立つ。5は軽量土器である。

c類(8~11)

8~44までは典型的な皿のタイプであるが、器高1.5~1.7cm、底径6.4~6.7cmを測り、口径7.4~7.8cmに収まるものをc類とした。底径の値も小さく、最も小型の皿である。

体部は8・9・11がやや内弯気味に立ち上がり、10は65度の角度で直線的に伸びている。9の体部は肉太である。9・11の内底面は中央部で盛り上がり、端部で窪む。9・10の調整については糸切り離した後、ナデ消しが加わっている。8は内底面に指頭痕が残っている。

d類(12~35)

今回、出土した皿の中では最も数の多いタイプである。器高1.4~2.0cm、底径6.1~7.2cmを測り、口径8.0~8.8cmに収まるものをd類とした。

体部は12~14・17~19・26が、角度に多少の差異があるものの、内弯気味に立ち上がっており、対して、15・23・24・28~30・33・34は外弯の傾向にある。16・20~22・25・27・31・32・

35は57～70度の角度で直線的に伸びている。

12・13・23・27・29・32・33は底部が肉太であるが、13・23は体部も同様に肥厚する。対して、14・19・21・22・25は底部に比べて体部が肥厚する。15・20・28・34の体部は下位から上位にかけて先細りの状態にある。17・26は体部が均一の厚さを示し、26に関してはその状態が底部にも及ぶ。23・25は平底で、16・22・23は外底端が角張る。15・16・18・20・30・31・34・35は内底面の中央が肥厚し、端部が窪んでいる。内底面に指頭痕が残るのは24である。12・13・23・25の外底面については糸切り離した後、ナデ消しが加わっている。18の外底面にはススが付着する。

e 類 (36～43)

器高1.5～1.9cm、底径6.4～8.0cmを測り、口径が9.0～9.7cmに収まる大型タイプのものを e 類とした。

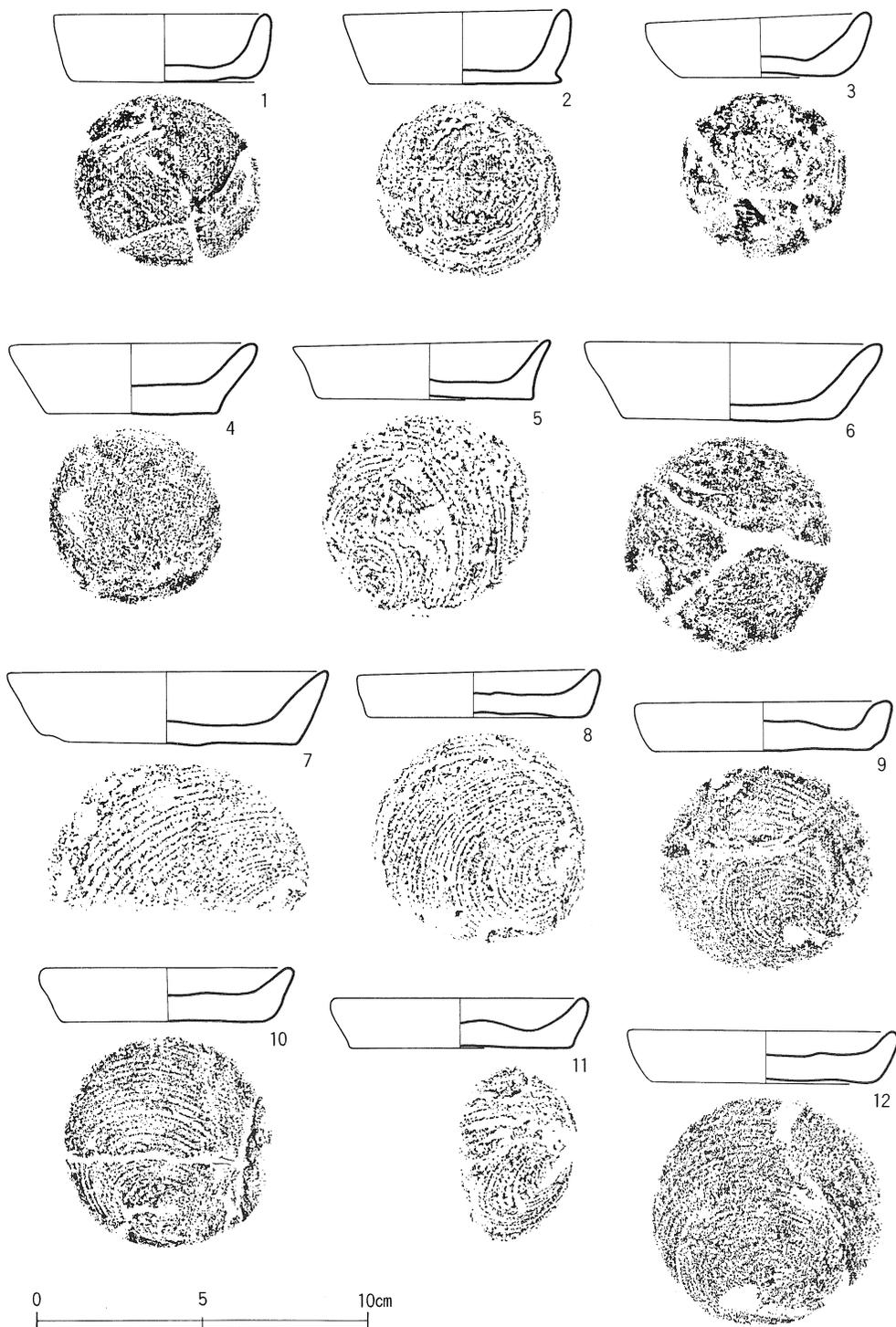
体部の形態は36～39が角度に多少の差異を有するものの外弯気味に立ち上がる。対して、40・41は内弯気味となる。42・43は50～66度の角度で直線的に伸びている。41は体部に比べて底部が肥厚する。逆に43は体部が肥厚の状態にある。さらに、この大型タイプのものは36～43まで8個総てが内底面の中央部で肥厚し、端部で窪んでいる。38・39・42は外底端が角張る。37・38・41・43の調整は糸切り離した後、ナデ消しが加わっている。

f 類 (44)

最も大型の皿で、1個のみの出土である。口径11.0cm、底径8.0cm、器高1.6cmを測る。体部は56度の角度で、僅かに外弯気味に立ち上がっている。底部は体部に比べて肥厚する。外底面には糸切り離した後、ナデが加わっている。

No.	法 量 (cm)			底径と口径の比較	体部の立ち上がり角度	形 態 の 特 徴	手 法 ・ 調 整	備 考
	口径	底径	器高					
1	6.6	5.8	2.1	0.88	80°	底部と比較して体部は肥厚する。 (底部厚 4～5mm、体部厚 6.5mm) 体部は内弯気味に、やや直に立ち上がる。口縁部は丸味を帯びる。	内器面：横ナデ。 外器面：丁寧な横ナデ。 内底面：指頭腹多し。 外底面：糸切り離した後、ナデ消し。	〔色〕鈍い橙色
2	6.8	5.8	2.1 ～ 2.3	0.85	80°	底部と比較して体部は肥厚する。 (底部最大厚 4mm、体部厚 6.5mm) 体部は内弯気味に、やや直に立ち上がる。外底は平底。 口縁部は丸味を帯びる。 外底端の1/2弱は張り出し、体部との境は沈線状を呈する。	外器面：ナデ。	〔色〕赤橙色 内外器面、内底面にススがタール状になって付着。
3	6.8	4.8	1.7 ～ 2.0	0.71	64°	底部と比較して体部は肥厚する。 (底部厚 4.5～5mm、体部最大厚 9mm) 体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部でやや外側に開く。 口縁部は丸味を帯びる。 内底面は全体的に盛り上がる。	内器面：横ナデ。 内底面：ナデ。	〔色〕赤褐色 外器面と外器面はローリング激し。

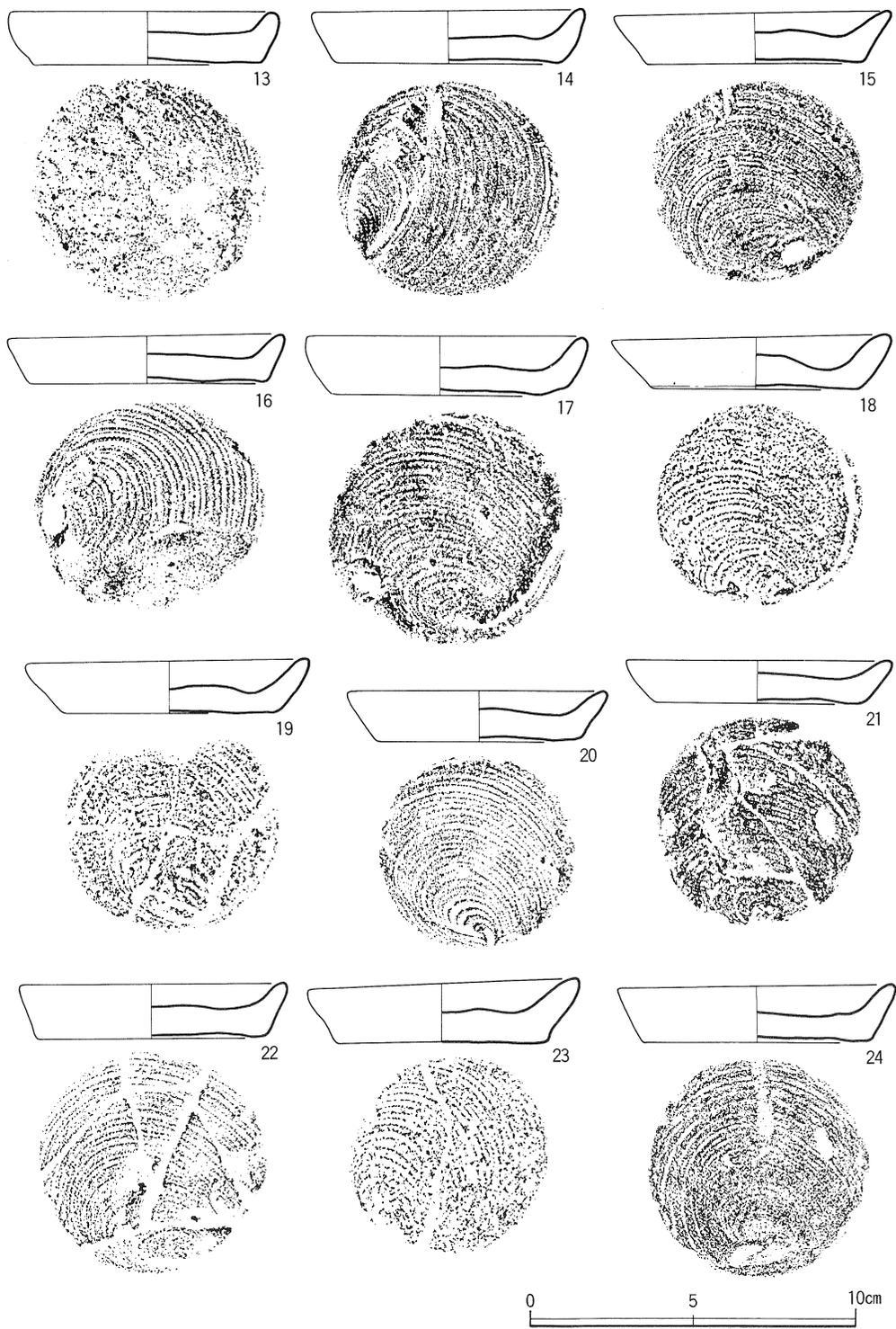
第6表 出土遺物観察表①



第12図 出土遺物実測図①

No.	法 量 (cm)			底径と口径の比較	体部の立ち上がり角度	形 態 の 特 徴	手 法 ・ 調 整	備 考
	口径	底径	器高					
4	7.4	5.2	2.2	0.70	65°	<p>体部と比較して底部は肥厚する。(底部厚 8.5~9.5mm、体部最大厚 6mm)</p> <p>体部は外弯し、口縁部は丸味を帯びる。外底端は角張る。</p>	<p>内器面：横ナデ。 外器面：丁寧なナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離した後、ナデ消し(糸切り痕は殆ど消滅)。</p>	〔色〕鈍い橙色
5	7.8	6.5	1.6 ~ 1.9	0.83	68°	<p>体部は大きく外弯し、体部厚も中途より口縁部にかけて薄壁となる。(体部厚 2~4mm)</p> <p>外底はやや上げ底で、外底端は角張る。</p>	<p>内器面：ナデ。 外器面：横ナデ。 内底面：粗いナデ。 外底面：粗い糸切り離した後、雑なナデ消し。</p>	〔色〕灰色褐色 軽量土器
6	8.9	6.4	2.4	0.72	55°	<p>体部は55°の角度で、直線的に伸びる。口縁部は丸味を帯びる。底部と比較して体部は肥厚する。(底部厚 4.5~6.5mm、体部最大厚 8mm)</p>	<p>内外器面：上位は横ナデ、他はローリングを受けている。 内底面：ナデ。但し、指頭痕が目立つ。 外底面：ローリングが激しい。</p>	〔色〕赤褐色
7	9.7	7.6	2.1 ~ 2.2	0.78	65°	<p>体部は65°の角度で、直線的に伸びる。口縁直口。 底部と比較して体部は著しく肥厚する。(底部厚 5~6.5mm、体部最大厚 1.1mm)</p> <p>体部は、下位より上位にかけて漸次、先細りの状態となる。</p>	<p>内器面：強く丁寧な横ナデ。 外器面：丁寧な横ナデ。 内底面：ローリングを受けている。 外底面：糸切り離し。</p>	〔色〕鈍い橙色
8	7.4	6.5	1.3 ~ 1.5	0.88	70°	<p>体部は70°の角度で、やや内弯気味に立ち上がる。 底部と比較して体部は肥厚する。(底部厚 5.5~7.0mm、体部最大厚 9mm)</p> <p>体部は、下位より上位にかけて先細りの状態となる。 外底はやや上げ底。 内底面の中央部は 1.4×1.4cm の大きさで凹となっている。</p>	<p>内器面：上位にナデにより 7~8mm 幅で縁どられている。 外器面：横ナデ。 内底面：ナデ、指頭痕が多い。 外底面：糸切り離し痕が鮮明に残る 外底端：残りの 1/2 が指押えが加わるものの、概して、粗い調整となっている。</p>	〔色〕赤褐色 黒雲母が混入が目立つ。
9	7.7	6.4	1.5	0.83	65°	<p>体部は65°の角度で、やや内弯気味に立ち上がる。 体部は肉太で、最大厚 8mm。 口縁部は丸味を帯びる。 底部の中央は肥厚し(厚さ 9.5mm) 端部で窪む(厚さ 6.5mm)。</p>	<p>内外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。全体的にローリングを受けている。 外底面：糸切り離した後、ナデ消し。</p>	〔色〕鈍い橙色
10	7.7	6.4	1.7	0.83	65°	<p>体部は65°の角度で、直線的に立ち上がる。体部は、下位より上位にかけて先細りの状態となる。 体部と比較して底部は肥厚する。(底部厚 8~8.5mm、体部最大厚 7mm)</p>	<p>内外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離した後、ナデ消し。</p>	〔色〕鈍い橙色
11	7.8	6.7	1.5	0.80	73°	<p>体部は73°の角度で、内弯気味に立ち上がる。 口縁部は丸味を帯びる。 内底面は、中央部奇りで盛り上がり(厚さ 7.5mm)、端部で窪む(厚さ 5mm)。</p>	<p>内器面・内底面：ナデ。 外器面：丁寧な横ナデ。 外底面：糸切り離し、粗い調整。</p>	〔色〕鈍い橙色
12	8.1	6.8	1.6	0.84	65°	<p>体部は65°の角度で、内弯気味に立ち上がる。口縁部は丸味を帯びる 内底面の中央部は円形状(直径 3.3cm)に窪む。 底部は肉太(底部厚 7.5~8mm)</p>	<p>内外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離した後、ナデ消し。</p>	〔色〕鈍い橙色

第7表 出土遺物観察表②



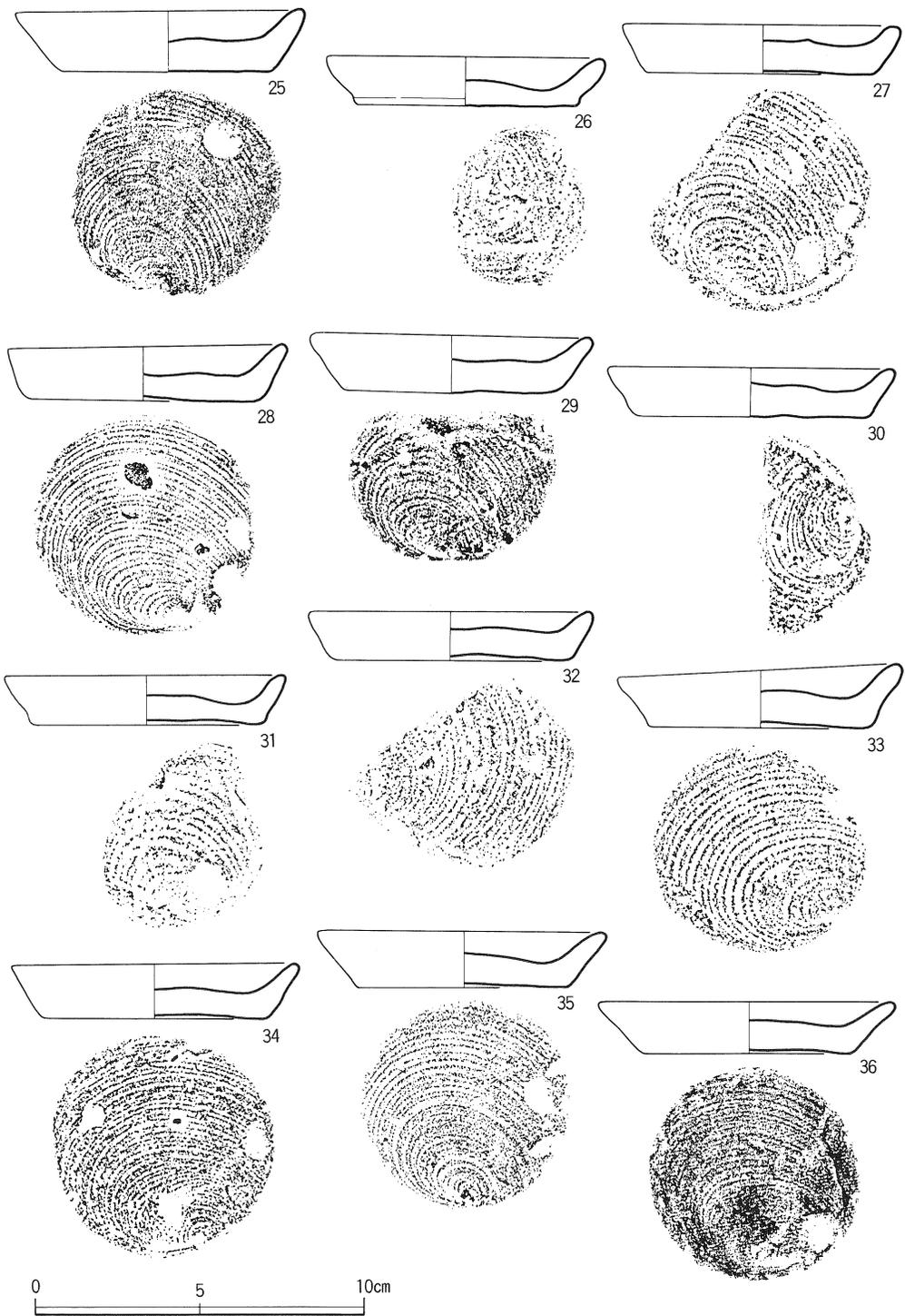
第13図 出土遺物実測図②

No.	法 量 (cm)			底径と口径の比較	体部の立ち上がり角度	形 態 の 特 徴	手 法 ・ 調 整	備 考
	口径	底径	器高					
13	8.2	7.0	1.6	0.85	70°	体部は70°の角度で、内弯気味に立ち上がる。 口縁部は丸味を帯びる。 底部と体部は肉太。(底部厚8~9mm、体部最大厚8mm)	内外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離し後、ナデ消し。	〔色〕乳褐色
14	8.4	7.0	1.6 ~ 1.7	0.83	70°	体部は70°の角度で、内弯気味に立ち上がる。 底部に比べて体部は肥厚する。(底部厚6.5~7mm、体部最大厚8mm) 外底は上げ底。 内底面の中央部に区形(直径2.8×3.2cm)の窪み。	内器面・内底面：丁寧な横ナデ。 外器面：横ナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色〕赤褐色
15	8.5	6.6	1.5 ~ 1.6	0.78	65°	体部は65°の角度で、外弯気味に立ち上がり、下位より上位にかけて先細りとなる。 底部は中央部寄りて肥厚し(8.5~9mm)、端部でやや窪む(7.5mm)。	内器面：横ナデ。 外器面：丁寧なナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色〕赤褐色
16	8.5	7.2	1.4 ~ 1.5	0.85	70°	体部は70°の角度で、直線的に立ち上がる。 底部は肥厚(7~8mm)し、端部でやや窪む(7mm)。 外底はやや上げ底、外底端はやや角張る。	内外器面：丁寧な横ナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色〕鈍い橙色
17	8.6	6.5	1.9	0.76	57°	体部は57°の角度で内弯気味に立ち上がる。口縁部は丸味を帯びる。 底部から体部の中途まで、ほぼ均一の厚さ(7.5mm)。 外底はやや上げ底。 内底面に渦巻き痕。	内外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色〕鈍い橙色
18	8.6	6.3	1.5 ~ 1.7	0.73	60°	体部は60°の角度で、わずかに内弯気味に立ち上がる。 体部は肉太(厚さ8mm)。 内底面の中央は大きく盛り上がり(1.0cm)、端部で窪む(6mm)。 外底は上げ底。 外底端はシャゲた状態で、体部との境は沈線状を呈する。	内器面：粗いナデ。 外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色〕灰黒褐色 外底面に1/4にススの付着あり
19	8.6	6.4	1.6 ~ 1.7	0.74	59°	体部は59°の角度で、極わずかに内弯気味に立ち上がる。 底部は体部に比べて肥厚する。(底部7.5mm、体部最大厚6.5mm) 底端部は窪む。(厚さ5.5mm) 内底面は凹凸が目立つ。	外底面：糸切り離し。 器面はローリングが激しい。	〔色〕褐灰色~鈍い橙色
20	8.0	6.1	1.6	0.76	58°	体部は58°の角度で、直線的に立ち上がる。 体部は下位より上位にかけて、先細りとなる。 底部は中央部が肥厚(9mm)、端部で僅かに窪む(7.5mm)。 外底は上げ底。	内器面：横ナデ。 外器面：丁寧な横ナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色〕赤褐色
21	8.1	6.3	1.3 ~ 1.4	0.78	59°	体部は59°の角度で、直線的に立ち上がる。 底部は体部に比べて肥厚(7~8mm)。体部最大厚6mm。 外底は上げ底。	内外器面：横ナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色〕鈍い橙色

第8表 出土遺物観察表③

No	法 量 (cm)			底径と口径の比較	体部の立ち上がり角度	形 態 の 特 徴	手 法 ・ 調 整	備 考
	口径	底径	器高					
22	8.2	7.0	1.7	0.85	68°	体部は68°の角度で、直線的に立ち上がる。 底部は体部に比べて肥厚(9mm)し、端部は僅かに窪む(7.5mm)。 外底は上げ底。外底端は角張る。	内外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離し。 内器面・内底面：ややローリングが目立つ。	〔色〕赤褐色
23	8.3	6.5	1.7 ～ 2.0	0.78	65°	体部は65°の角度で、僅かに外弯気味に立ち上がる。 底部と体部は肉太。(底部厚9～10mm、体部最大厚9mm) 外底は平底。外底端はやや張り出し、角張る。	内器面・内底面：やや粗いナデ。 外器面：丁寧な横ナデ。 外底面：糸切り離した後、丁寧なナデ消しにより、全体の2/3程、糸切り痕が消滅している。	〔色〕鈍い橙色 外底面のみ褐灰色。 胎土に少量の黒雲母が混じる。
24	8.5	7.0	1.7 ～ 1.8	0.82	67°	体部は67°の角度で、僅かに外弯気味に立ち上がる。 外底は上げ底。	内外器面：丁寧な横ナデ。 内底面：ナデ。指頭痕が目立つ。 外底面：糸切り離し。	〔色〕赤灰褐色
25	8.8	6.9	1.8 ～ 1.9	0.78	60°	体部は60°の角度で、直線的に立ち上がる。 底部は体部に比べて肥厚する。(底部厚9～10mm、体部厚7mm) 外底は平底。 内底面の中央部は円形状に高まり(直径3cm)、その中心に指頭痕が残る。	内外器面：横ナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り離し、一部にナデ消し。	〔色〕赤褐色
26	8.4	6.7	1.5	0.80	57°	体部は外底端で一旦、窪み、これより、やや内弯気味に立ち上がる。 体部は、口縁部に至るまで均一の厚さ(6mm)。 口縁部は丸味を帯びる。 底部は中央部で肥厚し(8mm)、端部で窪む(5mm)。	内器面・内底面：丁寧なナデ。 外器面：横ナデ。 外底面：糸切り離した後、ナデ消し。	〔色〕赤褐色
27	8.4	6.8	1.5	0.81	63°	体部は63°の角度で、直線的に立ち上がる。口縁部は丸味を帯びる。 底部は肉太、特に中央部は直径3cmの円形状の高まりとなる。(底部厚9.5mm、底端部8mm)	内外器面・内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り離し(糸切り痕が鮮明に残る)。	〔色〕鈍い橙色
28	8.5	6.9	1.6 ～ 1.8	0.81	65°	体部は65°の角度で、僅かに外弯気味に立ち上がる。 体部は、下位より上位にかけて先細りとなる。 内底面の中央は円形状に窪む(3.5×4.7cm)。	内器面：横ナデ。 外器面：丁寧な横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色〕鈍い橙色
29	8.5	6.4	1.8	1.75	60°	体部は60°の角度で、僅かに外弯気味に立ち上がる。 口縁部は丸味を帯びる。底部は肥厚(9.5mm)。 内底面と体部の境は若干、凹む。	内外器面：横ナデ 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色〕鈍い橙色
30	8.6	6.9	1.5	0.80	58°	体部は58°の角度で、僅かに外弯気味に立ち上がる。 底部は中央部で肥厚し(1.1cm)、端部で窪む(8mm)。 体部最大厚6mm	内器面・内底面：丁寧なナデ。 外器面：ローリング激し。 外底面：糸切り離し。	〔色〕鈍い橙色
31	8.5	6.9	1.5	0.81	65°	体部は外底端で一旦、窪み、これより直線的に立ち上がる。 外底は上げ底。 底部厚は中央部で7.5mm、端部で窪む(5.5mm)。	内器面・内底面：丁寧なナデ。 外器面：横ナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色〕鈍い橙色

第9表 出土遺物観察表④

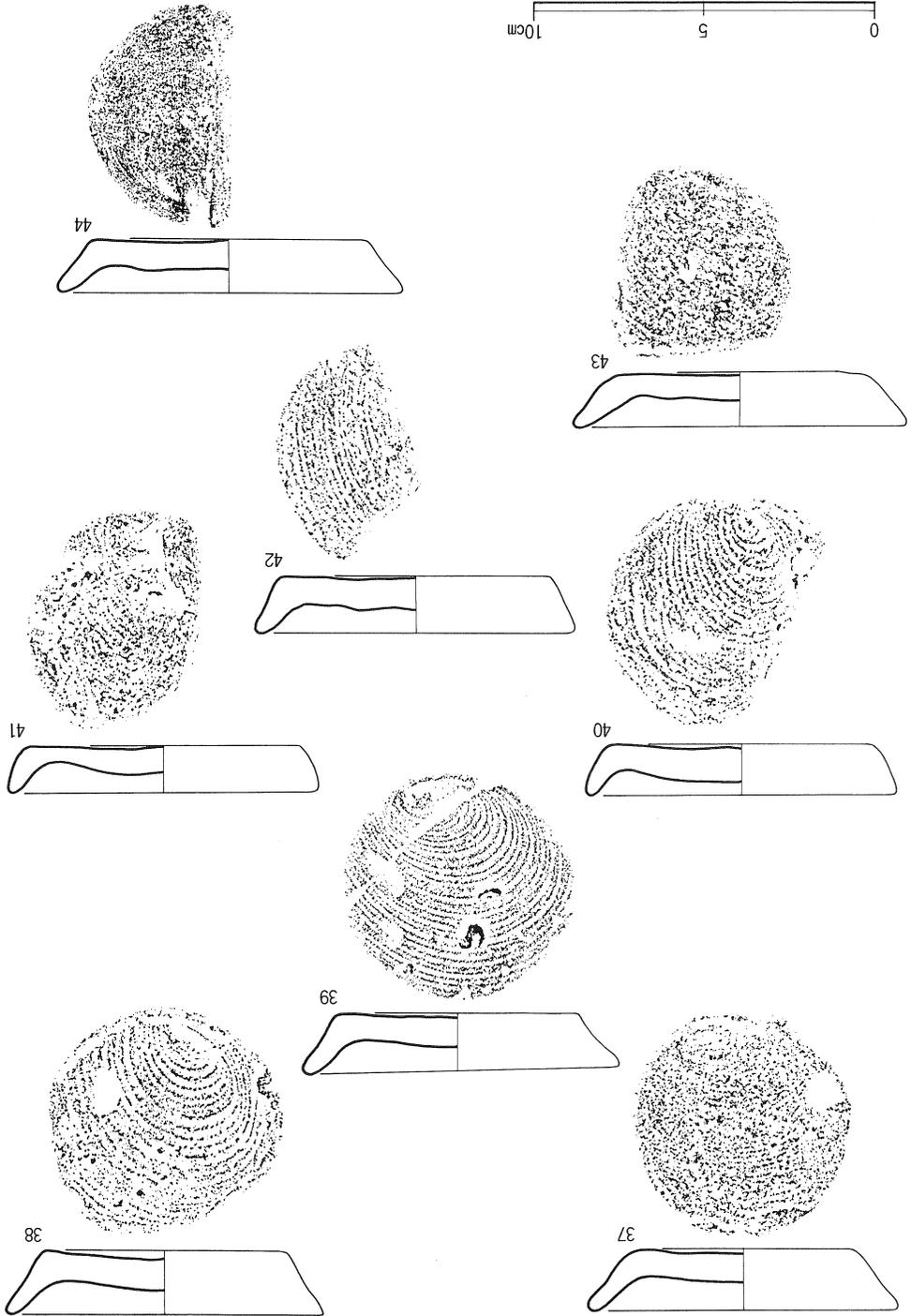


第14図 出土遺物実測図③

No.	法 量 (cm)			底径と口径の比較	体部の立ち上がり角度	形 態 の 特 徴	手 法 ・ 調 整	備 考
	口径	底径	器高					
32	8.6	7.2	1.5	0.84	65°	体部は65°の角度で、直線的に立ち上がる。底部は肥厚(8.5mm)する。体部最大厚7mm。外底は上げ底。	内器面・内底面：ナデ。ローリングを受けている。 外器面：丁寧な横ナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色〕鈍い橙色
33	8.6	6.7	1.5 ~ 2.0	0.78	65°	体部は65°の角度で、外弯しながら立ち上がる。体部最大厚6mm。底部は肥厚(9.5mm)する。口縁部は丸味を帯びる。外底は上げ底。内底面の中央は円形状に盛り上がる(直径3cm)。	内外器面：ナデ。 内底面：非常に丁寧なナデ。 外底面：糸切り離し(糸切り痕が鮮明に残る)。	〔色〕鈍い橙色 やや白っぽい。 極少量の雲母が混入。
34	8.7	6.7	1.6 ~ 1.7	0.77	60°	体部は60°の角度で、僅かに外弯気味に立ち上がる。底部は肥厚(8~8.5mm)、端部は窪む(7.5mm)。体部は、下位より上位にかけて先細りとなる。体部最大厚6mm。内底面の中央に円形状の高まり。(直径3cm)	内外器面：丁寧な横ナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り離した後、丁寧なナデ消し。	〔色〕鈍い橙色 堅緻な焼成。 外底面に胎土に混入した小礫の剥落穴がある。縁に鮮明な指頭痕が2つ残る。
35	8.7	6.4	1.7 ~ 1.8	0.74	57°	体部は57°の角度で、直線的に伸びる。体部最大厚7mm。底部は中央部で肥厚し(1cm)、端部で窪む(7.5mm)。外底は上げ底。	内外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色〕鈍い橙色
36	9.0	6.5	1.6	0.72	52°	体部は52°の角度で、僅かに外弯気味に立ち上がる。底部は中央部で肥厚し(9cm)、端部で窪む(7.5mm)。体部最大厚6mm。内底面の中央に円形状の高まり。(直径2.7cm)。	内外器面：横ナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸離し。	〔色〕鈍い橙色
37	9.1	6.4	1.8	0.70	50°	体部は50°の角度で、外弯しながら立ち上がる。体部最大厚5mm。底部は中央部で肥厚し(9mm)、端部でやや窪む(7.5mm)。外底は上げ底。内底面の中央部は、円形状に盛り上がる(直径3.5cm)。	内外器面：横ナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り離した後、粗いナデ消し。	〔色〕鈍い橙色 精良な胎土。
38	9.4	7.2	1.9	0.77	60°	体部は60°の角度で僅かに外弯気味に立ち上がる。体部最大厚6mm。底部は中央部で肥厚し(9mm)、端部でやや窪む(8mm)。外底は上げ底で、端部はやや角張る。	内外器面：丁寧な横ナデ。 内底面：薄い渦巻き痕。 外底面：糸切り離し、一部でナデ消し。	〔色〕赤褐色
39	9.2	7.1	1.6 ~ 1.9	0.77	63°	体部は63°の角度で、外弯しながら立ち上がる。底部は中央部で肥厚し(9mm)、端部で窪む(7.5mm)。外底はやや上げ底で、端部はやや角張る。	内器面：横ナデ。 外器面：丁寧な横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色〕赤褐色
40	9.0	7.6	1.5	0.84	66°	体部は66°の角度で、内弯気味に立ち上がる。体部最大厚6mm。底部は中央部で肥厚し(1.0cm)、端部で窪む(7mm)。外底面は上げ底で、やや歪。	器面はローリングを受けている。 内器面・内底面：丁寧なナデのあとが窺われる。 外底面：糸切り離し。	〔色〕鈍い橙色

第10表 出土遺物観察表⑤

第15図 出土遺物実測図④



No.	法量 (cm)			底径と口径の比較	体部の立ち上がり角度	形態の特徴	手法・調整	備考
	口径	底径	器高					
41	9.0	8.0	1.5	0.89	68°	体部は68°の角度で、内弯気味に立ち上がる。体部最大厚6mm。 底部は体部に比べて肥厚。底部は中央部で凸の状態となり(7.5mm)、端部で窪む(4.5mm)。	内器面・内底面：丁寧なナデ。 外器面：丁寧な横ナデ。 外底面：糸切り離した後、ナデ消し。	〔色〕鈍い橙色
42	9.3	7.8	1.7	0.84	66°	体部は66°の角度で、直線的に立ち上がる。体部最大厚7mm。 底部は中央部で肥厚し(1.0cm)、端部で窪む(8mm)。 内底面の中央部は、円形状に高まる(直径3.6cm)。 外底はやや上げ底で、端部はやや角張る。	内器面・内底面：内底面の中央部はやや粗いナデ。その他は丁寧なナデ。 外器面：丁寧な横ナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色〕赤褐色
43	9.7	7.0	1.6	0.72	50°	体部は50°の角度で、直線的に立ち上がる。体部最大厚8mm。 体部は底部に比べて肥厚する。 底部は中央部で7.5cm、端部はやや窪む(6mm)。	内器面・内底面：丁寧なナデ。 外器面：横ナデ。 外底面：糸切り離した後、丁寧なナデ消し。(糸切り痕は完全に消滅)。但し、器面はザラザラの状態。	〔色〕赤褐色 外底面の4/5は灰褐色。
44	11.0	8.0	1.6	0.73	56°	体部は56°の角度で僅かに外弯気味に立ち上がる。体部最大厚7mm。 底部は体部に比べて肥厚。 底部は中央部で9.5mm、端部でやや窪む(7.5mm)。	内外器面：横ナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り離した後、ナデ消し(糸切り痕は薄い)。	〔色〕鈍い橙色

第11表 出土遺物観察表⑥

〔土師器坏〕法量及び形態が微細に異なっており、g類～r類に細分した。

g類(45～49)

口径と底径の比率が0.69～0.73で、器高が2.8～3.2cmに収まり、口径11.2～13.2cm、底径8.0～9.5cmを測る。

体部は45・46が64～65度の角度で内弯し、47は64度の角度で僅かに外弯気味に伸びるが、48・49はいずれも60度の角度で直線的な伸びを示す。

45・48は体部と底部が肥厚する。47・49は体部が下位より均一の厚さで上位に至る。内底面はいずれも中央部で肥厚し、端部で窪む。46・49は糸切り離した後、ナデ消しが行われている。

h類(50～54)

口径と底径の比率が0.62～0.68で、器高が3.0～3.4cmに収まり、口径11.6～12.3cm、底径7.2～8.1cmを測る。体部は55～60度の角度で、いずれも直線的に伸びている。

51～53の体部は下位より上位にかけて先細りとなる。51は口縁直口である。51・53・54の内底面は中央部で肥厚し、端部で窪む。

50・52・53の外底面は糸切り離した後、ナデ消しが行われている。

i類(55～57)

口径と底径の比率が0.67～0.70で、器高が2.6～2.8cmに収まり、口径11.6～12.0cm、底径7.8

～8.4cmを測る。体部はいずれも55度の角度で直線的に伸びている。

55の体部は下位より均一の厚さで上位にいたる。57は体部が肥厚する。内底面は多少の差があるものの、中央部で肥厚し、端部で窪む。外底面はいずれも糸切り離した後、ナデ消しが加わっている。

j 類 (58・59)

口径と底径の比率が0.65～0.68で、器高が3.1～3.3cmに収まり、口径12.0～12.4cm、底径8.0～8.2cmを測る。体部は55～60度の角度で、いずれも直線的に伸びるが、58は僅かに外弯気味となる。

58の体部は下位で肉太であるが、上位にかけてかなり先細りとなる。59は体部が肉太で、下位よりほぼ均一の厚さで上位に至る。内底面は中央部で肥厚し、端部で窪む。

k 類 (60・61)

口径と底径の比率が0.57～0.61で、器高が3.1～3.7cmに収まり、口径11.5～13.7cm、底径7.0～7.8cmを測る。体部は40～50度の角度で僅かに外弯気味に伸びている。

60の体部は下位で肉太であるが、上位にかけてかなり先細りとなる。61の体部と底部は肉太である。底部については60が中央部で肥厚し、端部で窪む。61は中央部より端部にかけて漸次、尻上がりの状態となる。外底面はいずれも糸切り離した後、ナデ消しが加わっている。

l 類 (62・63)

口径と底径の比率がいずれも0.68で、器高が2.9cmに収まり、口径10.3～11.2cm、底径7.0～7.7cmを測る。体部は62が65度の角度でわずかに外弯気味に伸びている。63は55度の角度で外弯する。

63は体部と底部が肥厚の状態にある。内底面はいずれも中央部で肥厚し、端部で窪む。外底面はいずれも糸切り離した後、ナデ消しが加わっている。

m 類 (64～70)

口径と底径の比率が0.67～0.75で、器高が3.0～3.2cmに収まり、口径11.4～11.9cm、底径8.0～8.5cmを測る。体部は64が唯一、内弯気味に立ち上がり、中位から直線的に伸びる。65～70は多少の差異があるものの60～63度の角度で外弯する。

64・66の体部は中位より均一の厚さで上位に至る。65は体部が肉太で、扁平な口唇部を有する。67・68の体部は下位で肥厚し、中位より上位にかけて先細りの状態となる。69の体部は下位は均一の厚さで中位に至り、口縁直口気味となる。64～68・70の内底面は多少の差異があるものの中央部で肥厚し、端部で窪む。69の内底面については中央部から端部にかけて均一の厚さとなる。

66・68～70の外底面は糸切り離した後、ナデ消しが加わっている。68の外底面には僅かな板目圧痕が残る。

n類 (71)

口径と底径の比率が0.72で、器高が2.7cmに収まり、口径11.9cm、底径8.6cmを測る。体部は肥厚し、55度の角度で僅かに外弯気味に伸びる。外底端は丸味を持つ。内底面は中央部より端部にかけて全体的に窪む。外底面は糸切り離した後、ナデ消しが加わっている。質量感のある土器である。

o類 (72・73)

口径と底径の比率が0.64～0.65で、器高が2.8～3.1に収まり、口径12.1cm、底径7.8～7.9cmを測る。体部は52～53度の角度でいずれも僅かに外弯気味に伸びている。

73は内底面が中央部で大きく肥厚し、端部でやや窪む。外底面は糸切り離した後、ナデ消しが加わっている。

p類 (74～81)

口径と底径の比率が0.64～0.73で、器高が2.9～3.4cmに収まり、口径11.6～12.8cm、底径8.0～8.8cmを測る。体部は外底端がいずれも丸味を帯びて立ち上がり56～63度の角度で外弯しているが、多少の差異が有り、77・81は外弯の度合いが強い。

74～76・78・79の体部は中位よりほぼ均一の厚さで上位に至る。この中で74・76は口縁部が丸味を帯びている。対して、77・80は下位より上位にかけて先細りの状態を呈し、口縁直口となる。81は中位で一旦、括れて、上位はやや肥厚気味となる。

内底面は多少の差異があるものの、いずれも中央部で肥厚し、端部で窪む。80は特にその度合いが大きい。外底については75・76・80が上げ底で、79が平底なる。75・77・80・81の外底面は糸切り離した後、ナデ消しが加わっている。

q類 (82～86)

口径と底径の比率が0.73～0.76で、器高が2.7～3.0cmに収まり、口径12.9～13.8cm、底径9.4～10.5cmを測る。体部は85が60度の角度で直線的に伸びる外は、いずれも55～62度の角度で外弯する。

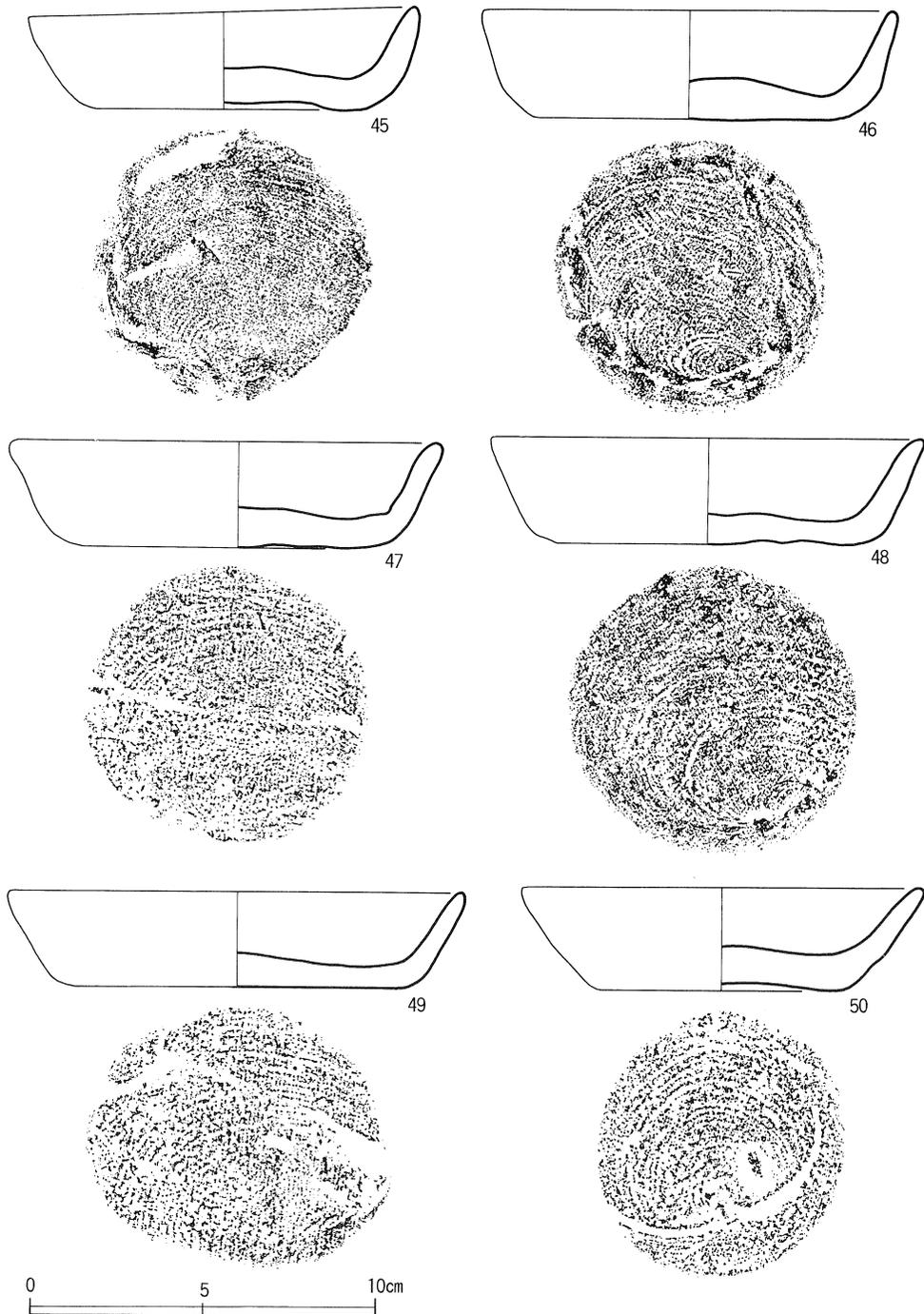
82・83・85・86の体部は中位よりほぼ均一の厚さで上位に至る。この中で82・83の口唇部は扁平な状態を呈する。一方、84の体部は中位よりやや上部で一旦、大きく括れるが、上位で肥厚気味に回復する。口縁は直口状態となる。内底面は差異があるものの、いずれも中央部で肥厚し、端部で窪む。85・86の外底は端部寄りで尻上がりの状態となる。82～85の外底面は糸切り離した後、ナデ消しが加わっている。

r類 (87～89)

口径と底径の比率が0.71～0.74で、器高が2.5～3.0cmに収まり、口径14.2～14.9cm、底径10.2～11.0cmを測る。対部は53～59度の角度で、いずれも外弯する。

87・88の体部は中位よりほぼ均一の厚さで上位に至る。89は下位よりほぼ均一の厚さで中位

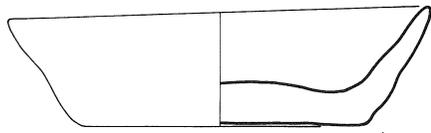
に至り、上位にかけて大きく肥厚する。内底面の端部はいずれもやや窪む。87・88の外底面は糸切り離し後、ナデ消しが加わっている。 [大 田]



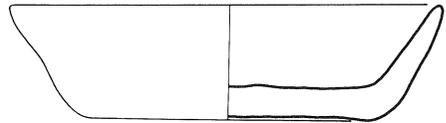
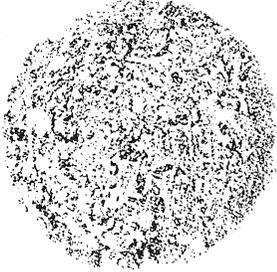
第16図 出土遺物実測図⑤

No.	法 量 (cm)			口径と口径の比較	体部の立ち上がり角度	形 態 の 特 徴	手 法 ・ 調 整	備 考
	口径	底径	器高					
45	11.2	8.0	2.7 ~ 3.0	0.71	64°	体部は64°の角度で内湾する。口縁部は丸味を帯びる。 体部は肥厚(最大厚8mm)。 底部は中央部で肥厚(1.0cm)し、端部で窪む(8~8.5mm)。 外底は上げ底。	内器面：横ナデ。 内底面：ナデ。 外器面・外底面：ローリングを受けている。	〔色〕赤褐色 質量感のある土器。
46	12.0	8.8	3.2	0.73	65°	体部は65°の角度で内湾する。 底部は、中央部寄り大きく肥厚し(1.2cm)、端部で窪む(7.5mm)。 中央部に指頭痕あり。 体部最大厚7mm	内外器面：横ナデ。 内底面：薄い渦巻き痕。 外底面：糸切り離した後、丁寧なナデ消し(糸切り痕は殆ど消滅)	〔色〕赤褐色
47	12.5	8.6	3.1	0.69	64°	体部は64°の角度で、僅かに外湾気味に伸びる。 体部は、下位より均一の厚さ(6mm)で上位に至る。 口縁部は丸味を帯びる。 底部は中央部で肥厚し(1.2cm)、端部で窪む(8.5mm)。	器面は、激しいローリングを受けている。 外底面：僅かな糸切り痕が残る。	〔色〕濃赤褐色
48	12.5	8.6	3.1	0.69	60°	体部は60°の角度で、直線的に伸びる。 体部は肥厚(最大厚8mm)。 底部は中央部で肥厚(9mm)し、端部寄りで窪む(6mm)。	器面はローリングを受けている。 外底面：糸切り痕は完全に消えている。	〔色〕赤褐色
49	13.2	9.5	2.8	0.72	60°	体部は60°の角度で、直線的に伸びる。体部は薄壁で、下位より均一の厚さ(5mm)で上位に至る。 底部は中央部が肥厚し(1.0cm)、端部で窪む(6mm)。 内底面は指頭圧痕により、凹凸の状態。全体的に凸面状に盛り上がる	内器面：非常に丁寧な横ナデ。 外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離した後、ナデ消し。	〔色〕乳褐色
50	11.6	7.2	3.0	0.62	55°	体部は55°の角度で、直線的に伸びる。体部最大厚7mm。 底部は肥厚(1.1cm)。 口縁部は丸味を帯びる。 外底は上げ底。 内底面は凸面状に高まる。	内外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離した後、ナデ消し(糸切り痕は、殆ど消えている)。	〔色〕乳褐色
51	11.6	7.9	3.0 ~ 3.3	0.68	60°	体部は60°の角度で、直線的に伸びる。体部最大厚7mm。 底部は中央部寄りで肥厚し(1.1cm)、端部で窪む(8.5mm)。 体部は、下位より上位にかけて先細りとなる。口縁直口。	器面はローリングを受けている。 内外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。渦巻き痕が残る。 外底面：糸切り痕は、殆ど消えている。	〔色〕乳褐色
52	11.9	8.1	3.1 ~ 3.2	0.68	60°	体部は60°の角度で、直線的に伸びる。体部最大厚7mm。 底部は、中央部で円形状に高まる(直径2cm)。底部厚9mm。 体部は、下位より上位にかけて先細りとなる。 口縁部は丸味を帯びる。	内器面：横ナデ。 外器面：ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離した後、ナデ消し(糸切り痕は消滅)。	〔色〕鈍い橙色
53	12.1	7.9	3.2	0.65	56°	体部は56°の角度で、直線的に伸びる。 体部は下位で肉太である(9mm)が、上位にかけてかなりの先細りとなる(3.5mm)。 底部は中央部が肥厚し(1cm)、端部で窪む(6mm)。	内器面・内底面：ローリングを受けている。 外器面：横ナデ。 外底面：糸切り離した後、ナデ消し。	〔色〕鈍い橙色

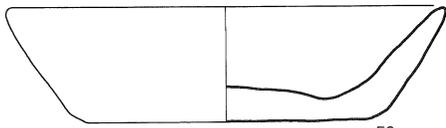
第12表 出土遺物観察表⑦



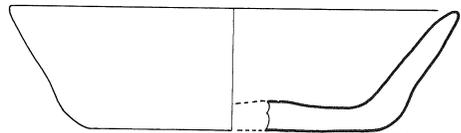
51



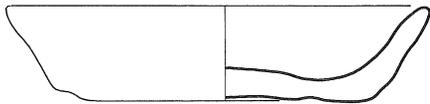
52



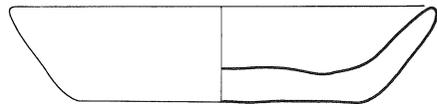
53



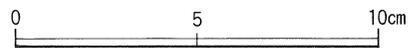
54



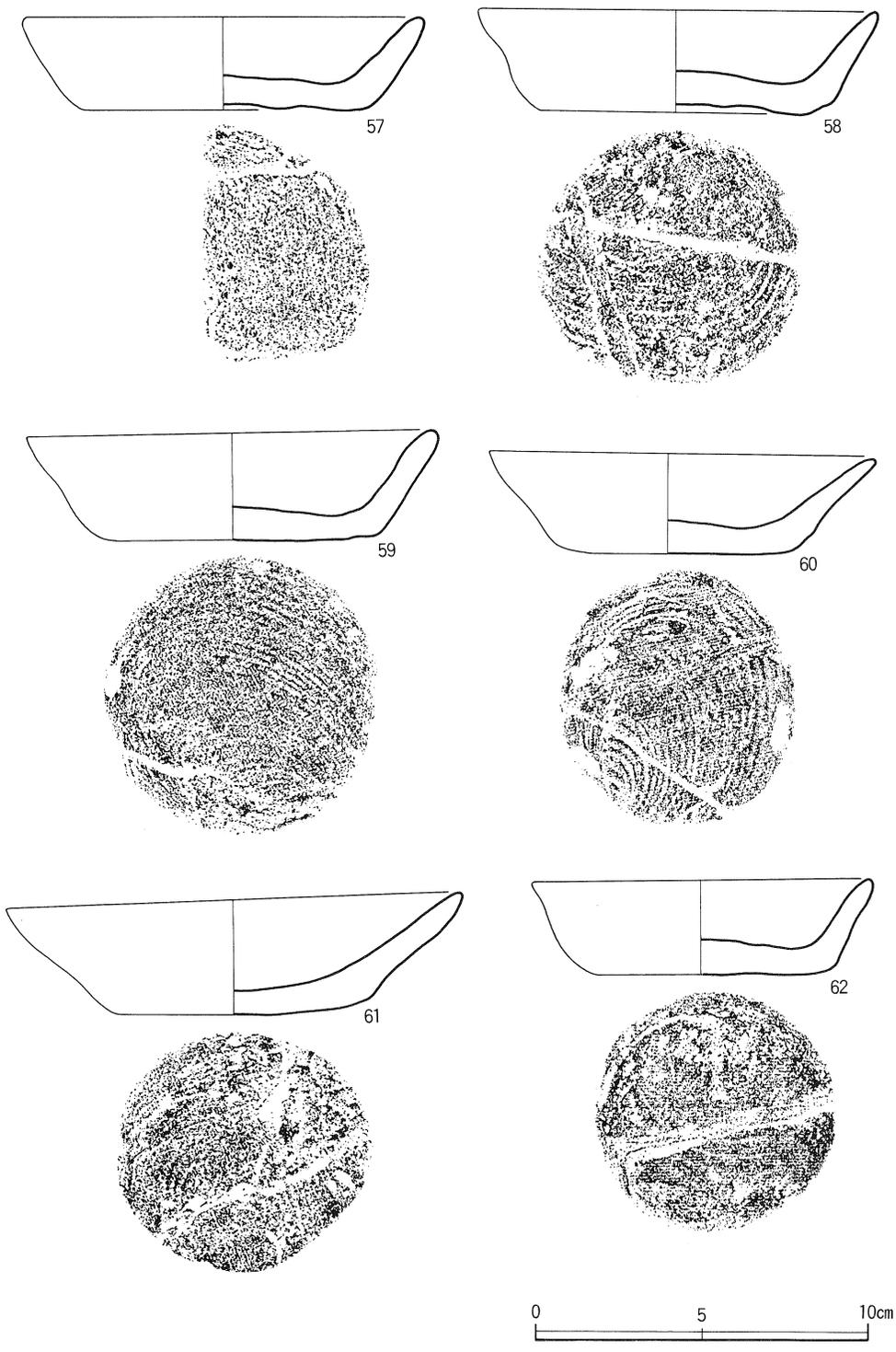
55



56



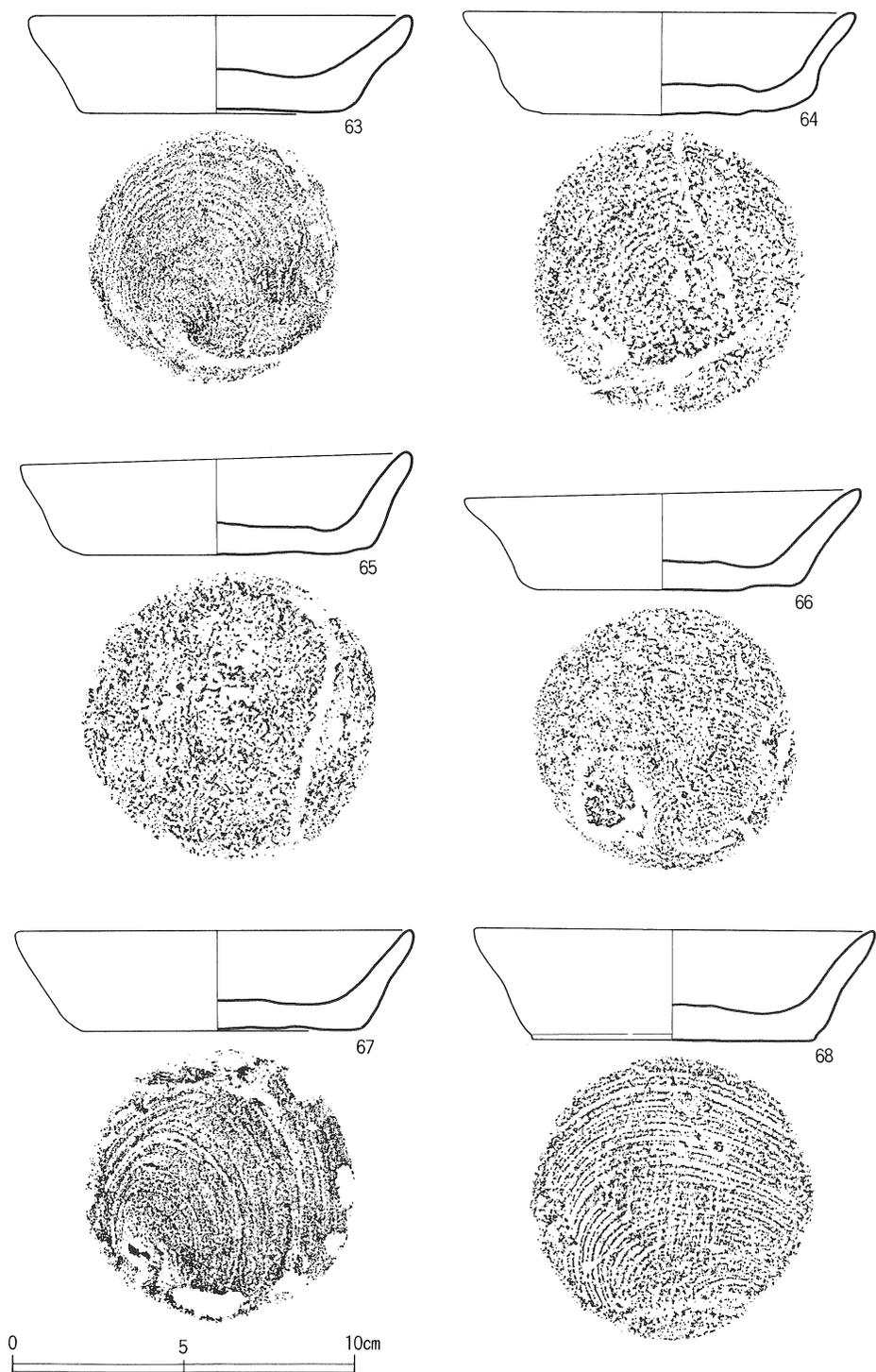
第17図 出土遺物実測図⑥



第18図 出土遺物実測図⑦

No.	法 量 (cm)			底径と口径の比較	体部の立ち上がり角度	形 態 の 特 徴	手 法 ・ 調 整	備 考
	口径	底径	器高					
54	12.3	8.0	3.4	0.65	57°	体部は57°の角度で、直線的に伸びる。体部最大厚7mm。 口縁部はやや直口。 底部は中央部寄りで8mm、端部で窪む(6mm)。	器面は、激しいローリングを受けている。 外底面：糸切り痕は薄い。	〔色〕乳褐色
55	11.6	7.8	2.6	0.67	55°	体部は55°の角度で、直線的に伸びる。 体部は、下位より均一の厚さ(6mm)で上位に至る。 底部は中央部で肥厚(8.5mm)し、端部で大きく窪む(5mm)。 外底は上げ底。	器面はローリングを受けている。 内器面：横ナデ。 外器面：ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り難し後、ナデ消し(糸切り痕は完全に消えている)。	〔色〕褐灰色
56	11.8	8.0	2.6	0.68	55°	体部は55°の角度で、直線的に伸びる。体部はやや肥厚(7.5mm)。 底部は中央部寄りで1cm、端部で窪む(7.5mm)。 内底面は凸面状に盛り上がる。	内外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り難し後、ナデ消し。	〔色〕乳褐色
57	12.0	8.4	2.8	0.70	55°	体部は55°の角度で直線的に伸びる。体部は肥厚(最大厚1.0cm)。 底部は中央部で9mm、端部でやや窪む(7.5mm)。 外底は上げ底。	内外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り難し後、ナデ消し。(糸切り痕は、ほとんど消えている。)	〔色〕乳褐色
58	12.0	8.2	3.0 ~ 3.1	0.68	55°	体部は55°の角度で、僅かに外弯気味に伸びる。 体部は下位で肉太である(9mm)が上位にかけて先細り(4mm)となる。 底部は中央部で1cm、端部で窪む(8mm)。外底は上げ底。	内器面：横ナデ。 外器面：ローリングを受けている。 内底面：ナデ。 外底面：ローリングを受けて、糸切り痕は薄い。	〔色〕乳白色
59	12.4	8.0	3.1 ~ 3.3	0.65	60°	体部は60°の角度で、直線的に伸びる。 体部は肉太である。下位より、ほぼ均一の厚さ(8mm)で上位に至るが、途中で、やや括れる(7mm)。 底部は中央部で肥厚し(1.0cm)、端部で窪む(7mm)。	内器面：丁寧な横ナデ。 外器面：ローリングを受けている。 内底面：ナデ。 外底面：ローリングにより、糸切り痕が殆ど消えている。	〔色〕赤褐色
60	11.5	7.0	3.0 ~ 3.1	0.61	50°	体部は50°の角度で、僅かに外弯気味に伸びる。 体部は下位で肉太(7mm)であるが、上位にかけてかなり先細り(3.5mm)となる。 底部は中央部で肥厚し(1cm)、端部で窪む(7.5mm)。	内器面：横ナデ。弱い稜線が巡る。 外器面：非常に丁寧なナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り難し後、ナデ消し(糸切り痕は薄い)。	〔色〕赤褐色
61	13.7	7.8	3.2 ~ 3.7	0.57	40°	体部は40°の角度で、僅かに外弯気味に伸びる。 体部と底部は肉太である。 体部厚(下位) 9.5mm 〃 (中位) 7.5mm 〃 (上位) 4mm 底部は、中央部より端部にかけて漸次、尻上がりの状態となる。	内外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り難し後、ナデ消し(糸切り痕は、殆ど消えている)。	〔色〕赤褐色
62	10.3	7.0	2.8 ~ 2.9	0.68	65°	体部は65°の角度で、僅かに外弯気味に伸びる。 体部は下位で7.5mm、中位より上位はほぼ均一の厚さ(5.5mm)。 底部は中央部で肥厚し(1cm)、端部でやや窪む(7.5mm)。	内器面：丁寧な横ナデ。 外器面：ナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り難し後、丁寧なナデ消し(糸切り痕は消滅)。	〔色〕赤褐色 褐灰色

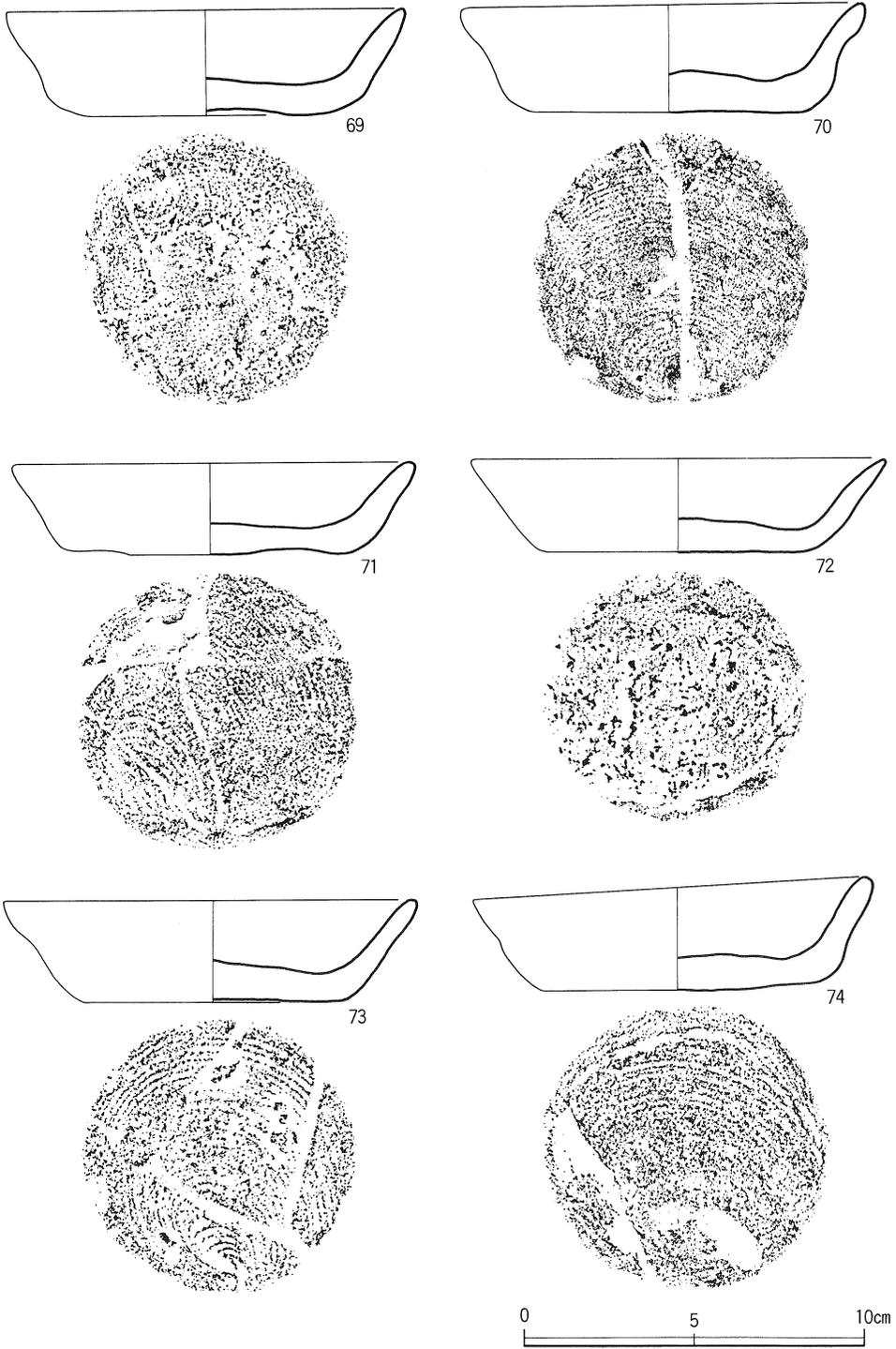
第13表 出土遺物観察表⑧



第19図 出土遺物実測図⑧

No.	法 量 (cm)			底径と 口径の 比較	体部の立 ち上がり 角度	形 態 の 特 徴	手 法 ・ 調 整	備 考
	口径	底径	器高					
63	11.2	7.7	2.9	0.68	55°	<p>体部は55°の角度で外弯する。 体部と底部は肥厚する。 体部厚(下位) 1.1cm 〃 (中位) 7mm 〃 (上位) 5mm 口縁部は丸味を帯びる。 底部は中央部で肥厚し(1.2cm)、 端部でやや窪む(1cm)。 内底面の中央部は、円形状の高まりとなる(直径3cm)。 外底は平底。</p>	<p>内器面：横ナデ。ローリングを受けている。 外器面：横ナデ。 内底面：非常に丁寧なナデ。 外底面：糸切り離し後、ナデ消し。</p>	〔色〕赤褐色
64	11.4	8.4	3.0	0.73	60°	<p>体部は、丸味を持って内弯気味に立ち上がり、中位から上位にかけて直線的に立ち上がる。中位からはほぼ均一の厚さ(5mm)で上位に至る。 底部は中央部で肥厚し(8.5mm)、端部寄り大きく窪む(5.5mm)。</p>	<p>器面はローリングが激しい。 外底面：糸切り痕は完全に消滅している。</p>	〔色〕赤褐色
65	11.4	8.5	2.7 ～ 3.0	0.75	60°	<p>体部は60°の角度で、やや外弯気味に伸びる。 体部は肉太で、下位で9mm、中位で7mm、上位で5mm、口唇部はやや扁平で3mm幅。 底部は中央部で1cm、端部はやや窪む(7.0mm)。 内底面は円形状に高まる。 外底は平底。</p>	<p>器面はローリングが激しい。 外底面：糸切り痕は完全に消滅している。</p>	〔色〕乳褐色
66	11.5	8.0	2.7 ～ 3.0	0.70	60°	<p>体部は60°の角度で外弯する。 体部は下位で8.5mm、中位寄りから、ほぼ均一の厚さで(6mm)上位に至る。 底部は中央部で9mm、端部はやや窪む(6mm)。外底は平底。 内底面は円形状に高まる。</p>	<p>器面はローリングを受けている。 内外器面：丁寧な横ナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り離し後、ナデ消し(糸切り痕は、殆ど消えている)。</p>	〔色〕乳白色 外底面の一部に粘土の境が付着している。
67	11.6	8.1	3.0	0.70	60°	<p>体部は60°の角度で、僅かに外弯気味に伸びる。 体部は、下位で肉太(9mm)、中位より上位にかけて先細りとなる。 体部厚(中位) 6mm 〃 (上位) 4mm 底部は中央部で8.5mm、端部でやや窪む(7mm)。</p>	<p>内器面：横ナデ。 外器面：丁寧な横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離し。器面の1/4に指頭圧痕。</p>	〔色〕乳褐色
68	11.7	8.2	3.2	0.70	62°	<p>体部は62°の角度で外弯する。 体部は下位で肥厚し(8mm)、中位より上位にかけて先細りとなる。 体部厚(中位) 6.5mm 〃 (上位) 3.5mm 口縁直口。 底部は中央部で1cm、端部で窪む(8mm)。外底は平底。</p>	<p>内器面・内底面：丁寧なナデ。 外器面：丁寧な横ナデ。 外底面：糸切り離し後、ナデ消し。 外底端と体部の境に沈線が巡る。</p>	〔色〕鈍い橙色 外底面の一部に微かな板目圧痕が残る。
69	11.6	8.0	3.1	0.69	60°	<p>外底端は丸味を帯びるが、体部そのものは60°の角度で、やや外弯気味に伸びる。 体部は、下位からはほぼ均一の厚さ(7mm)で中位に至る。口縁は直口気味となる。 外底は上げ底。 底部は中央部で1cm、これより端部にかけて均一の厚さ(9mm)。</p>	<p>内器面：非常に丁寧な横ナデ。 外器面：横ナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り離し後、ナデ消し(糸切り痕は消えている)。</p>	〔色〕乳褐色

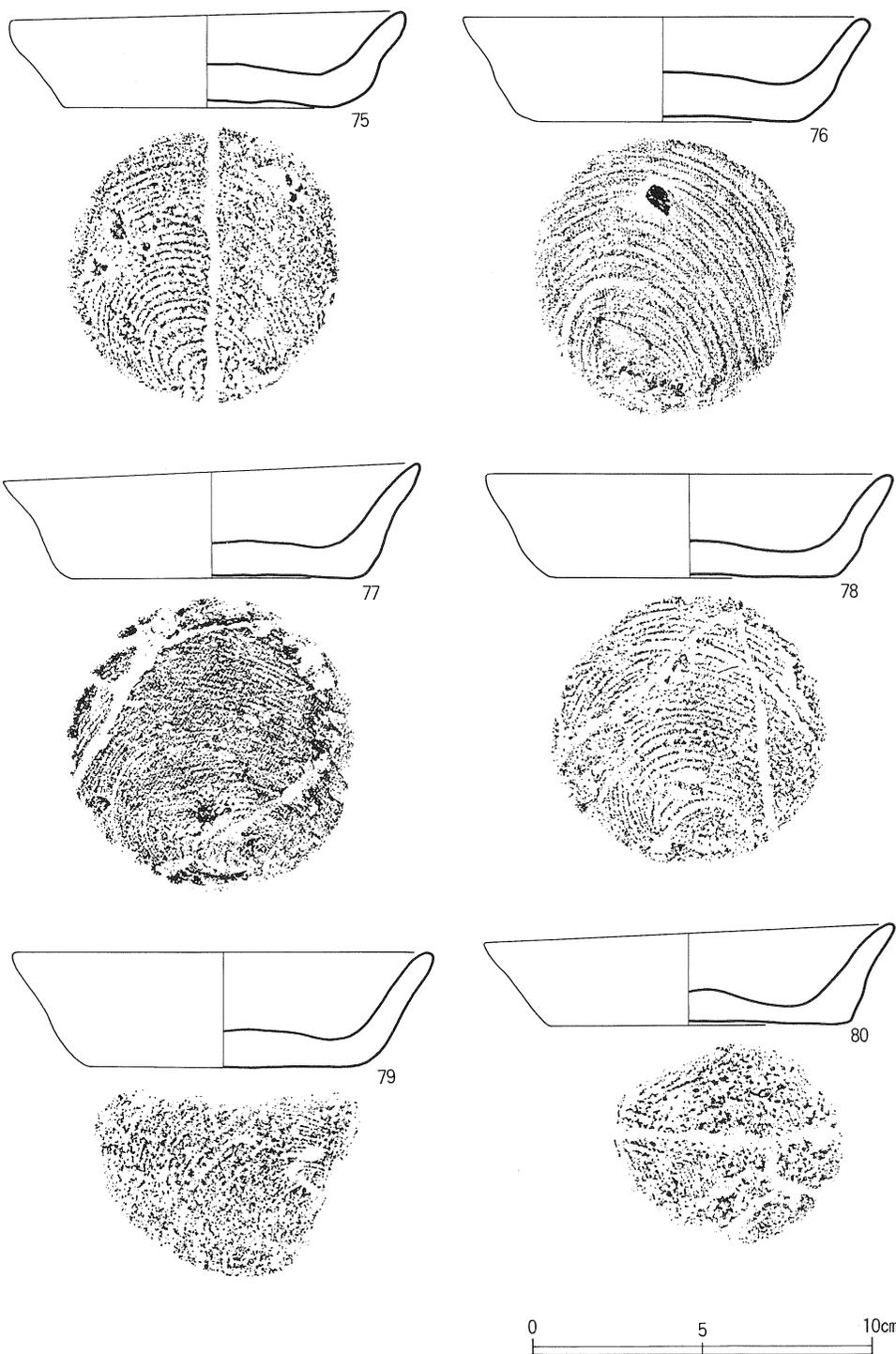
第14表 出土遺物観察表⑨



第20図 出土遺物実測図⑨

No.	法 量 (cm)			底径と口径の比較	体部の立ち上がり角度	形 態 の 特 徴	手 法 ・ 調 整	備 考
	口径	底径	器高					
70	11.9	8.0	3.2	0.67	63°	外底端は丸味を帯びるが、体部そのものは外弯する。 体部は下位で8mm、中位で6mm、上位で7mm。 底部は中央部寄りて肥厚し(1.2cm)、端部で窪む(9mm)。 内底面の中央部は円形状の高まり(直径4.5cm)となる。	内器面・内底面：ローリングを受けている。 外器面：横ナデ。 外底面：糸切り離し後、ナデ消し。	〔色〕乳褐色
71	11.9	8.6	2.7	0.72	55°	外底端はやや丸味を帯びるが、体部そのものは55°の角度で、僅かに外弯気味に伸びる。 体部は肥厚し、下位で9mm、中位で7mm、上位で5.5mm。 底部は中央部で9mm、これより端部寄りにかけては全体的に窪む(7mm)が、端部では9mmに回復する。(内底面は凸面状を呈する。)	内器面：丁寧な横ナデ。 外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離し後、ナデ消し。	〔色〕赤褐色 質感のある土器。
72	12.1	7.9	2.8	0.65	52°	体部は52°の角度で、僅かに外弯気味に伸びる。体部は、やや薄壁である。下位で6mm、中位で5.5mm、上位で3mm。 口縁直口気味となる。 底部は中央部で肥厚(1.0cm)し、端部で窪む(6mm)。 (内底面は凸面状を呈する。)	器面はローリングが激しい。(外底面の糸切り痕は消滅)。	〔色〕乳褐色
73	12.1	7.8	3.0 ～ 3.1	0.64	53°	体部は53°の角度で、僅かに外弯気味に伸びる。体部は、中位がやや括れるものの(5mm)、ほぼ均一の厚さ(6mm)で上位に至る。 口縁部は、やや丸味を帯びる。 底部は中央部で大きく肥厚し(1.2cm)、端部でやや窪む(8.5mm)。	内外器面：丁寧な横ナデ。 内底面：ローリングが激しい。 外底面：糸切り離し後、丁寧なナデ消し(糸切り痕は消滅)。	〔色〕乳褐色
74	11.7	8.3	3.1	0.71	60°	外底端は、やや丸味をもって立ち上がるが、体部は外弯気味に伸びる。 体部は下位で7mm、中位よりはほぼ均一の厚さで(5～6mm)上位に至る。 口縁部は、やや丸味を帯びる。 底部は中央部で大きく肥厚し(1.3mm)、端部でやや窪む(1.1cm)。 外底は上げ底。	内器面：横ナデ。 外器面：丁寧な横ナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色〕赤褐色
75	11.6	8.1	2.6 ～ 2.9	0.70	60°	外底端は、やや丸味をもって立ち上がり、体部は外弯する。 体部は下位で8mm、中位より上位はほぼ均一の厚さで(6～7mm)上位に至る。 底部は中央部で大きく肥厚し(1.1cm)、端部でやや窪む(8.5mm)。 外底は上げ底。	内器面：口唇部より1.8cm幅で、非常に強い横ナデ。 外器面：丁寧な横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離し後、ナデ消し。	〔色〕乳褐色 外底面の一部に粘土の小塊が付着。
76	12.0	8.0	3.1	0.67	60°	外底端は、やや丸味をもって立ち上がり、体部は外弯気味に伸びる。 体部は下位で8mm、中位より上位は、ほぼ均一の厚さで(5～6mm)上位に至る。 口縁部は、やや丸味を帯びる。 底部は中央部で大きく肥厚し(1.3cm)、端部でやや窪む(1.1cm)。 外底は上げ底。	内器面：横ナデ。 外器面：丁寧な横ナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り離し。	〔色〕赤褐色

第15表 出土遺物観察表⑩

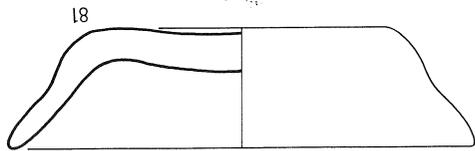
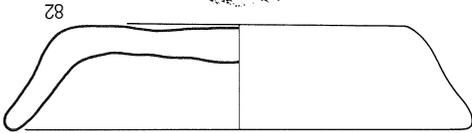
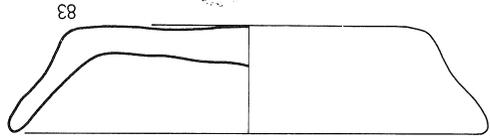
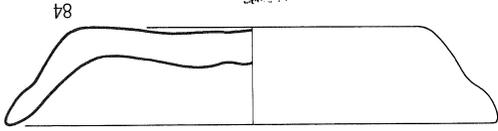
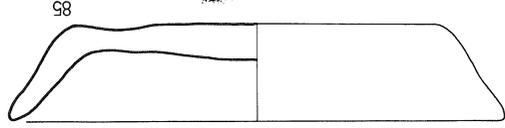
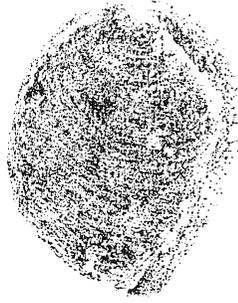
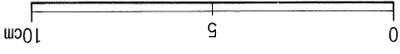


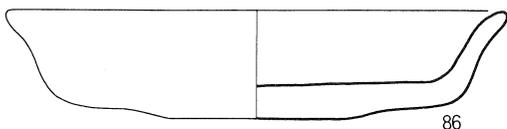
第21图 出土遺物実測図⑩

No	法 量 (cm)			口径と 口径の 比率	体部の立 ち上がり 角度	形 態 の 特 徴	手 法 ・ 調 整	備 考
	口径	底径	器高					
77	12.2	8.7	2.9 ~ 3.4	0.71	63°	体部は63°の角度で外弯する。 体部は、下位より上位にかけて先細りとなる。下位で1cm、中位で6mm、上位で5mm。口縁直口。 底部は中央部で1cm、端部でやや窪む(8.5cm)。	内外器面：丁寧な横ナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り離した後、ナデ消し。	[色] 赤褐色
78	12.0	8.3	3.1	0.69	63°	外底部は、丸味をもって立ち上がるが、体部は63°の角度で、やや外弯気味に伸びる。 体部は下位で8.5mm、中位よりほぼ均一の厚さで(6mm)上位に至る 底部は中央部で肥厚し(1.0cm)、端部でやや窪む。(8mm)。 外底は中央部でやや上げ底。	内外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離し。	[色] 内器面は赤褐色。 外器面は褐灰色~赤褐色。
79	12.3	8.0	3.4	0.65	60°	体部は60°の角度で、僅かに外弯気味に伸びる。 体部は下位で8mm、中位よりほぼ均一の厚さで(6mm)上位に至る。 口縁部は、やや丸味を帯びる。 底部は中央部寄りで大きく肥厚し(1.2cm)、端部でやや窪む(8mm)。 外底は平底。	内外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離し。	[色] 内器面は赤褐色。 外器面は褐灰色~赤褐色。
80	12.0	8.8	2.5 ~ 3.0	0.73	63°	体部は63°の角度で立ち上がり、外弯する。外底端はやや角張る。 体部は下位より上位にかけ、先細りとなる。下位で1.1cm、中位で7mm、上位で4mm。口縁直口気味。 外底は中央部で肥厚し(9mm)、端部で大きく窪む。(5.5mm)。	内器面：横ナデ。 外器面：ローリングを受けている。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り離した後、ナデ。	[色] 乳褐色
81	12.8	8.2	3.3	0.64	56°	外底端は丸味を持って立ち上がるが、体部は56°の角度で外弯する。 体部は下位で8mm、中位では一旦括れて(5.5mm)、上位はやや肥厚気味となる。(6mm)。 底部は中央部で肥厚し(1.1cm)、端部でやや窪む(8.5mm)。	内外器面：横ナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り後、ナデ消し。	[色] 乳褐色
82	12.9	9.4	2.9	0.73	60°	外底端は、やや丸味を持って立ち上がるが、体部は60°の角度で、外弯気味に伸びる。 体部は下位で8.5mm、中位からはほぼ均一の厚さで(6~6.5mm)上位に至る。 口唇部はやや扁平(4.5mm)。 底部は中央部で1cm、端部でやや窪む。	内外器面：横ナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り離した後、ナデ消し。 (糸切り痕は、殆ど消滅)。	[色] 乳褐色
83	13.2	9.7	3.0	0.73	56°	外底端は、やや丸味を持って立ち上がるが、体部は56°の角度で外弯する。 体部は下位で8mm、中途で一旦、括れるものの(5mm)、ほどなく回復して、ほぼ均一の厚さで(5~6mm)上位に至る。 口唇部は扁平気味(3mm幅)。 底部は中央部で大きく肥厚し(1.1cm)、端部で窪む(7mm)。 外底は上げ底。 内底面は、端部より中央部に向かって凸面の状態となる。	内外器面：丁寧なナデ。 内底面：丁寧なナデ。 外底面：糸切り離した後、ナデ消し。	[色] 鈍い橙色

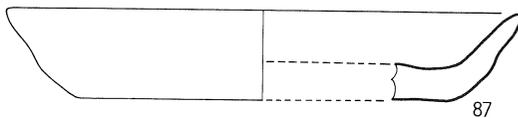
第16表 出土遺物観察表①

第22図 出土遺物美測図①

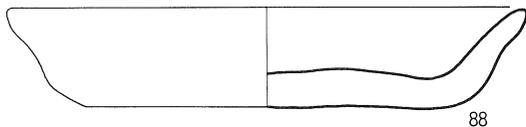




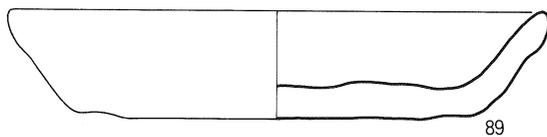
86



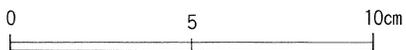
87



88



89



第23図 出土遺物実測図⑫

No.	法 量 (cm)			底径と口径の比率	体部の立ち上がり角度	形 態 の 特 徴	手 法 ・ 調 整	備 考
	口径	底径	器高					
84	13.6	9.8	2.7	0.73	55°	<p>体部は55°の角度で外湾する。体部は下位で8mm、中位よりやや上部で一旦、大きく括れる(5mm)もの、上位ではすぐに回復して肥厚気味となる(6mm)。</p> <p>口縁部は直口状態。</p> <p>底部は中央部で肥厚し(9.5mm)、端部でやや窪む(7.5mm)。</p> <p>内底面の中央部に指頭痕が残る。</p>	<p>内器面：丁寧な横ナデ。</p> <p>外器面：上位はローリングを受けている。中位より下位は横ナデ</p> <p>内底面：ナデ。</p> <p>外底面：糸切り離した後、ナデ消し。(糸切り痕は、僅かに残る)</p>	[色] 乳褐色
85	13.6	10.0	2.7	0.74	60°	<p>体部は60°の角度で、直線的に伸びる。体部は下位で8mm、中位より体部は下位で8mm、中位よりは、ほぼ均一の厚さで(6mm)上位に至る。</p> <p>口縁部は、やや丸味を帯びる。</p> <p>底部は肥厚し(1cm)、端部で窪む(6mm)。</p> <p>外底は端部寄り、尻上がりの状態となる。</p>	<p>内器面：横ナデ。</p> <p>外器面：丁寧な横ナデ。</p> <p>内底面：丁寧なナデ。</p> <p>外底面：糸切り離した後、ナデ消し。(糸切り痕は、殆ど消滅)。</p>	[色] 赤褐色
86	13.8	10.5	3.0	0.76	62°	<p>外底端は丸味を持って立ち上がるが、体部は62°の角度で外湾する。</p> <p>体部は下位で6.5mm、中位よりほぼ均一の厚さで(5mm)上位に至る</p> <p>底部は中央部寄り、肥厚し(9mm)端部でやや窪む(7.5mm)。</p> <p>外底は中途より端部にかけて、尻上がりの状態となる。</p>	<p>内器面：内底面：ローリング激し。</p> <p>外器面：横ナデ。</p> <p>外底面：ローリングにより、糸切り痕が薄くなっている。</p>	[色] 赤褐色
87	14.2	10.3	2.5	0.73	58°	<p>体部は58°の角度で、やや外湾気味に伸びる。</p> <p>体部は下位で7.5mm、中位よりはほとんど均一の厚さ(5~6mm)で上位に至る。</p> <p>底部は端部で9.5mm。</p>	<p>内器面：横ナデ。</p> <p>外器面：ローリング激し。</p> <p>内底面：ナデ。</p> <p>外底面：糸切り離した後、ナデ消し。</p>	[色] 乳褐色
88	14.4	10.2	2.8	0.71	59°	<p>体部は59°の角度で外湾する。</p> <p>体部は下位で9mm、中位よりほぼ均一の厚さで(6mm)上位に至る。</p> <p>口縁部は、やや丸味を帯びる。</p> <p>底部は中央部寄り(10.5mm)、端部はやや窪む(8mm)。</p>	<p>内器面：ローリング激し。</p> <p>外器面：横ナデ。</p> <p>内底面：ナデ。</p> <p>外底面：糸切り離した後、ナデ消し。(糸切り痕は薄い)。</p>	[色] 乳褐色
89	14.9	11.0	3.0	0.74	53°	<p>外底部は、丸味を持って立ち上がるが、体部は53°の角度で外湾気味に伸びる。</p> <p>体部は下位より、ほぼ均一の厚さ(7mm)中位に至る。中位より上中位より上位にかけては、大きく肥厚(8mm)する。</p> <p>内底面の中央部は、指頭痕によってやや窪む。</p> <p>底部の中央部は1.1cm、中央部と端部の境で1.2cm、端部で7mm。</p>	<p>内器面：丁寧な横ナデ。</p> <p>外器面：外底面：ローリング激し。</p> <p>外底面：糸切り痕は完全に消滅。</p>	[色] 乳褐色

第17表 出土遺物観察表⑫

3. 青磁(90~100)

90~92は外器面に簡略化された蓮弁文様を持つ。蓮弁の先端部の形状は90・92がやや丸味を帯びた状態にあり、91はやや鋭角となる。92・93は口径の復元が可能で92は14.7cm、93は11.9

cmを測る。体部は90が直線的な伸びを示し、91・92は内弯する。釉色は90・91が緑灰色で92が灰緑色である。

93～96は雷文帯の文様を有する。93は上質な青磁で、外器面に文様があり、復元口径11.9cmを測る。体部は内弯する。94は外器面に雷文帯の文様があり、内器面にもモチーフ不明の曲線文様が描かれている。体部は直線的に伸びるが、途中でやや括れている。95は93・94と異なり、内器面に雷文帯があり、外器面には縦位の花卉に似た文様が見られる。体部はやや内弯気味に伸びている。釉色については93・95が灰緑色で94が緑青白色である。96は内器面に斜行の直線文様が描かれ、外器面にもモチーフ不明の横位の曲線文様がある。体部は内弯するが下位より上位にかけて漸次、先細りの状態となる。口縁はやや直口気味となる。釉色は緑青色で、上質な青磁である。

97は無文の青磁で、復元口径13.9cmを測り、体部はほぼ均一の厚さで直線的に伸びる。釉色は緑黄色である。

98は唯一、底部の残存である。復元底径8.6cm、高台高9mmを測る。釉色は97と同様に緑黄色で、外底面にまで施釉が及ぶ。97と同一個体の可能性がある。

99は内器面の釉下に文様らしき陽刻の凹凸があるものの、極めて薄く、実態を把握できない。復元口径14.8cm、器高6.3cm、復元底径5.7cmを測る。体部は内弯し、下位より中位にかけて漸次、先細りとなるが上位で肥厚し、口縁部は完全に丸味を帯びる。

100は無文の青磁で、体部はやや内弯する。釉色は灰白緑色である。

4. 白磁 (101～105)

101は体部が外弯し、器面がヘラで八角形に面取りされた碗である。外底端と体部の境は角張り、口唇部も扁平で斜行している。復元口径8.1cm、器高4.0cm、復元底径3.1cmを測る。釉色は乳褐色であるが、体部の下位より高台の内底面にかけて器面は露胎を呈する。焼成はやや不良である。外底面に墨書きの痕らしきものが残る。

102・103・105はいずれも明代の皿である。102の体部は薄壁で、均一の厚さを示すが、口縁部はやや先細りとなる。復元口径9.7cmを測る。103は体部が下位より上位にかけて漸次、先細りとなる。復元口径9.9cmを測る。釉色は102の内器面が白褐黄色で、外器面は褐黄白色である。103は白灰黄色で外器面の下位は露胎となる。いずれも外器面には顕著なロクロ回転痕が巡る。105は底部のみの残存で、底径3.4cm、高台高2cmを測る。釉色は白灰黄色で、やや焼成不良である。

104は碗である。体部は薄壁で、やや内弯気味に伸びて、口縁部で僅かに外弯する。復元口径13.9cmを測り、白色の釉が施されている。

5. 磁器 (106)

非常に上質な磁器の底部である。底部は体部と比較した場合、かなりの薄壁となる。

6. 陶器 (107~109)

107は半磁器の染付け碗で、口径17.1cm、器高3.4cm、底径5.3cm、高台高3~7mmを測る。体部は内弯しながら上位に至り、口縁部で大きく外弯するが、器厚は下位より上位にかけて漸次、先細りとなる。外器面の全面に荒々しいタッチの筆書きによる花唐草のくずし字が描かれており、内底面にも同様に十字華のくずれ字が見られる。釉色は白灰褐色で筆書き文様の上から薄く施釉されている。粗製染付け碗である。

108は粗製の白磁碗で、底部は底径5.8cm、高台高2~6mmを測る。底部は中央部寄りで大きく肥厚し、端部で凹状に窪む。釉色は黄灰色であるが、外器面の下位は一部が露胎する。

109はベトナム産の大皿である。磁器で、復元口径28.6cmを測り、体部は端部近くでやや腰折れ状態となる。内器面の中央部と端部縁にモチーフ不明の文様が描かれている。釉色は黄褐色で、文様の上から施釉されている。

7. 染付け (110~112)

110は碗で、体部は薄壁で下位より均一の厚さで上位に至る。口縁直口である。外器面にモチーフ不明の文様が描かれている。

111は皿で底部は碁笥底である。内底面に草花文様の一部と見られるものが描かれている。外底端の体部への立ち上がり部分に1cm幅の露胎部分があるが、碁笥底の内底面は全面に施釉されている。

112は碗で、外器面に曲線を主体としたモチーフ不明の文様が描かれている。内底面にも草花文様らしきものの一部が見える。

8. 中世雑器 (113・114)

113は中世雑器の小壺で、頸部は「く」の字を呈し、復元口径11.6cmを測る。釉色は灰白黄色で、非常に薄く施釉されている。

114は陶器壺である。体部は30度の角度で、僅かに内弯気味に伸びる。外底は平底の可能性はある。内器面に茶黄色の釉(化粧がけ)が施されているが、外器面は露胎である。

9. 瓦質土器 (115・122)

115は播鉢で、復元底径15.6cmを測る。体部は50度の角度で直線的に立ち上がる。内器面の条線は9本まで確認できる。

122は火舎で、外器面に突帯が付く。内器面は刷け目調整がなされている。

10. 中世陶器 (116~118)

116は唐津で、内器面に黒色と黒緑色の力強い曲線文様が描かれており、その上から灰色釉が施釉されている。外器面は無文で、上位部分にネズミ色の自然釉がかかる。

117の内器面には、非常に強いナデにより1.3cm~2.0cm幅の沈線が幾重にも生じている。外器面にコバルト・ブルーの瑠璃釉が分厚く施されているが、ポロポロ剥離する状態で、剥離面

の観察から釉下には白黄色の釉（化粧土）が薄く施され、その上から薄茶色の下絵が描かれている事が判った。下絵は竜を描いたものと思われ、同心円状のものと曲線及び蛇の目文様のものがある。内器面には鉄泥がかかる。

118は底部の残存で、復元底径6.3cmを測る。体部は中位より腰折れ状態となり、上位にかけて直立する。内器面の全面には黒色釉がやや斑の状態がかかっているが、外器面については、一部に黒色釉がタール状に垂れている。

11. 中世雑器 (119)

中世雑器の火舎で、外器面の突帯下に三重の菱形がスタンプされている。

12. 備前 (120)

備前の壺片で、内器面に刷け目調整がなされている。外器面は黄白色の自然釉がかかる。

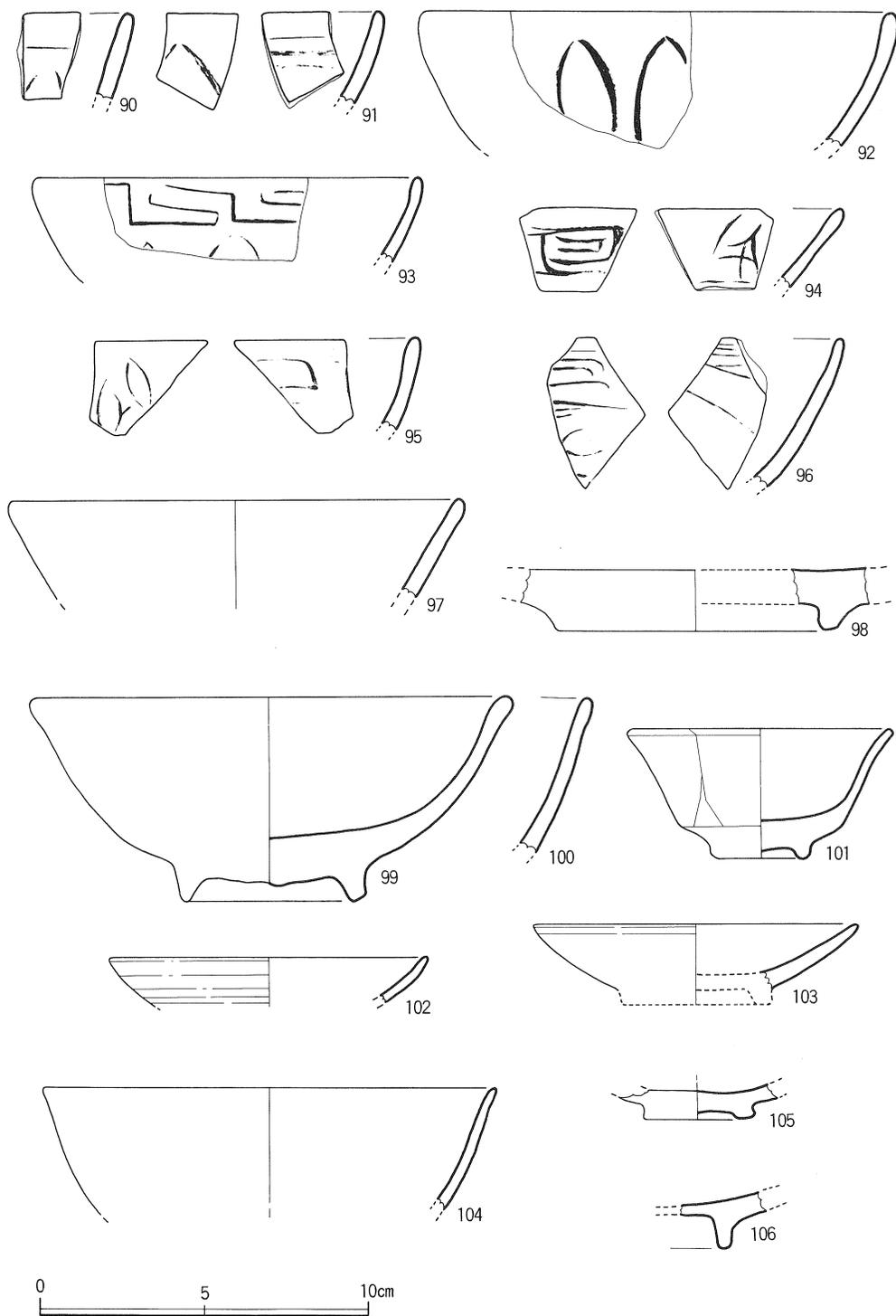
13. 常滑 (121)

常滑の壺片で、外器面はやや粗い刷け目調整がなされている。色調は小豆色である。

[大 田]

No.	器 種	形 態 の 特 徴	文 様・手 法・調 整	備 考
90	青磁碗	残存体部の下位から均一の厚さ（5mm）で直線的に上位に至る。 口縁部は、やや丸味を帯びる。 内器面の口縁部直下に、5mm幅のロクロ痕（僅かに窪む）が巡る。	外器面：簡略化された蓮弁文様の先端部が残る。蓮弁文様の先端部は、やや丸味を帯びる。 蓮弁文様の線の太さは0.8mm幅	[釉色] 緑灰色 内外器面：貫入が走る。
91	青磁碗	残存体部は、下位からほぼ均一の厚さ（4～4.5mm）で、やや内湾しながら上位に至る。 内器面に斜行の平行直線（ロクロ痕）が巡る。	外器面：簡略化された蓮弁文様の先端部が残る。蓮弁文様は幅広であるが先端部はやや鋭角となる。 蓮弁文様の線の広さは1～2.6mm幅。	[釉色] くすんだ感じの緑灰色
92	青磁碗	残存体部は、下位から均一の厚さ（4.5mm）で、中位まで伸びるが、中位より上位にかけて大きく肥厚（5.5mm）する。 口縁部は丸味を帯び、全体的に体部は内湾する。復元口径 14.7cm。	外器面：簡略化された蓮弁文様。 蓮弁文様は幅広（2cm幅）。 蓮弁文様の先端部は、やや丸味を帯びる。	[釉色] 灰緑色。 器面は使用痕が目立ち、剥離が激しい。 内外器面：細かな貫入がびっしりと走る。
93	青磁碗	残存体部は、下位から均一の厚さ（3.5mm）で、中位まで伸びるが、中位より上位にかけて、やや肥厚（4mm）する。 全体的に体部は内湾する。 復元口径 11.9cm	外器面：雷文帯。	[釉色] 灰緑色 内器面：大き目の貫入が走る。 外器面：やや大き目の貫入が入る上質な青磁。
94	青磁碗	残存体部は直線的に伸びるが、中位でやや括れ、上位でやや肥厚する。 体部厚は下位で4mm、中位で3mm、上位で4.5mm。口縁部はやや丸味を帯びる	内器面：モチーフ不明の曲線文様。 外器面：雷文帯。	[釉色] 緑青白色
95	青磁碗	残存体部は、やや内湾気味に伸びるが中位でやや括れ、上位でやや肥厚する。 体部厚は下位で4.5mm、中位で4mm、上位で5mm。	内器面：雷文帯。 外器面：縦位の花卉に似た文様。	[釉色] 灰緑色
96	青磁碗	残存体部は内湾するが、下位より上位にかけて漸次、先細りとなる。 体部厚は下位で5mm、中位で4.5mm、上位で3.5mm。口縁はやや直口。	内器面：雷文帯（斜行の直線文様）。 外器面：雷文帯（積位の曲線文様）。	[釉色] 緑青色 上質な青磁。

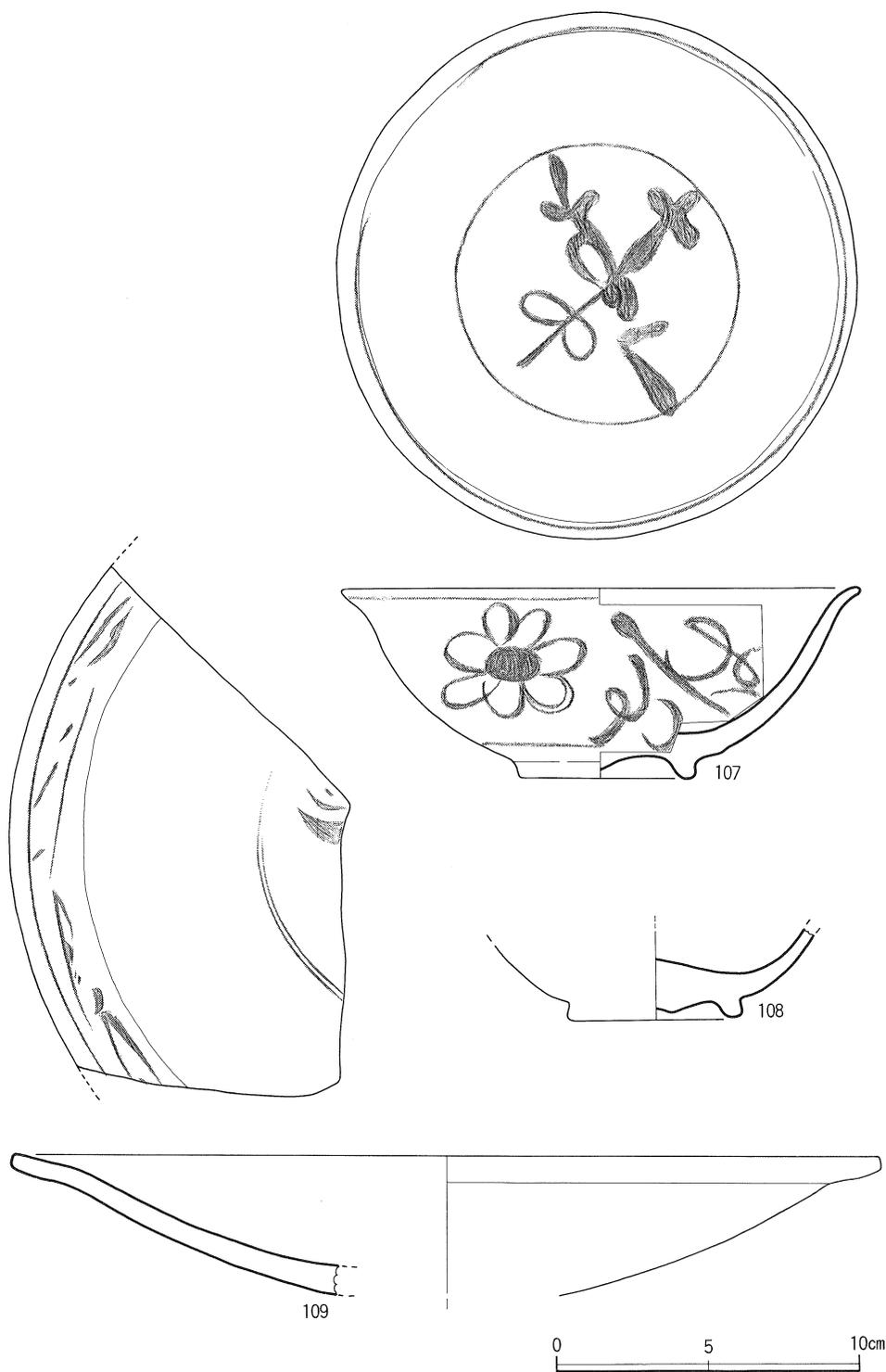
第18表 出土遺物観察表⑬



第24図 出土遺物実測図⑬

No	器種	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
97	青磁碗	残存体部は、下位より上位にかけてほぼ均一の厚さで(5mm)直線的に上位に至る。 口縁部の直下で、内外器面ともわずかに窪む(8mm幅・ロクロ回転痕)。 復元口径 13.9cm	無文。	[釉色] 緑黄色 内外器面：細やか貫入がびっしりと走る。
98	青磁碗	底部は肉太(1cm)。 漆元底径 8.6cm 高台高 9mm	高台畳付き(5mm幅)と高台内側の一部(4mm幅)はヘラ削り。	[釉色] 緑黄色 残存底部は外底面まで施釉。 97と同一個体か。 内底面：やや太めの貫入が入る
99	青磁碗	体部は内湾し、下位より中位にかけて漸次、先細りとなる。 体部厚は下位で7mm、中位で4mm、上位で6mm。 上位の口縁部は肥厚し、安全に丸味帯びる。 底部は中央部で肥厚(1.5cm)し、外底面側に凸の状態となる。 復元口径14.8cm・復元底径 5.7cm 器高 6.3cm	内器面：釉下に文様らしき陽刻の凹凸があるものの、極めて薄く、確認できない。陽文様は区画内に収められている。	[釉色] 緑灰色 外器面：釉溜まりがある。 高台の外縁下位より、内底面にかけて無釉 無釉の部分は小豆色を呈する。
100	青磁碗	残存体部は、やや内湾する。 下位は6mm、中位はほぼ均一の厚さ(4.5mm)、上位は卵形状に肥厚し、やや丸味を帯びる(5mm)。	無文。	[釉色] 灰白緑色 かなり使い込まれた碗で、釉の剥離が目立つ。
101	白磁坏	器面は八角形を呈する。外底端と体部の境は角張る。体部は外湾する。 底部は肥厚(9mm)するが、体部は薄整(下位3mm、中位2.5mm、上位3mm)である。 復元口径 8.1cm・復元底径 3.1cm 器高 4.0cm	口唇部はヘラ削りで、斜行に扁平(3mm幅)。 高台畳付(2mm幅)と外端部(2.5mm)はヘラ削り。 外器面：下位はロクロ回転による、非常に強いナデ。 外底面：墨書き?	[釉色] 乳褐色 体部の下位より高台の内底面にかけて、無釉。 無釉の部分は乳褐色を呈する。 焼成がやや不良で、内外器面の一部は灰赤黒色化している。 焼成はやや不良。
102	白磁皿	残存体部は、やや内湾気味に外側へ大きく開く。 体部は薄壁で、下位よりほぼ均一の厚さで(3mm)上位に至る。 口縁部はやや先細り(2mm)となる。 復元口径 9.7cm	内器面：丁寧なナデにより、滑らかな器面。 外器面：ロクロ回転痕が幾重にも巡る。	[釉色] 内器面：白褐黄色 外器面：褐黄白色
103	白磁皿	残存体部は、下位より上位にかけて漸次、先細りとなる。 (体部厚は下位で5.5mm、中位で4.5mm、上位で2mm)。 復元口径 9.9cm	外器面：口縁下にロクロ回転痕が二重に巡る。	[釉色] 白灰黄色 器面に気泡が目立つ。 内外器面：貫入が走る。 外器面：下位は露胎。 明代の白磁。
104	白磁碗	残存体部はやや内湾気味に伸びる。 体部は薄壁で、下位よりほぼ均一の厚さ(3mm)で、上位に至る。 口縁部は僅かに外湾し、やや直口気味となる。 復元口径 13.9cm	内外器面：丁寧なナデで、滑らかな器面 外器面：釉下に薄いロクロ痕が巡る。 口縁下は沈線状に窪む。	[釉色] 白色 外器面：気泡状の穴が残る。
105	白磁皿	底部は、中央部がやや肥厚(8mm)し端部が内外両底面から僅かに窪む。 (底端部厚 6mm) 底径 3.4cm 高台高 2cm	—	[釉色] 白灰黄色 外底面：下位から高台内の外底面にかけて無釉。無釉の部分は白褐色。 やや焼成不良。
106	磁器	底部は薄壁(3~4mm)。 体部はやや肥厚(6~7mm)。 高台の畳付きは、内外両端から削り取られて、扁平な部分はない。	高台：内外両側は3~4mm幅で、丁寧なナデが施されている。 高台内の内底面にロクロ回転痕が残る。	非常に上質な磁器。 鉄釉がかかる。

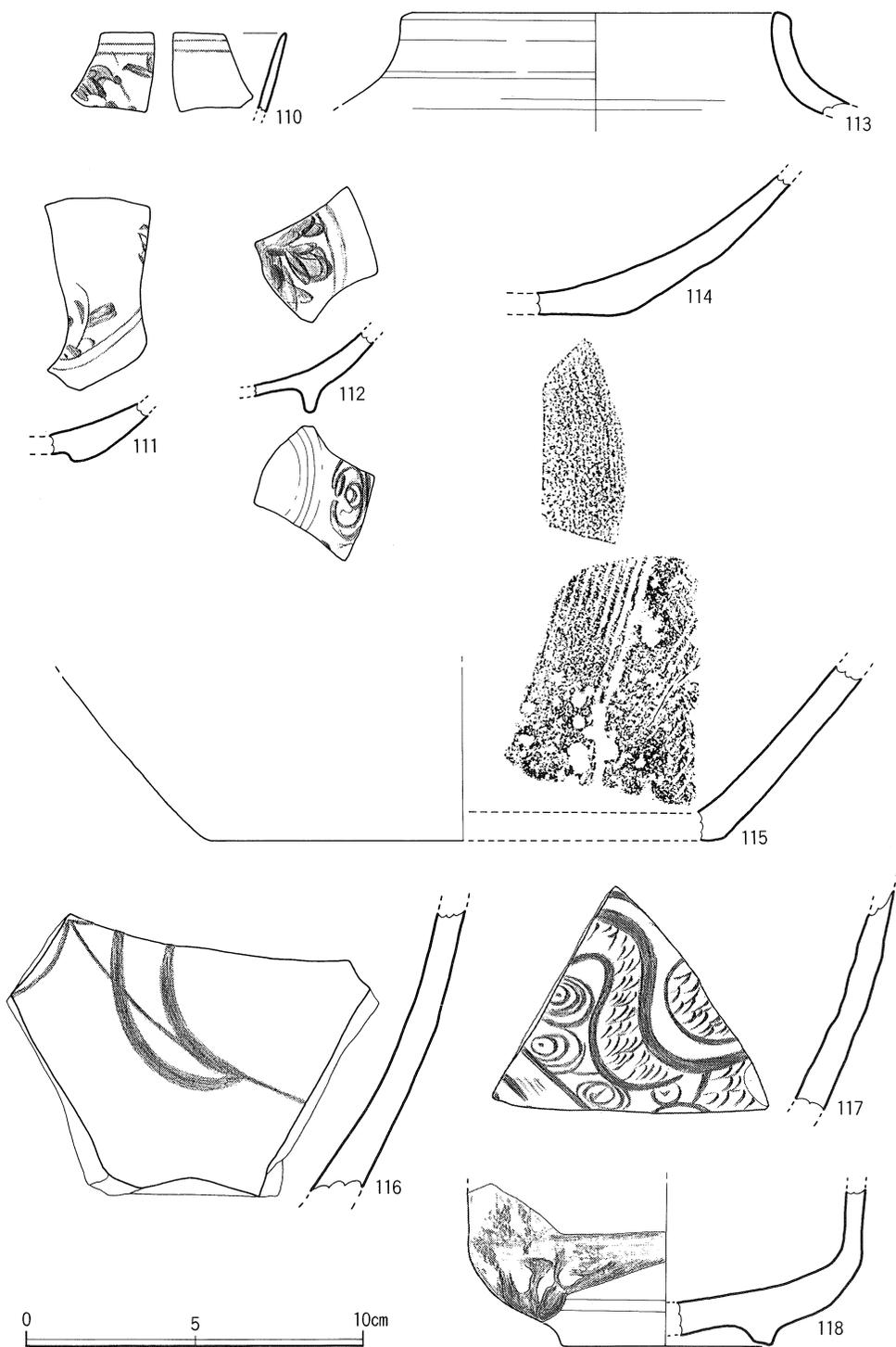
第19表 出土遺物観察表⑭



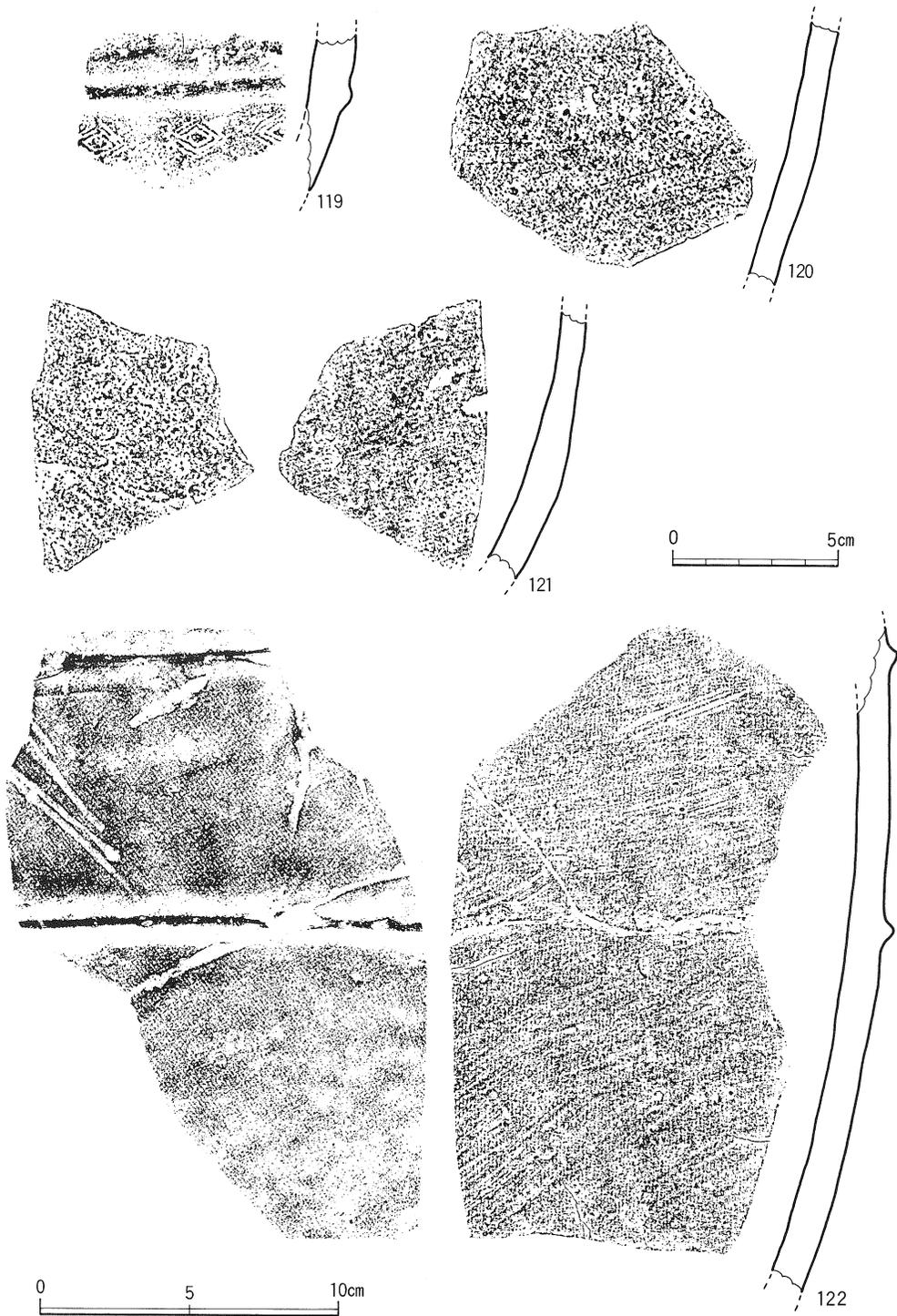
第25図 出土遺物実測図⑭

No	器種	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
107	染付碗 (半磁器)	<p>体部は内湾しながら上位に至り、口縁部で大きく外湾する。 体部は、下位より上位にかけて漸次先細りとなる。 (体部厚は下位で9mm、中位で6mm、上位で3mm、口縁部で2mm。) 口縁部は直口気味となる。 底部は中央部で内外周側へ大きく肥厚(1.3cm)し、端部でやや窪む。 口径 17.1cm 器高 3.4cm 底径 5.3cm 高台高 3~7mm</p>	<p>内器面の口縁下と内底面の端部に界線が巡る。 外器面：前面に筆書きによる、花唐草文のくずれ字。 内底面：同じく、筆書きによる十字華のくずれ字。 筆書きは、いずれも荒々しいタッチで描かれている。</p>	<p>〔胎土〕黄白褐色 〔釉色〕白灰褐色 器面の素地に筆書きで、荒い文様を描き、その上から薄く施釉されている。 内器面と内底面に薄い貫入が走る。 粗製染付け。</p>
108	白磁碗	<p>底部は中央部寄り、内外両側へ大きく肥厚(1.7cm)し、端部で外底面から凹面状に窪む(1cm)。 高台の畳付きは4.5mm幅。 残存体部は、下位7.5mm、中位4~4.5mm。 底径 5.8cm 高台高 2~6mm</p>	—————	<p>〔胎土〕黄灰色 〔釉色〕白黄色 外底面の下位の一部分は露胎。 粗製白磁。</p>
109	大皿 (磁器)	<p>体部は、中央部より端部にかけて、漸次、先細りとなる。 体部は皿を伏せた様な形状であるが端部近くでやや腰折れ状態となる。 体部厚は中央部寄りで9mm、中位で7mm、端部寄りで5.5mm、端部は扁平で5mm。 復元口径 28.6cm</p>	<p>内器面：中央部と端部縁にモチーフ不明の文様。端部はヘラ削り。 端部はヘラ削り。 体部は丁寧なナデで、滑らかな器面。</p>	<p>〔釉色〕黄褐色 器面の素地に文様を描き、その上から釉を塗っている。 ベトナム産。</p>
110	染付碗	<p>残存体部は薄壁で、下位よりほぼ均一の厚さ(2.5~3mm)で、上位に至る口縁直口。</p>	<p>内外器面：口縁下に2条の界線。 外器面：呉須によるモチーフ不明の文様</p>	—————
111	染付皿	<p>底部は碁笥底。 底部 5.5mm 外底端 10mm 体部 5mm</p>	<p>内底面：呉須によって、草花文様の一部と見られるものが描かれている。</p>	<p>呉須(薄色)。 外底端の体部への立ち上がり部分は1cm幅で、露胎。 碁笥底の内底面は施釉。 内外器面：大きな貫入が走る。</p>
112	染付碗	<p>底端は薄壁 3.5mm。 体部はやや肥厚(5~6.5mm)する。 高台高 5~7mm</p>	<p>外器面：曲線を主体としたモチーフ不明の文様。 高台と体部の境に一条の界線。 高台の骨付きは、ヘラ削りにより扁平 内底面：草花文様らしきものの一部が描かれている。体部との境には2条の界線が巡る。</p>	<p>呉須(濃色)。</p>
113	中世雑器 (小壺)	<p>頸部は「く」の字を呈する。 器厚は上位で5.5mm、下位で7mm。 口唇部は、外側へ傾行の状態で作られている。 復元口径 11.6cm</p>	<p>外器面：ロクロ回転痕が残る。</p>	<p>〔胎土〕黄灰白色。雲母が混入。 〔施釉〕灰白黄色。非常に薄く化粧がけをしている。 堅緻な焼成。</p>
114	陶器壺	<p>体部は、下位より上位にかけて漸次先細りとなる。(中位で9mm、上位で5mm。) 体部は30°の角度で、僅かに内湾気味に伸びる。 外底は平底の可能性あり。 底部 6.5mm 外底端 1.2cm</p>	<p>外器面：中位より上位はナデにより滑らかな器面。中位に強いナデにより1cm幅の極浅い沈線が巡る。 中位より下位は粗いナデ。 内底面：ナデにより、滑らかな器面。 外底面：強いナデ。</p>	<p>〔施釉〕茶黄色 内器面：施釉。粟粒状の塊がある 外器面：露胎。 外器面の中位より下位に1.6~2.0cmの幅で、帯状にススの付着がある。 外底面は、やや黄色味が濃い。</p>

第20表 出土遺物観察表⑮



第26图 出土遺物実測図⑮



第27图 出土遺物実測図⑬

No.	器種	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
115	瓦質土器 (播鉢)	復元底径 15.6cm 体部は50°の角度で、直線的に立ち上がる。 体部はほぼ均一の厚さ(8.5~9mm)で中位に至る。	内器面：条線は9本まで確認できるが、ローリングが激しい。 外器面：指頭による調整。ローリングが激しい。	〔色調〕灰黒色~灰褐色
116	唐津	残存体部は下位で1.3cm、中位よりほぼ均一の厚さ(8mm)で、上位に至る。	内器面：黒色と黒緑色の力強い、曲線文様。ナデにより、滑らかな器面。 外器面：ヘラによる、強いナデ。	内器面：施釉、灰色釉 外器面：上位に自然釉(鼠色)、他は露胎。
117	磁器	残存体部は下位で9mm、中位で6.5mm。	内器面：非常に強いナデで、1.3~2.0cm幅の沈線が幾重にも生じている釉下に下絵が描かれている。 下絵は同心円状のもの、曲線及び蛇の目文様のものがある。竜を描いたものと思われる。 外器面：ナデにより、滑らかな器面。	内器面：露胎。 乳褐色と薄小豆色。 鉄泥をかけている。 外器面：コバルト・ブルーのルリ釉が分厚く施釉されているものの、ボロボロ剥離する状態である。 その下に白黄色の釉(化粧土)が施され、その上から下絵が描かれている。 下絵の色調は薄茶色。
118	中世陶器	復元底径 6.3cm。 底部の厚さは9mm~1cm。 体部は下位で1.2cm。 残存体部の中位より腰折れ状態となり、上位にかけて直立する。中位より上位は、ほぼ均一の厚さ(5.6~6mm)となる。 底部の高さは中央部よりで3.5mm、端部で6mmを測り、やや尻上がりとなる。 高台の皿付きは扁平(3.5~8mm)。	外器面：粗いロクロ回転痕。 高台：皿付きは、やや粗いヘラ削り。	内器面：全面に施釉。黒色釉がやや斑にかかる。 外器面：一部に施釉。(黒色釉がタール状に垂れている。) 素地は褐灰色。一部、桃色化。
119	中世雑器 (火舎)	体部(厚さ1.1cm)に突帯が付く。	外器面：突帯下に3重の菱形(1辺が1~1.1cm)のスタンプ。 内外器面：ローリングが激しい。	〔色調〕灰褐色
120	備前 (壺)	体部の厚さは9mm。	外器面：ナデ後、指押え。 内器面：刷け目調整。	〔色調〕 外器面：黄白色の自然釉。 内器面：素地は小豆色。
121	常滑 (壺)	体部は下位で1.1cm、上位で8mm。	外器面：やや粗い刷け目調整。 内器面：ナデ後、指押え。	〔色調〕小豆色
122	瓦質土器 (火舎)	体部はやや内湾する。厚さは、ほぼ均一(1.1~1.2cm)。 突帯が付く。	外器面：丁寧なナデ後、指押え。 内器面：刷け目調整。	〔色調〕灰白色

第21表 出土遺物観察表⑬

第V章 ま と め

第1節 調査結果

〔1〕検出遺構

(1) 南側帯曲輪は調査の結果、段堀の形状をなす事が判明した。即ち、山付きの北側半分はカットされて、平坦な幅9mのテラス状となっており、残り半分の南側斜面からは、大規模造りの堀切②(上場幅7.3m)が検出された(堀切の南北両岸の比高差は2m)。

堀切②は埋土の状態から意図的に、それも短時間の内に埋め戻されたものと思われる。埋土は小礫を含んでおり、自然の堆積状態ではなかった。遺物はほとんど出土しなかった。

(2) 今回の調査で、遺物が多量に出土したのは、堀切②の北壁斜面を大きく掘り込んだ播鉢状の遺構である。本文中に実測図を掲げた遺物は総て、この遺構から出土したものである。

これについては、堀切②が埋められる時に、城の生活用品を破棄するために掘られたゴミ穴の可能性が高い。

(3) 南側帯曲輪のテラス状地形に掘り込まれた6基の土壇(SK1~6)は、SK4から墓碑(無銘文)と思われる凝灰岩の切り石が出土した事や、遺構の形状から墓壇に間違いはない。

時期的なものに付いては、SK1から近世染付けの細片が出土している事から、江戸時代の後期に位置づけよう。

(4) 南西側帯曲輪には、曲輪の主軸方位に沿う空堀の埋没が考えられたが、遺構は存在しなかった。但し、調査区2の地表土から地山に至る堆積土の中に、14片の土師器の細片が含まれており、帯曲輪が削平によるものでなく、客土による造成地である事が判明した。

(5) 堀切①は尾根筋の北側鞍部に残る自然地形を利用したもので、やや消極的な造りである。

堀切①より北側は、尾根続き(長さ約200m)となっているが最終的には山稜地帯に吸収されている。本来ならば北側鞍部に城跡の北限となるべく大規模造りの堀切が必要であろう。しかしながら、堀切①の構造はその条件を満たすには、ほど遠いものがある。この事は城跡の性格を考える上で重要な事象であろう。

〔2〕出土遺物について

1. 青磁

(90~92) 線刻による蓮弁文様を有する碗で、文様はいずれも簡略化されている。時期的には15世紀まで遡る可能性をもっているが、多くは16世紀前半から中葉の間にあると考えられる。

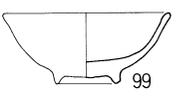
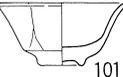
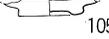
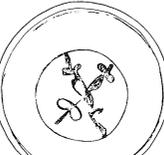
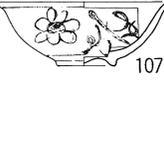
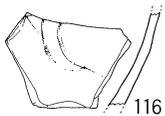
(93~96) 雷文帯蓮弁文様を有する碗である。96の文様は極めて簡略化されたものとなっている。時期的には15世紀末頃と推察される。

(98) 碗の底部で、高台内の外底面にまで施釉されている。時期的には14世紀末から15世紀中葉頃と推察される。

(99) 碗で内器面の釉下に不鮮明な陽刻文様がある。高台の外縁下位より外底面にかけて無釉となる。時期的には15世紀頃と推察される。

2. 白磁

(101) 八角坏である。釉色は乳褐色で、外底面に墨書きらしき痕が残る。時期的には15世紀

	青磁	白磁	半磁器	その他
14 C				
15 C	    	   		
16 C	  		 	 

第22表 遺物年代別分類表

頃と推察される。

(102・103・105) 明代の皿である。釉色は全体的に黄色味を帯びている。102・103は外器面にロクロ回転痕が目立つ。時期的には15世紀中葉頃と推察される。

(104) 碗である。体部は薄壁で、やや内弯気味に伸びて、口縁部で僅かに外弯する。時期的には16世紀末頃と推察される。

3. 半磁器

(107) 染付けの半磁器である。内外器面に花唐草文と十字華のくずれ字が描かれている。時期的には16世紀頃と推察される。

4. その他

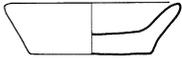
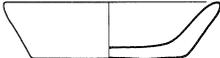
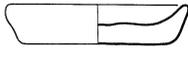
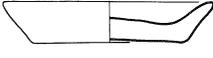
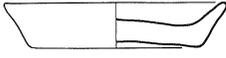
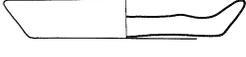
(112) 染付け碗で、内外器面に濃色の呉須で文様が描かれている。時期的には15世紀末から16世紀中葉頃と推察される。

(116) 唐津焼きで、内器面に黒色と黒緑色の曲線文様が描かれている。時期的には16世紀末頃と推察される。

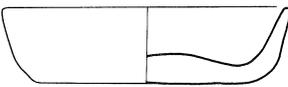
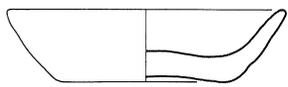
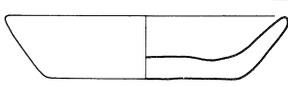
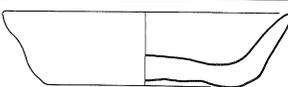
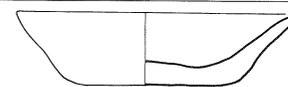
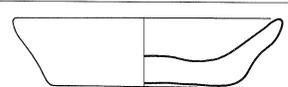
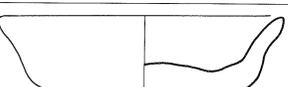
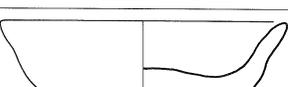
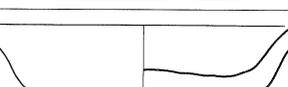
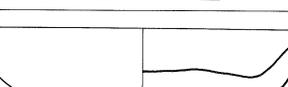
5. 土師器 (1~89)

出土品は総て糸切り離しによるものである。完形品もしくはそれに近い物が多かった。

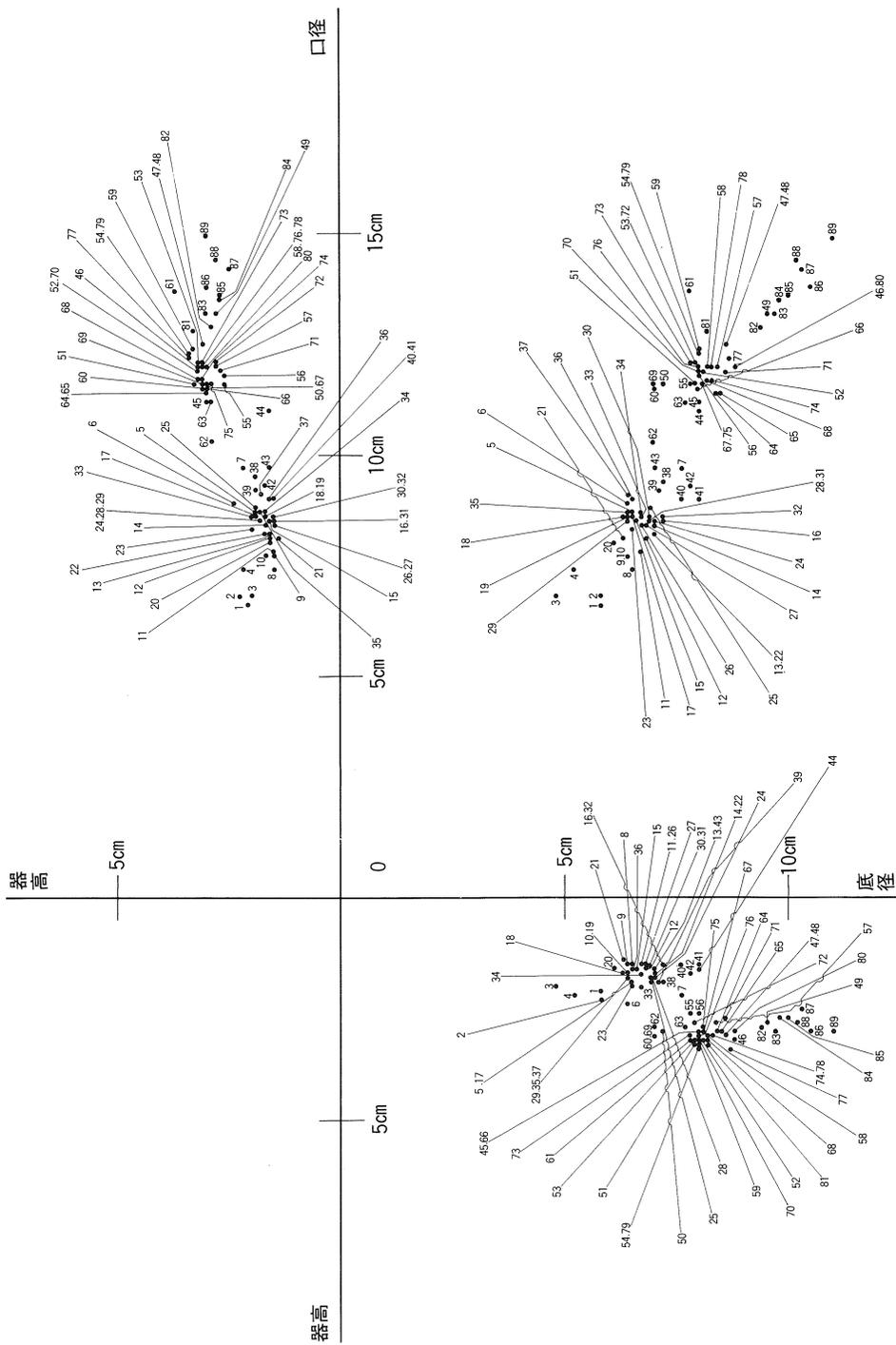
形態から皿と坏に分類され、さらに皿はa~f類、坏はg~r類に細分される。

形態分類	形状及び特色	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	実測図 (代表例)	実測図番号
a類	小型で縦長の坏を縮小した様な形状。	2.0~2.3	6.6~7.4	4.8~5.8	 (4)	1~4
b類	大型で横長の坏を全体的に縮小したような形状	1.9~2.4	7.8~9.7	6.4~7.6	 (6)	5~7
c類	最も小型の量。	1.5~1.7	7.4~7.8	6.4~6.7	 (10)	8~11
d類	出土品のなかでは、最も数の多いタイプ。	1.4~2.0	8.0~8.8	6.1~7.2	 (35)	12~35
e類	大型タイプの量。	1.5~1.9	9.0~9.7	6.4~8.0	 (38)	36~43
f類	最も、大型の量。	1.6	11.0	8.0	 (44)	44

第23表 土師器 (皿) 形態分類表

形態分類	口径と底径の比率	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	実測図 (代表例)	実測図番号
g類	0.69~0.73	2.8~3.2	11.2~13.2	8.0~9.5	 (46)	45~49
h類	0.62~0.68	3.0~3.4	11.6~12.3	7.2~8.1	 (50)	50~54
i類	0.67~0.70	2.6~2.8	11.6~12.0	7.8~8.4	 (56)	55~57
j類	0.65~0.68	3.1~3.3	12.0~12.4	8.0~8.2	 (58)	58・59
k類	0.57~0.61	3.1~3.7	11.5~13.7	7.0~7.8	 (60)	60・61
l類	0.68	2.9	10.3~11.2	7.0~7.7	 (63)	62・63
m類	0.67~0.75	3.0~3.2	11.4~11.9	8.0~8.5	 (70)	64・70
n類	0.72	2.7	11.9	8.6	 (71)	71
o類	0.64~0.65	2.8~3.1	12.1	7.8~7.9	 (73)	72・73
p類	0.64~0.73	2.9~3.4	11.6~12.8	8.0~8.8	 (78)	74~81
q類	0.73~0.76	2.7~3.0	12.9~13.8	9.4~10.5	 (82)	82~86
r類	0.71~0.74	2.5~3.0	14.2~14.9	10.2~11.0	 (88)	87~89

第24表 土師器 (坏) 形態分類表



第25表 土師器 (皿、环) 法量表

〔 3 〕 城跡の性格及び構造について

崇圓寺の裏山は、本文中でも述べた様に、一応、中世山城としての必要条件を満たすものであるが、城跡の造りは堀切②を除いて、発掘調査によらずとも地形観察から全体が消極的である事は否めない。この事は、調査地の城跡において城域北限の堀切①よりも、崇圓寺側の堀切②が実質的な堀切としての役目を果たしているのを意味しているのではあるまいかという考えに至る。地形からして、この城跡地には北側背後の尾根筋を断ち切る大規模造りの堀切がどうしても必要だからである。

この事から、城そのものは館であって、本体は崇圓寺境内にあり、裏山は付属的な単なる詰め城であった感じがする。さらには、この見方に加え、昭和60年度における球磨郡山江村所在の中世城跡（下城子箇所）の発掘調査結果から、詰め城の二次的要因として戦（いくさ）神を祀った場所であるとも考えられるのである。この事に関しては今後、主郭部分の発掘調査が計画されているので、調査結果を待ちたい。

〔 4 〕 下田城跡（城山）との関連について

結論的に言えば、下田城と河内浦城は同一の城ではないかと思われる。それは、①両城の比定地が一町田川を挟んで近距離に位置する事。②下田城跡地は山中という所在地からして典型的な詰め城の要素を呈し、一方で、河内浦城跡地は館の可能性が極めて高い事が理由として上げられる。両城は明らかにセット関係にあると思われる。しかし、結論を得るためには、最終的に下田城跡の発掘調査が必要となろう。

〔 5 〕 まとめ

- ① 調査地は河内浦城（下田城）の裏山に築かれた付属的な詰め城（本来の詰め城は下田城と考えられる）の可能性が高い。時期的には、堀切②を切り込むゴミ穴的な遺構から出土した一括遺物により、16世紀末を下限とする事が確かである。上限については15世紀の中頃と推定した。下限の時期については『天草国土考』の天正16年(1588)の廃城説と一致する。
- ② 出土遺物はすべてゴミ穴的な遺構から出土したもので、資料的な価値が高い。ベトナム産の大皿や、珍品の類である中国産の半磁器碗が含まれており、天草氏の交易関係が伺われる貴重な資料である。

〔 大 田 〕

第2節 総括

本報告書で取りあげた崇圓寺一帯は、天草下島の中南部に位置し、東シナ海へ連なる屈曲の著しい沈降海岸、羊角湾の最も奥まった地域である。天草地方では有数な河川である一町田川の河口右岸に占居する交通上、軍事上の要衝である。

古くからこの地域は河内浦と呼ばれていた。本書の付論「河内浦と天草氏」で、鶴田倉造氏が述べられているとおり、『天草種有讓状案』（志岐文書）によると、鎌倉幕府から本砥島の地頭に任じられていた天草種有が、貞永2年(1233)には地頭職をその子、播磨の局らに譲っているが、このうち「かわちのうら」を一族の「こまわう」に譲っている。「河内浦」の地名が文献上初めて見える事例でもある。以来、河内浦の地名は中世～近世にかけて天草島を代表する存在となった。

ところで、河内浦城と深い関係があるとされていた、崇圓寺の裏山に墓地造成の計画が持ち上がった。平成元年の春のことである。河内浦町教育委員会の適切な対応と、崇圓寺の理解と協力によって、調査の機会が与えられた。

調査地は一町田川の河口右岸に突出した舌状の丘陵上にあたる。北から延びた丘陵を堀切によって区分した城跡となっている。この城跡は第Ⅲ章の第5図に示すとおり、北から南へ延びる丘陵の鞍部を造成して主郭部を形成し、その西側から南側にかけて帯曲輪を設けたものである。

発掘調査の箇所は南側帯曲輪、南西側帯曲輪、北側鞍部である。帯曲輪について前者は北側半分をカットした平坦地、その南側には堀切を有する段堀の形状をとっていることが判った。後者は客土によって造成されたものであることがわかった。

出土遺物は南側帯曲輪から多量に出土しているが、残念ながら遺構に直結するものでなく、破棄されたものと推定される。青磁、白磁、土師質土器などで、15～16世紀にかけてのものである。

今回の調査では主郭部の発掘を行っていないので的確な推察は出来ないが、15～16世紀に現在の崇圓寺の境内を本体とする館的な構えがあり、その裏手に当たる一帯は防御的な役目をもった「詰めの城」であったものであろう。つまり、河内浦城（下田城）の裏山を守るための防御施設としての可能性をもっているといえる。

[限]

付論 河内浦と天草氏

鶴田倉造

[一]

河内浦と天草氏の関係を示す初出の史料は、次の「天草種有讓状案」(志岐文書)貞永二年(1233)二月十六日付けである。

「ちやうゑい二年二月十六日たねあり入道書付^案・壹通入」

ゆつりわたす

ひこのくにあまくさのこほりのうちたねあり入道かりやうほんとのしま乃ちとうしき
乃事

右、くたん乃しまのちとうしきハ、はりま乃つほねをちやくしとして、代々乃御くたしふ
ミをあひくして、ゆつりわたすところなり、このうちかうちのうらハ、めにて候も乃なら
ひに、こまわうにおもひあて候ぬ、又おほミと申候むらハ、女子をく、まにゆつり候ぬ、
かちやまかうち、をなしきしんひらきたかハマ^(高 浜)・ひらうら・うふしまハ、又太郎入道にゆ
つり候ぬ、そのほかハ、はりまのつほねに一向に知行せられ候へし、た、しめの女・こま
わう^(と脱)・をく、まかふんも、はりまのつほねを入道かあとそむして、そのめいにたかふへか
らす、又はりまのつほねも、をやのゆいこんをたかへす、これらをおやのかたミとそむし
て、まとハかさす、れんみんすへし、のちのそうもんのために、ゆつり状をわたすところ、
くたんのことし、

ちやうゑい二年^{才次}二月十六日

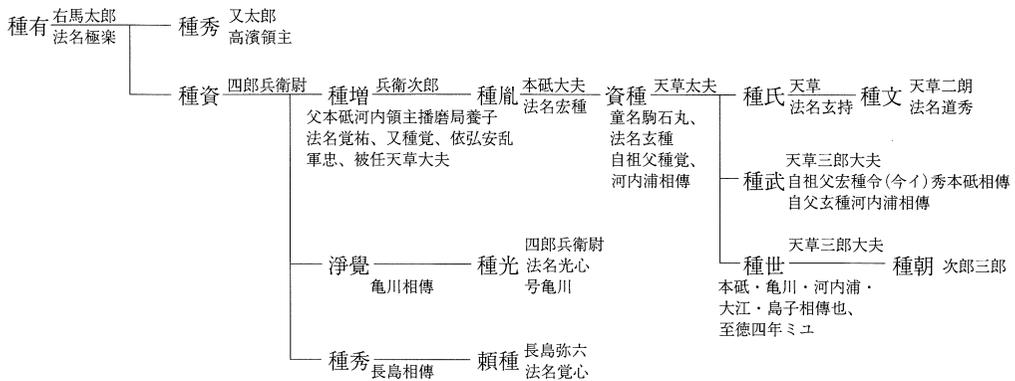
本碓島本主右馬太郎法名極楽
是者取初之讓文

たねあり入道在判

上文中下線の部分は「河内浦は女にて候もの并に駒王に思いあて候ぬ」「平浦・産嶋は又太郎入道に譲り候ぬ」と読める。この文書からは、種有が「本碓島地頭職」に任ぜられた時期は不明であるが、貞永二年には少なくとも現在の本渡から河内浦・平浦・産島・大江・高浜にいたる天草下島南東部一帯を領していた事は確かであり、その内、河内浦は位置から見て中心地にあり、「女にて候もの」即到に妻に譲ると言っている点からみて、内容的にも重要な地点であった事が推定される。

[二]

その内、駒王は「大蔵系図」の種資に比定されているので、その後、数代分を抜粋すれば、次の通りである。



この系図から考えると河内浦を領したのは、種有・種資・種胤・資種・種武・種世の6人が考えられ時代的には貞永二年(1233)から至徳四年(1387)頃までが考えられる。その中、種増について「弘安乱軍忠により天草太夫に任じらる」とあるのは、後代、天草太夫を称する者が見られる端倪を開いたのが種増であった事を示す点で注目される。

[三]

正和二年(1313)に至って天草氏領の本砥は志岐景弘に併呑されるが、建武四年(1337)、北朝方の一色範氏が本渡嶋及び亀川の地頭職を志岐高弘に与えようとした際、河内浦三郎が抵抗したとする史料を次に示すと

一色道猷^範書下 [志岐文書八]

(包紙)

「建武四年丁丑五月三日沙弥 宇都宮大和太郎・豊福彦五郎へ被遣候書付壺通入」

山鹿兵藤太郎高弘申肥後国天草郡本砥嶋并亀河地頭職事、請文披見訖、兩度催促之處、河内浦大夫三郎入道構城墾、向使者放矢、致自放火、不叙用云々、頗招重科歟、所詮重莅彼所、任法退大夫三郎入道、可沙汰付下地於高弘、若猶及異儀者、載起請之詞、可被注進也、仍執達如件、

建武四年^{丁丑}五月三日

(一色道猷) 沙弥(花押)

(範綱)

宇都宮大和太郎殿

豊福彦五郎殿

藤原範綱請文 [志岐文書九]

(包紙)

「建武四年六月廿九日藤原範綱の御奉行所へ之請文 書付壺通入」

(端裏書)

「宇都宮大和太郎

建武 」

山鹿兵藤太郎高弘申肥後国天草郡本砥・亀河地頭職事、去二月十四日御教書謹拜見仕候畢、抑任被仰下候之旨、豊福彦五郎相共、今月九日莅彼所、欲令沙汰付于高弘候處、河内浦大

夫三郎入道・同一族以下与力人等、大勢令楯籠城塚、及自放火、付善悪不可叙用之由令申之、不避退候之間、不及打渡候、若此条偽申候者、

八幡大并御罰於可罷蒙候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武四年六月廿九日

藤原範綱請文（裏花押）

進上 御奉行所

即ちこの頃に至って天草氏は居住地河内浦をとって姓としていた事を知る注目すべき史料である。文中「城塚を構え」とあるのは何処を指すか不明である。

〔 四 〕

貞和二年に至って足利直冬から安富泰重に本砥・河内浦地頭職を與えるとの次のような下文があるが、実行に至ったかどうか不明である。

足利直冬下文 〔 深江文書一四 〕

下 安富民部丞泰重

肥後国天草郡本砥河内浦<sup>天草大夫
十郎跡</sup>・周防国仁保庄<sup>平子彦
三郎跡</sup>地頭職事

右、為勲功之賞、所充行也、早守先例、可令領掌、但本主參御方者、可有替沙汰之状如件、

^(押紙)
足利右兵衛佐直冬

貞和六年七月十七日

（花押）

広福寺文書「天草種国請文」正平廿年十月廿五日によると、白木河内や軍浦等は明らかに種国所領であることが明白であるので、頭書の史料はむしろ空文に終わった可能性が高い。

〔 五 〕

明応十年、菊池武運は天草一揆中に次のように小野・豊福を宛行つて、志岐領の蒲牟田で関係者の談合を行ったが、その席に列した天草殿は河内浦天草氏である可能性が高い。

菊池武運^{能運}宛行状 〔 志岐文書二一 〕

^(包紙)
「明応十年辛酉七月五日武運の天草御一揆中へ
被遣候書付壺通入」

^(肥後国八代郡)
小野・豊福両所之事、各江進之候、御知行可然候、手仕等、当郡之方々被申合、早々御結
^(マ、)
構簡要候、恐々謹言、

「明応十年^{辛酉}」

七月五日

^(菊池)
武運（花押）

天草御一揆中

天草一揆談合覚書 〔志岐文書二二〕

^(包紙)
「明応十年辛酉七月中旬之比ト有之候書付一通入」

^(菊池) ^(形)
従先武運屋刑様、小野・豊福両所被下候御判、御一揆中者書移被召候、正文之亥、愚身所請取申候、上使者楊蔵司与申方にて候、詫磨重房、是も為 上使当郡江御渡海候刻、愚領於蒲牟田、御一揆中御参会時分、此御判到来候、明応十年^{辛酉}年七月中旬之比、其時談合ニ、上津浦殿・宮地殿・天草殿・長嶋殿者御越候・自大矢野者名代合津方、栖本よりハ名代^{鏡殿}、自久玉者名代広瀬膳左衛門方、

〔 六 〕

天文から弘治・永祿の始めにかけては天草尚種の全盛時代で『八代日記』や『求麻外史』に次のような記事がある。

① 天文元年、天草尚種は志岐・栖本・大矢野・長嶋諸氏と連合して、上津浦治種を攻めている。

(天文元年)

六月七日 ^(菊池義武) 屋形御使としてサイシウ院御着候、九日帰候、同十三日 ^(尚種) ^(重経) 天草・志岐・栖本・大矢野・長嶋同心にて上津浦ニ動候、そのまま着陣候、同十六日 八代ヨリ上津浦治種ニ合力、一番衆御立候、同廿六日 二番衆御立候、七月一日^{丁未} 上津浦にて合戦、相良六郎左衛門尉方打死、^{上津浦治種來親殿原} 同九日 上津浦之城つめ候、^{中間二十八人打死候、} 同十一日ニ三番衆立候、十八日 四番人数被立候、廿二日 天草・志岐申剋ニ開陣、同廿五日ニ長唯様求麻ヨリ佐敷ニ御下候、長種もさしきへ御下候、八月四日ニ治種^(上津浦)佐敷へ御着舟候而、御人数御合力之御礼候、同七日ニ治種佐敷より八代御出候て、同廿日帰宅、 (八代日記)

天文元年壬辰夏六月十三日。天草尚種。長嶋但馬守。與志岐。栖本。大矢野。^{以上三人合兵名關} 撃上津浦治種。十六日。公遣八代兵救之。秋七月朔。我兵與敵兵戦而克之。相良六郎左衛門尉死之。二十五日。公適佐敷。長種來見。八月四日。上津浦治種來佐敷拜師。

(求麻外史)

② 天文十六年、天草尚種は相良晴広を佐敷に訪問後、獅子嶋に招待し、武具を贈っているが、これは当時、獅子嶋も天草領であった事を示す貴重な史料である。

(天文十六年)

五月六日 ^(尚種) 晴廣様、天草殿ニ御参会として、^(佐敷) さしきへ御行候、同十四日 天草尚種佐敷ニ御着船候、案内者として船本まで澄河八郎左衛門尉方被出候、御小宿杉本坊、

同十五日ニ御参会、たかいに御こし物御ひき候、又尚種(天草)よりはうとう・はいたて晴廣(類当)に被進(騰立)候、晴廣ヨリ天草殿ニ腹巻被進候、十六日 天草殿出船候、
(八代日記)

(天文十七年三月)

晴廣御出と候て、

同十四日ニ天草殿(獅子島)し、か嶋ニ御出候て、廿日の日まで御逗留候、天気あしく候て、晴廣様御渡海御座なく候、

同廿日ニ晴廣様佐敷ニ御光義候て、廿二日ニ御出船、廿四日ニ天草殿御参会、

廿五日ニ栖本殿舟ヨリ海上ニテかつら引せられ、かめ廿五御もたせ候、数々御会尺、二間斗(戸)ニテ大矢野御会尺、晴廣様八代ニ廿六日ニ御帰宅、

四月七日 (阿久根)あくねきこり八代ニテ作候唐船、江口まで出候、

同十四日ニ天草殿ヨリ晴廣様御光義之時、進上候引物之馬被遣候、毛黒月毛印蜻蜒、
(ママ)

(八代日記)

(天文)十六年丁未夏五月。日開天草尚種來會公于佐敷。尚種贖甲及腿甲。公報以身甲。是日。大内義隆贖刀。

十七年戊申春三月。天草尚種招公。二十二日。公發佐敷。二十四日。公會尚種於獅子嶋。尚種厚饗之。栖本兵部大輔。大矢野某。相繼謁公。供給亦渥。秋八月二十四日。蓮乘公大祥忌。赦於三郡。冬十一月三日。大矢野某來八代。公享之陣内。十九日。長嶋但馬守來八代。
(求麻外史)

③ 天文二十三年、天草尚種は相良晴広の意見によって長嶋氏に領地を返したが、まもなく長嶋氏は出水に追われたので、同二十四年天草尚種が長嶋の返還を求めている。

(天文廿二年七月)

同廿四日 天草殿ヨリ使僧八代ニ着候、長島殿ニ領地被進候へと晴廣様ヨリ御異見候、就夫領地被進候使僧なり、

同廿五日 蓮性寺・松源寺、水保ニ長嶋殿御座候ニ使僧、卅日帰宅、
(八代日記)

(天文廿三年)

六月賀賀国白山ニ俄ニ地獄出クルナリ、
七月九日 長嶋鎮真長嶋落去、和泉のこたく御渡候、

同廿六日ニ長嶋知行として、山野市允方・小田兵左衛門尉方長嶋被遣候、
(八代日記)

(弘治元年九月)

同廿六日ニ天草殿ヨリ使僧、巨細ハ長嶋ヲ歸し給候へかし、其故ハ晴廣さま御存命の時申候
一人当家御名字ニテモ候へ、又長嶋名字ニテモ候へと被
こたく、天草殿舍弟〇仰候、御返事趣、求麻年行ニ仰合、其上豊州御下知之申次にて候間、
爰元にてハ難成よし候て使僧御返し候、
(八代日記)

(天文廿三年)

秋七月。日^{長嶋}鎮^眞鎮眞未詳何人。蓋但馬守也。棄長嶋逃出水。公使山野市允。小田兵左衛門守長嶋。

(求麻外史)

(弘治元年九月)

二十六日。天草尚種遣使。請復長嶋。且令弟某^多稱相良氏若長嶋氏。公不許曰。吾將取裁於探題豊後侯。

(求麻外史)

④ 永禄三年七月 天草尚種の中達で、相良義陽は水俣を受け取っている。

(永禄三年七月)

同三日^{丁卯}日 水俣城請取^(尚種)天草殿中途^(ママ)ニテ候、水俣十二屋敷去被進候、兼而自菱刈右之儀中途^{(朱)「達」}至三日ニ候而、相違候而、天草殿一人ニテ城請取、此方へ渡仕候、天草ヨリハ舍弟兩人^{(朱)「預」}人衆数多、舟十三艘ニテ津奈木ニ着船、同五日ニ左京進方帰宅、

(八代日記)

(永禄三年七月)

公遣東京亮。取水俣城。政嗣案。先是蓋失水俣而今無所考。天草尚種來授城於我。公遣佐牟田民部少輔於天草謝之。

(求麻外史)

⑤ 永禄七年、天草氏は小嶋子・下砥岐を上津浦氏に返還している。

(永禄七年五月)

同十八日 上津浦ヨリ朝音寺八代ニ為使御越候、旨趣ハ頼房さま御下向御祝、又豊福ニ火色の事いか、候哉、又天草殿ヨリ小嶋子者もトキ御帰し候而、如代々一味の事うけ給候、此方ヨリ如此之義御存知候哉、

(八代日記)

(永禄七年六月)

同廿七日^{戊戌} 上津浦ヨリ、小嶋子・下砥岐天草殿ヨリ御去進られ候間、今日知行之由、七月五日ニ八代ニ任進、^{(朱)「注」}

(八代日記)

⑥ 永禄八年、天草氏が志柿に出陣の留守をうかがって、出水の具付義虎は長嶋を併合してしまう。

(永禄八年三月)

同廿三日^{庚申}天草殿ヨリし^(カカ)のきニ動、長嶋彼留守、和泉ヨリ知行、^(出水)
同廿四日 和泉ヨリ長嶋ニ働候て、彼地和泉ヨリ知行、時義ハし^(宣)のき働之通栖本ヨリ注進、^(カカ)
當時志岐・栖本・和泉与力、長嶋人躰其女中、和泉衆ふせき候て是又打死、

(八代日記)

[七]

永禄十二年、イルマン・ルイス・ダルメイダは天草領の布教を開始した。(十月廿二日付の手紙の抜粋) 天草殿は、天草鎮尚である。

一五六九年十月二十二日〔永禄十二年九月十三日〕付、イルマン・ルイス・ダルメイダ Irmão Luis Dalmeida が日田 Fita よりニセヤ Nicaea の司教パードレ・ドン・ベルショール・カルネイロ Bispo Padre Dom Belchior Carneiroに贈りし書翰

志岐の島にはパードレ・コスモ・デ・トルレス予を派遣し、同所において数人の
ダルメイダ
およびバズ
天草布教状
況
キリシタンを得たるが、同島には志岐の領主より三倍大なる他の領主あり。説教を
聴かんことを切望せしがゆえに、パードレ・コスモ・デ・トルレスは予を同所に遣
はし、志岐にはイルマン・ミゲル・バズ Irmão Miguel Vaz 留りて三百人をキリ
シタンとなせり。予はその領内に来らんことを懇望せし天草の領主のもとに赴きし
が、予を歓迎し、その邸に近き一つの寺院に滞在せしめたり。予は彼と儀礼を交換
し、二十日の後彼を試みんため、辞去せんと欲する旨を告げしが、彼は大に予が去
らんとするを悲しみ、説教を聴聞し、また家臣をしてこれを聴聞せしむることを怠
りしを遺憾とし、家臣が説教を聴き、望に任せ、キリシタンとなる許可を与へしが、
予はその国を支配せし者は家臣等にして彼は勢力弱きことを認め、その領内に留る
につき五カ条の請願をなしたり。第一は領内にデウスの教を弘むることを満足とせ
る旨の城主等署名の文書、第二は彼が家臣等の奉ぜんとする教を知るため八日間説
教を聴くこと、第三はデウスの教を善と認めたる時はその子のうち一人をキリシタ
ンとなし、キリシタン等をしてこれを首領に奉戴せしむること、第四はその町に会
堂を設けんため適當の地所を与ふること、第五はその町より志岐にいたるまで沿岸
七レグワの間、キリシタンとなる許可を与へんことなりき。予は彼がその領内に留
ることを望みしを認め、右の要求をなせしが、彼は悉くこれを許容し、聴聞を始め、
十日間聴聞していかにして救はるべきかをよく了解し、その家の人々もまた聴聞を
始め、予はこれに洗礼を授くることを始めたり。第一には全領の執政にしてその家
人とともに約五十人、ついでその外舅が約五十人、ならびに殿の家臣数人とともに
洗礼を受けたり。また同所の郊外を巡り四百余人に洗礼を授けたり。これをなすに
ドン・レア
ン
当りドン・レアより大なる援助を受けたり。これは執政に与へたる名なり。この
地悉く動かされ、洗礼を受けんと欲せざる者なきにいたりしが、この時悪魔は非常
に烈しき迫害を始めたり。 (後 略)

受洗礼者多
し

ドン・レア
ン

[八]

天正十年、天草鎮尚没す。

天草鎮尚の死を報ずるフロイス書翰

一五八二年十月三十一日〔天正十年十月十五日〕付、口ノ津発、パードレ・ルイス・フロイス Luis Froes よりイエズス会総会長に贈りたるもの（抜）

天草領主の
遺言

下の地方に在る重立ったキリシタンの領主の一人は天草 Amacucaの領主であり、その家臣と諸城の人は皆キリシタンで、聖堂は三十カ所或はそれ以上ある。この領主はドン・ミゲル Dom Miguel と称し、コンパニヤの親友で、すでに老人ではあるが、当キリシタン教会の父である。パードレ・ルイス・ダルメイダの書翰によれば、本年彼は重病に罹り、その死の近きを知って非常なる苦痛の間にその子、親戚及び家臣等を招き、末期に言はんと欲して残し置いたかの如く、皆信仰を堅うし、決してデウスの教を棄つるなど言ひ、キリシタン教会に対して処すべき道を長く聞かせた。諸人はこれを聞いて涙を流し、或る者は告白をなし、或る者は行状を改め、また信仰を堅うし、一層教会を愛した。（パードレの言に）予はその病気の間絶えず彼と共にゐたが、彼は言葉少き人であったにかかはらず、この病中は親戚の武士、子女及び友人等に対して絶えず説教をした。サン・フェリペの祝日〔一五八二年五月一日すなはち天正十年四月九日ならん〕彼は所持の武器数種をカザに贈ってデウスに捧げ、その妻ドナ・グラシャ Dona Graciaは都から来た立派なる着物 quimao

領主の婦人
グラシャ

に金と絹糸をもって木の葉を繙ったものを送り、これを貧民に分たんことを請うた。

領主ドン・
ミゲルの死

ドン・ミゲルは手を挙げて祈祷をなす習慣であったため、既に息絶えんとし脈搏も止んだ時、聖宝及びゼズスのロザリヨを持った手を挙げ、デウスの聖名を唱へ、彼と共にこの名を呼ばざる者を叱った。彼は約七十歳であったが、かつて事故あり、年少の侍婢が来り手を取って助けんとした時、彼は手に触れさせず彼女を去らしめた。また病中彼は甚だ従順で、強いて何か食べさせんとする時は、パードレの命令であると言えば十分で、デウスが命じ給うたかのやうに服従し、パードレの命ずるところで行はざることはこの世にないと言った。彼はその最後の時に至って心中に大いなる平和と歎息を感じ、息絶える前手を挙げて今行くと云った。それで我等は皆彼が天より招かれて我等を離れたものと信じてゐる。葬儀は日本人が特に大切とするのである故、ピセプロビンシャルはパードレ及びイルマン数人ならびにセミナリヨの少年等を連れて同所に赴き、今日まで日本において行った最も立派な葬儀を営んだ。雪の聖母の祝日〔一五八二年八月五日すなはち天正十年七月十七日〕ドナ・グラシャは彼の葬儀を行ひ、当日は千余人の貧民に食物を与へた。その子ドン・ジョアン Dom Joao もまた同じことをなし、よき父ドン・ミゲルが天に積んだ功德によって、この地のキリシタン教会は万事都合よく運んでゐる。

ドン・ミゲ
ルの葬儀

ドン・ジョ
アン

天草殿の嗣子ドン・ジョアンは二つのよきことをなし、その一つによって彼の信

仰を示した。彼が薩摩の王の軍と共に戦場にゐた時、熱心なる偶像崇拜者である薩摩の執政の一人が、彼に信仰を棄てんことを切に勧めた。彼はこれに対して、戦のことについては執政の命に服従するが、デウスに対し転向するが如き罪を犯さんよりは、寧ろ死を決心してゐると述べ、かくの如き勧告をなすよりは寧ろ殺さんことを請うたところ、相手は彼の決心を見て再びこれについて語らなかつた。第二のこ
聖堂の建築 とは、その父の靈魂のために今大なる聖堂を建てつつあることで、これがため木材を与へ、キリシタン等もまた喜捨をしてゐる。彼はわがカザの地所を拡げ、また山の麓に地を開拓し、大なる十字架を建て、ここにその父を葬ることを命じた。

〔 九 〕

天正十九年（一五九一）天草にコレジヨが建設された。

コレジヨ天草移建を伝えるフロイス年報（一五九一年七月一日は長崎祭）

司祭たちには、大勢の（イエズス会関係）者たちを人々の往来の頻繁な場所に置くのは非常に危険なことに思われたので、これらの殿たちは学院と修練院を撤去して、それらを天草に移させるようと強く要請するところがあった。（この件について）（有馬）ドン・プロタジヨが断固として同意しなかつたので、ついに巡察師が自ら有馬に出かけてドン・プロタジヨを説得せざるをえなかつた。ドン・プロタジヨはようやくのことで、学院を天草に移転させることを諒承したが、せめて神学校は自領に残すことを条件にした上でなければ、決して同意しようとはしなかつた。同じように大村殿も、修練院の天草移転を諒承したが、ただし、（領内の）キリシタン宗団の世話をしていた司祭たちのほかに、日本語を学習していた司祭たちも、大村に残留することを条件とした上でのことであつた。

これらのことを決めた後、巡察師はこのことを、学院、修練院、神学校まで己が領内に移転させるよう懇望していた天草ドン・ジョアン（久種）殿に報告した。これは天草殿がこの隠匿地〔こども我らは骨折つて造営する必要があつた〕を提供して、限りない愛情をもって司祭たちを受け入れるためだけでなく、天草殿自身と（小西）アゴスチノとの間の平和が、よりいっそう固められるためにもなつた。

しかし（学院、修練院、神学校という）三つの大きい家屋には、それぞれに我ら（イエズス）会員、同宿、下僕を含めて、百人を超えるほどの人員がおり、それらをただちに移動させるのは難しいことであつた。そこで神学校を有馬から三千メートル奥に入った八良尾と呼ばれる場所へ、また学院と修練院を天草の地に再建するためには我らは非常な努力をした。この（移転の）ために我らは、これらの殿たちから、多くの人手と援助を必要とした。（有馬）ドン・プロタジヨは必要な人員をすべて提供したので、毎日二百、三百、時には千人もの者が働いた。かくておよそ一カ月で、皆が驚嘆するほどの建物が完成した。その中の二つの大きな家屋は、

九十名の同宿を収容できるほどのもので、十名の司祭、修道士たちのための小部屋と、その他に必要な諸々の部屋を有していた。もっとも有馬殿がこの工事に多大の愛情と努力をそそいだ（からそれができた）のである。なぜなら当時は、有馬殿は有馬と島原の城で、急を要する工事を続行中であり、また彼の部下の多くは関白殿からの命令による勤務に絶えず従事していたにもかかわらず、自からの仕事を差しおいてまで、我らのために全力を尽くしてくれたからであった。

天草においても、同じ頃、我ら（イエズス会員）が以前（から）所有していた家屋以外に、（天草ドン・ジョアン）殿が（先に）提供してくれた数軒の家屋から学院が設立された。それはイエズス会員六十名のほかに、六十名の同宿と下僕を同時に収容できるものであった。（天草）ドン・ジョアンも、イエズス会に対する同じ愛着によって、（有馬）ドン・プロタジオが行なったと同じ速やかさと人数をもって、この学院と修練院を完成した。

[十]

天正十九年七月廿五日、遣欧四少年達は天草のコレジヨでイエズス会に入会した。

四少年のイエズス会入会を伝えるフロイス年報（抜）

その間に、巡察師はまず天草の学院を訪問し、そこの修道士たちを慰め、またローマから戻って来た、かの日本人四人の公子をイエズス会に入会させようと思った。日本において偉大な業を行うために、デウスに召されたこれらの公子たちは巡察師とともに上洛し、すこぶる名誉ある扱いを受けた後、有馬ドン・プロタジオ殿と大村ドン・サンチョ殿に教皇聖下よりの贈物を手交して後は、その門出を幸せな最後で飾るべく、浮世を捨ててキリストの勧めに従って、我らの（イエズス）会へ入会しようと決意した。四人の公子は、都へ出発する以前からそのような決意を抱いてはいたものの、（既述の）すべての用務を果たしてしまおうと思ったのであった。

中 略

ついに彼ら（四人の公子）は、自分たちがなすべきことを、さらによく考察するために数日間黙想をした後、巡察師は彼らを天草に連れて行き、一五九一年七月二十五日、聖ヤコボの祝日にイエズス会に受け入れられた。

また（伊東）マンシヨの弟ジュストも、八カ月を経た末に、同様に（イエズス会に）受け入れられた。今や彼らは全員が、それぞれに立派な模範を示しつつあって、我らは彼らが日本の改宗のための偉大な道具となってくれるだろうと期待している。

あ と が き

- ① 短時間の調査にもかかわらず、堀切斜面の土壇から大量の土師器（皿・坏）を中心に、中国産の半磁器やベトナム産の大皿などが出土した事により、城跡の下限年代が判明した事は大きな収穫であった。
- ② 発掘調査に際しては、河浦町教育委員会の適確な計画に基づき、何の支障もなく調査に従事する事ができた。さらに、手柴清人（崇圓寺住職）、鶴田倉造、池田裕之の三氏をはじめとする地元の方々の積極的な御協力に対して厚く御礼を申し述べたい。
- ③ 報告書作成にあたっては、県文化課の平常勤務外の仕事となったため、なかなか計画通りに進行しなかったが、人吉調査事務所の石工みゆきさんと溝口真由美さんの努力により、なんとか発刊にこぎつける事ができた。心配声でしばしば電話をかけてこられた御寄課長に、深くおわびを申したい。

〔 大 田 〕

写 真 图 版



図版1 一町田川の東岸より崇圓寺を望む（寺の裏側が城跡）



図版2 城跡尾根筋のI郭（I郭-②からI郭-①を望む）



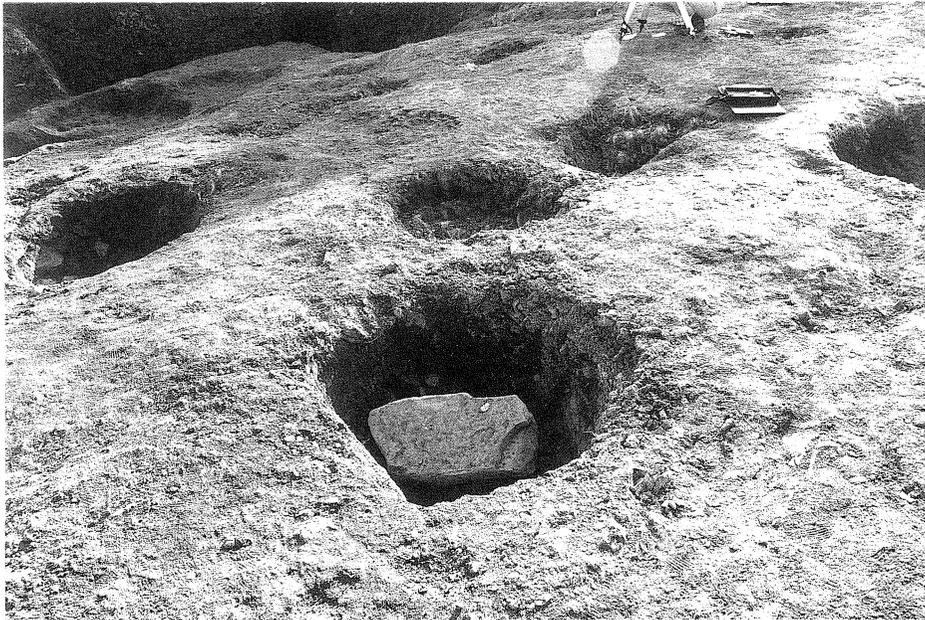
図版3 北西側帯曲輪



図版4 堀切①



図版5 調査区1



図版6 土塚中の墓碑



図版7 堀切②（北側より望む）



図版8 堀切②と掘鉢状の掘り込み



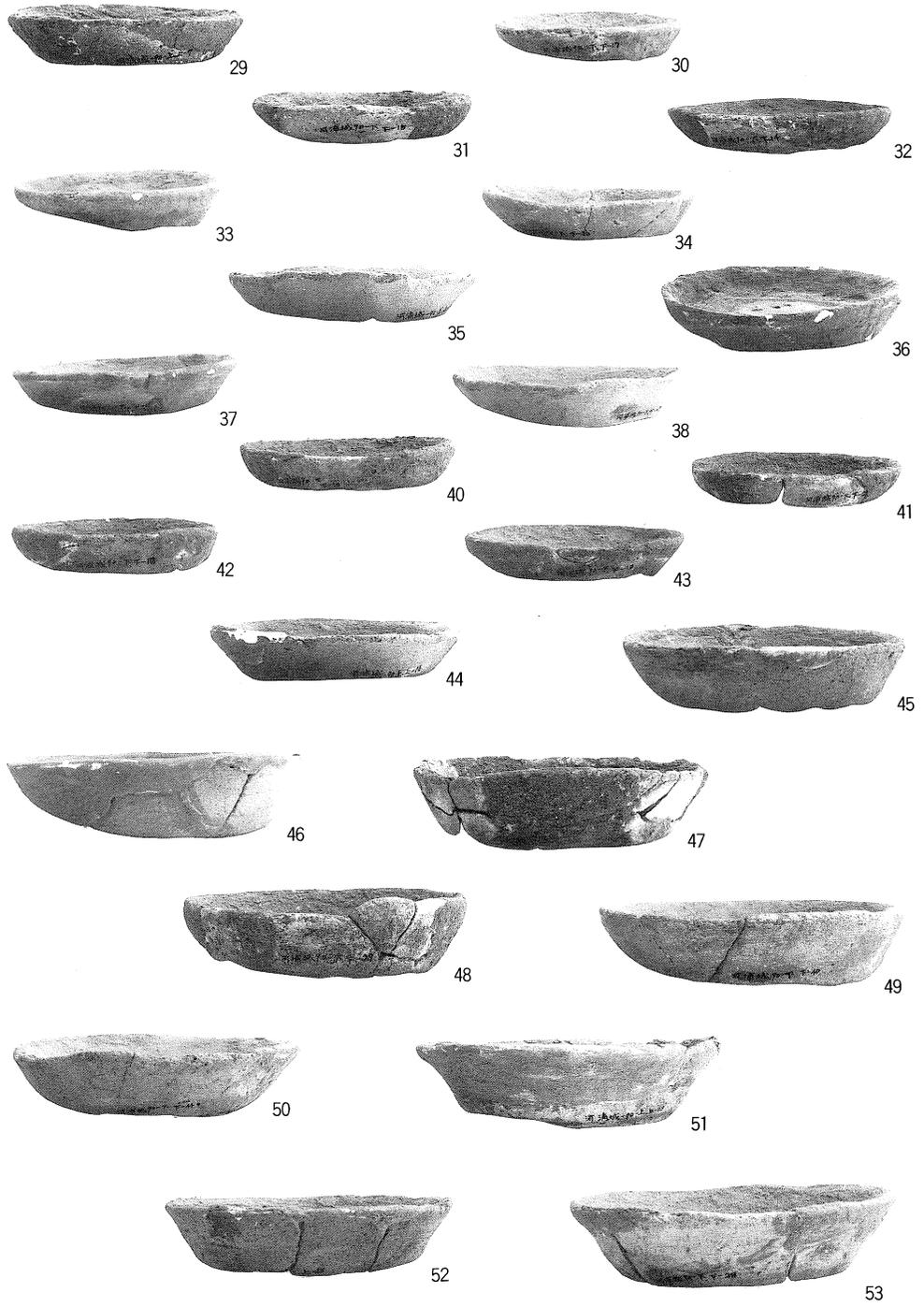
図版9 調査区2



図版10 調査風景



图版11 出土遺物(1)



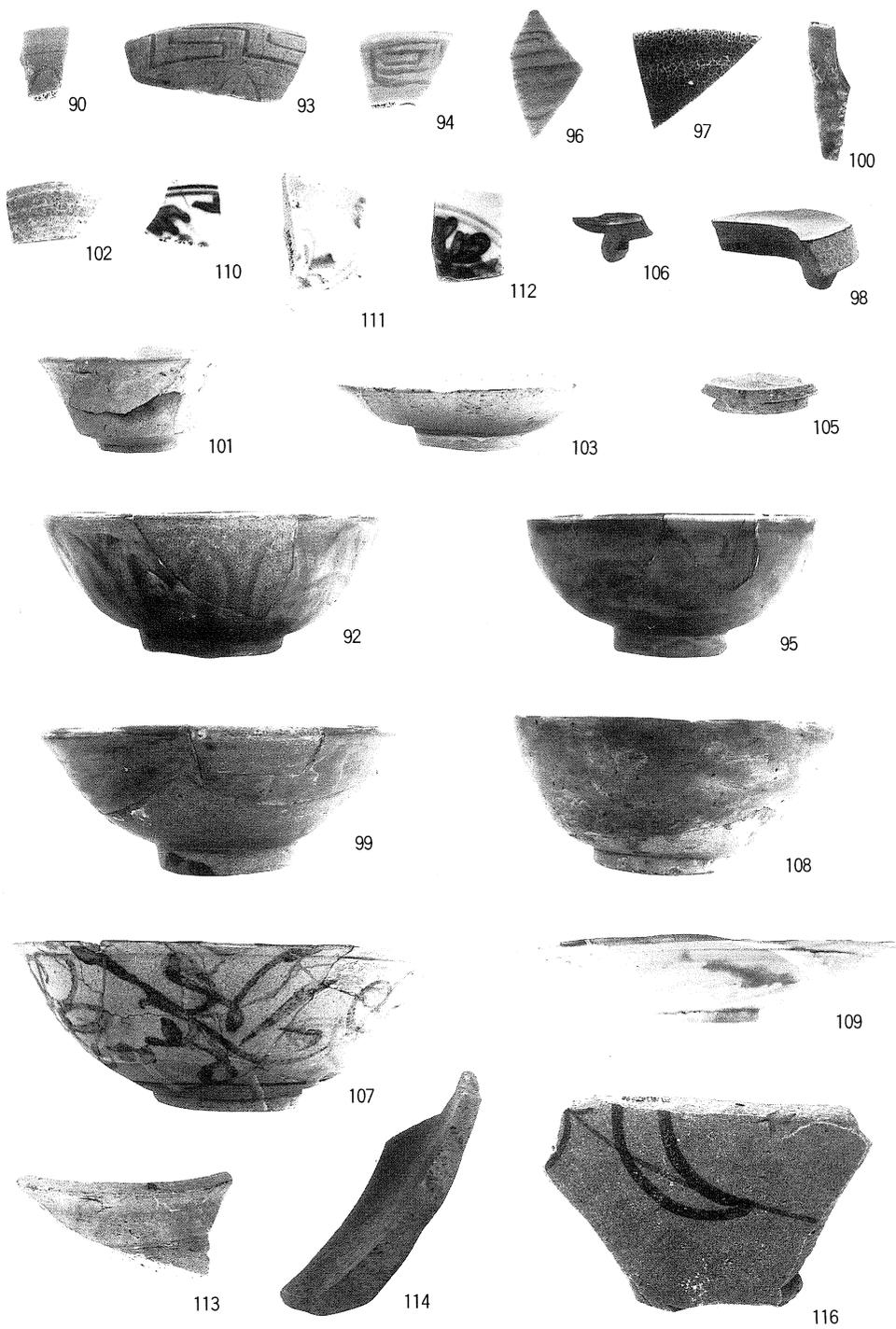
図版12 出土遺物(2)



図版13 出土遺物(3)



図版14 出土遺物(4)



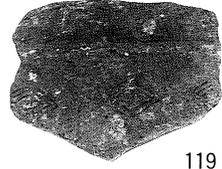
图版15 出土遺物(5)



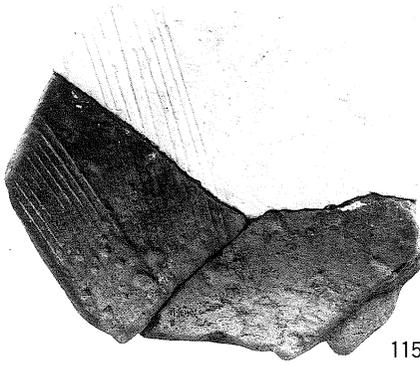
117



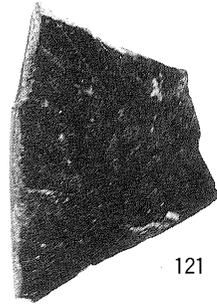
118



119



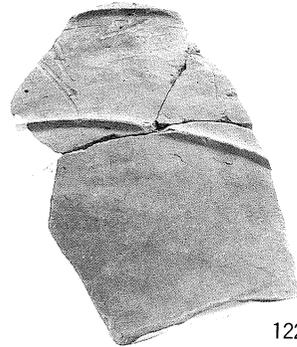
115



121



120



122

河浦町文化財調査報告第1集

かわ ち うら
河 内 浦 城 跡

平成2年3月31日

編集発行：河浦町教育委員会

〒863-12 天草郡河浦町河浦5223

TEL (09697) 6-1111 (代)

印刷：株式会社 大和印刷所

〒862 熊本市戸島町920-11

TEL (096)380-0303